

# 小見川町天神後遺跡

—成田小見川鹿島港線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 2

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

# 小見川町天神後遺跡

—成田小見川鹿島港線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 2

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

下総台地の東部に位置する小見川町は、東に利根川の広大な沖積地、西に利根川に流れ込む小河川によって開析された小台地が形成されています。この地域は、昔から自然環境に恵まれていて、河川沿いの台地上には、先土器時代から古代にいたる多くの遺跡が所在し、特に縄文時代の貝塚が多くみられます。

このたび千葉県土木部は、道路網整備の一環として主要地方道成田小見川鹿島港線地方道道路改良事業を計画しました。そこで千葉県教育委員会は、路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部と慎重に協議を重ねてまいりましたが、路線内の遺跡を現状で保存することが困難であるとの判断がなされ、やむを得ず工事に先だって発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することになり、平成元年度と平成2年度の2回にわたり実施しました。その結果縄文時代前期後半の土器・石器が多く出土し、検出例の少ない当該期の住居跡も認められ、利根川下流域における歴史の一端を究明する上で貴重な成果を得ることができました。

本書を刊行するにあたり、学術資料としてはもとより、郷土の文化を知る上での資料として、また文化財保護の普及資料として大いに活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで種々御指導いただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、千葉県香取土木事務所、小見川町教育委員会をはじめ、関係諸機関にお礼申し上げるとともに、酷暑の中、調査に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

## 凡　　例

1. 本書は、主要地方道成田小見川鹿島港線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書に収載された天神後（てんじんうしろ）遺跡は香取郡小見川町竜谷字桐ヶ谷1,025他に所在し、遺跡コードは344-002を使用した。
3. 発掘調査は平成元年10月6日～平成元年12月13日、平成2年7月1日～平成2年9月28日にわたって実施し、調査部長堀部昭夫、部長補佐阪田正一、班長藤崎芳樹の指導のもとに、主任技師小久賀隆史（平成元年度）、主任技師今泉潔（平成2年度）が担当した。
4. 整理作業は平成3年7月1日～平成3年9月30日にわたり、調査部長天野努、部長補佐阪田正一、班長宮重行の指導のもとに、技師高柳圭一が担当し、小久賀・今泉の助言を得た。
5. 本書の執筆は、第2章第1節及び同第2節7については田村隆、第2章第2節3及び5の土師器・須恵器、第3章奈良・平安時代については半澤幹雄、その他の執筆及び編集は高柳がおこなった。
6. 第2図の地図は国土地理院発行の50,000分の1の地図「八日市場」・「潮来」を使用した。
7. 遺物実測図の遺物断面は、纖維を含むする縄文土器は網点で表示し、須恵器の場合は黒色で塗りつぶした。
8. 土器の分類は、東調査区遺構外出土土器の分類基準を全体に適用した。
9. 東調査区遺構内出土の石器及び土製品は、編集の都合上遺構外出土遺物中で取り扱った。
10. 本書に使用した図面の方位は、座標北を指す。
11. 縄文原体の表記は「日本先史土器の縄紋」（山内 1979）を参考とし、以下のように簡略化した。
$$L \left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \rightarrow L, R \left\{ \begin{matrix} 1 \\ 1 \end{matrix} \rightarrow R, L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \rightarrow LR, R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \rightarrow RL, R \left\{ \begin{matrix} L \\ R \\ R \end{matrix} \rightarrow RLR, R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ r \\ r \\ r \end{matrix} \rightarrow \begin{matrix} r \\ r \\ 0 \text{段多条RL} \\ r \end{matrix} \right. \end{matrix} \right. \right. \right. \right. \right.$$
12. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育厅生涯学習部文化課、千葉県土木部、千葉県香取土木事務所、小見川町教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに西村正衛氏、高橋龍三郎氏、中沢道彦氏、寺崎秀一郎氏、小林謙一氏、松田光太郎氏そして調査補助員の御協力をいただいた。深く謝意を表する次第である。

# 目 次

序 文

凡 例

目 次

## 第1章 序 説

- 第1節 発掘調査に至る経緯 ..... (高 柳) ..... 1  
第2節 発掘調査の方法と経緯 ..... (高 柳) ..... 1  
第3節 遺跡の位置と環境 ..... (高 柳) ..... 2

## 第2章 発 掘 調 査

- 第1節 先土器時代 ..... (田 村) ..... 7  
第2節 東調査区  
    1. 概要 ..... (高 柳) ..... 10  
    2. 1号住居跡 ..... (高 柳) ..... 11  
    3. 2号住居跡 ..... (半 澤) ..... 15  
    4. 土坑 ..... (高 柳) ..... 18  
    5. 溝状遺構 ..... (高柳、半澤) ..... 21  
    6. 遺構外出土の土器 ..... (高 柳) ..... 24  
    7. 石器 ..... (田 村) ..... 44  
    8. 土製品 ..... (高 柳) ..... 51  
    9. 近世の遺物 ..... (高 柳) ..... 51  
第3節 西調査区 ..... (高 柳) ..... 52  
第4節 その他の調査区  
    1. 土坑 ..... (高 柳) ..... 53  
    2. 出土土器 ..... (高 柳) ..... 53  
第3章 調 査 の 成 果 ..... (高柳、半澤) ..... 56  
引用 参 考 文 獻 ..... 66

## 挿 図 目 次

第1図 グリッド配置図.....	2
第2図 遺跡位置図.....	4
第3図 遺跡周辺地形図.....	5
第4図 遺跡全体図.....	6
第5図 先土器時代遺物出土状況図.....	8
第6図 先土器時代遺物実測図.....	9
第7図 東調査区遺構配置図.....	10
第8図 1号住居跡実測図.....	12
第9図 1号住居跡遺物出土状況図.....	12
第10図 1号住居跡出土土器.....	13
第11図 1号住居跡出土土器.....	14
第12図 2号住居跡実測図.....	16
第13図 2号住居跡出土土器.....	17
第14図 5～8号土坑実測図、5号・6号土坑出土土器.....	19
第15図 8号土坑出土土器.....	20
第16図 溝状遺構実測図.....	22
第17図 溝内出土土器.....	23
第18図 遺構外出土土器群別数量比.....	24
第19図 第I・II群土器の分布状況.....	25
第20図 第II群土器の類別分布状況.....	25
第21図 グリッド出土土器(1).....	27
第22図 グリッド出土土器(2).....	29
第23図 グリッド出土土器(3).....	31
第24図 グリッド出土土器(4).....	33
第25図 グリッド出土土器(5).....	35
第26図 グリッド出土土器(6).....	36
第27図 グリッド出土土器(7).....	37
第28図 グリッド出土土器(8).....	40
第29図 グリッド出土土器(9) .....	41
第30図 グリッド出土土器(10).....	42
第31図 東調査区石器出土状況図.....	45

第32図 石器実測図(1).....	46
第33図 石器実測図(2).....	47
第34図 石器実測図(3).....	48
第35図 土製品.....	51
第36図 煙管.....	51
第37図 西調査区遺構実測図.....	52
第38図 その他の調査区土坑.....	54
第39図 その他の調査区出土土器.....	55
第40図 浮島・興津式文様構成要素変遷模式図.....	59

## 写 真 図 版 目 次

図版 1 天神後遺跡周辺航空写真	図版11 縄文時代石器
図版 2 遺跡近景	図版12 溝状遺構出土土器 土製品
作業風景	8号土坑出土土器
図版 3 Loc.5丁遺物出土状況	5・6号土坑出土土器
3E-22北壁土層断面	図版13 グリッド出土土器(第I群土器)
図版 4 1号住居跡	グリッド出土土器(第I群土器)
1号住居跡遺物出土状況	図版14 グリッド出土土器(第I・II群土器)
図版 5 2号住居跡	グリッド出土土器(第II群土器)
2号住居跡遺物出土状況	図版15 グリッド出土土器(第II群土器)
図版 6 1号土坑 2号土坑 5号土坑	グリッド出土土器(第II群土器)
6号土坑 8号土坑	図版16 グリッド出土土器(第II・III群土器)
図版 7 5号溝 道路状遺構 棚列	グリッド出土土器(第IV群土器)
図版 8 1号住居跡出土土器	図版17 グリッド出土土器(第V~IX群土器)
図版 9 2号住居跡出土土器	東調査区外出土土器
図版10 先土器時代遺物	

## 表 目 次

第1表 先土器時代石器計測表.....	7
第2表 遺構内出土石器計測表.....	49
第3表 集中地点石器組成表.....	50

# 第1章 序 説

## 第1節 発掘調査に至る経緯

千葉県土木部では、道路整備の一環として主要地方道成田小見川鹿島港線地方道道路改良事業を計画し、道路の改良を実施することになった。これに伴い路線内に所在する埋蔵文化財について、千葉県教育庁文化課に照会があった。小見川町周辺の利根川下流域南側丘陵上には、貝塚等の著名遺跡が多く所在しており、古くから注目を集めている地域でもあり、路線内にかかる遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会では千葉県土木部と慎重な協議を重ねた。その結果事業計画の変更は困難であり、やむを得ず記録保存することで協議が整い、その機関として財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

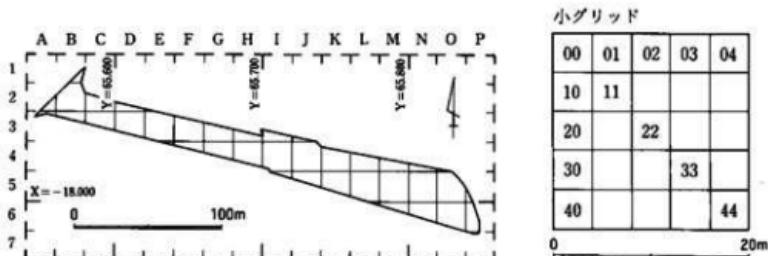
## 第2節 発掘調査の方法と経過

天神後遺跡の発掘調査は平成元年10月6日～平成元年12月13日にわたり、7,350m<sup>2</sup>のうち西側5,600m<sup>2</sup>を対象に確認調査を上層については560m<sup>2</sup>、下層については224m<sup>2</sup>で実施した。その結果対象区域西端に道路状遺構・櫛列各一条が認められ、本調査を実施した（西調査区）。他に対象区域中央付近で土坑が4基散発的に検出された（その他の調査区）。下層は確認調査の結果、4点の遺物の出土が認められたが、うち3点が近接して出土したことから、次年度にその周辺部を拡張して本調査を実施することにした（Loc.5J）。

未調査であった東側1,750m<sup>2</sup>については、平成2年7月1日～平成2年9月28日にわたり、上層の確認調査を175m<sup>2</sup>、統いて1,575m<sup>2</sup>の本調査（東調査区）を実施した。その結果住居跡2軒（縄文時代・平安時代各1軒）、土坑4基、近世溝6条の遺構と、縄文時代前期の土器を中心約6,000点の遺物を検出した。下層については70m<sup>2</sup>で確認調査を実施し、3点の遺物の出土が認められたが、散漫な出土状況から周辺部を拡張することで調査を終了した（Loc.5O）。また前年度確認済みのLoc.5Jの下層本調査を192m<sup>2</sup>で実施し、更に7点の遺物の出土をみた。

調査区内のグリッドの設定については、公共座標を用い、発掘調査を実施する調査区全体に、20m方眼のグリッドを設定し、南北軸はアラビア数字を、東西軸はアルファベットを付し、また20mのグリッド内に4m方眼の小グリッドを設定し、25分割し東西方向を西から00～04、南北方向を北から00～40までのアラビア数字として、北西隅を起点に6M-23等の呼称で表記した（第1図）。

なお本調査に先行する確認調査は、上記の発掘区を利用し、第4図のように上層遺構の確認



第1図 グリッド配置図

については $2 \times 4\text{ m}$ のグリッドを全体の10%、下層については $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドを4%行うこととした。

本遺跡の調査区は対象区域の東端と西端、その間の確認グリッド拡張のみで終了した区域に大別される。したがって調査区の呼称は東端を「東調査区」、西端を「西調査区」、その間は「その他の調査区」として取り扱った。

### 第3節 遺跡の位置と環境

天神後遺跡は千葉県香取郡小見川町竜谷（りゅうざく）字桐ヶ谷1,025他に所在する。本遺跡が所在する小見川町は、房総半島北側に展開する下総台地の北東部に位置する。台地の北縁を利根川が東流し、河口まで約25kmを測る。台地の縁辺部は利根川に流入する小河川によって、樹枝状に開析され、複雑な地勢を形成している。

本遺跡は利根川に流れ込む黒部川とその支流により開析された丘陵上に位置し、黒部川沖積地に面している。黒部川沖積地は利根川に開口する支谷の中でも、大きい部類に属し、幅は開口部で約4km、広い所で約8km、奥行きは利根川からの直線距離で約5~8kmを測り、支谷は分岐して小支谷となって丘陵の各所に侵入している。本遺跡はこの支谷の北西端の小支谷に接する海拔42mの丘陵上に位置し、低地面との比高差は約18mで、台地斜面は急峻となっている。北西端の小支谷の開口部は約400mの幅を有し、直ぐに北方の内野と南西方の竜谷の二方向に分岐し、更に後者は1.4km奥まった所で、西方の油田、南方の神生の方向に分岐している。本遺跡はこの分岐点の北側台地に立地し、小支谷を挟んだ南方に向油田貝塚、東南方に大宮台貝塚群が位置している。遺跡の北方700mでは、黒部川沖積地の小支谷と利根川に流入する小野川に脈絡を持つ小支谷がそれぞれ東西から入り込み、幅約200mの狭小な地勢を形成しており、内野貝塚が所在している。また南西約3キロには、九十九里浜に流れ込む栗山川水系の支谷の末端が伸び、利根川・栗山川と流路を異にする二つの水系が近接している。

上記のように複雑な地勢をなす本遺跡の周囲には、貝塚を中心とする縄文時代の遺跡が多く分布している。利根川下流域・霞ヶ浦沿岸の貝塚は、既に明治期に陸平・椎塚貝塚等が発掘・紹介され、古くより注目されていた。黒部川沖積地を臨む丘陵上では阿玉台貝塚が明治27年八木柴三郎・下村三四吉両氏によって発掘・紹介され、「阿玉台式」の標準遺跡として広く知られている（下村・八木 1894）。その後多くの遺跡が発掘されているが、当該域において組織的な調査が開始されるのは、地域環境と文化の相互関係の総体的理解を主眼に、昭和25年の白井通路貝塚の発掘調査に端を発する西村正衛氏を中心とする早稲田大学考古学研究室の一連の調査であろう。

本遺跡と同一の支谷を臨む遺跡としては、縄文時代早期後半を主体とする城之台貝塚（第2図5）、中期前半を主体とする遺跡として木内明神貝塚（同4）、内野貝塚（同2）、向油田貝塚（同6）、白井通路貝塚（同7）、白井雷貝塚（同8）、白井大宮台貝塚（同9）、中期から後期にかけての遺跡では神生貝塚（同11）、後～晚期では清水堆遺跡（同3）が位置している。本遺跡に関連する前期後半の土器を散布する遺跡としては、小塙野I遺跡（同12）、六部塚遺跡、八幡遺跡等が知られており、また黒部川沖積地を挟んだ対岸の丘陵には阿玉台貝塚、良文貝塚が立地している。

本遺跡北方の小野川水系に立地する遺跡としては前期後葉の集落址である毛内遺跡（同18）、中期初頭の標準遺跡である下小野貝塚（17）、中期前半を主体とする三郎作貝塚（同14）、中期末葉の集落址である多田遺跡（15）、後期では台畠貝塚（16）が知られている。また黒部川・小野川両溪谷に跨まれ、水郷を経て利根川に開口する小支谷には後期加曾利B式を主体とする大倉貝塚群（同13）が位置している。

本遺跡の周辺部には、木之内・向油田貝塚等中期前半の大形貝塚が寄り合って存在している。特に南東約1.5kmに位置する大宮台貝塚群は、大小の貝塚が大宮台地を取り巻いて差し渡し100mを越す環状貝塚を形成している。また対岸には阿玉台・良文貝塚等最大級の貝塚が位置している。このことから当該域が、霞ヶ浦西岸部と並んで当該期の中心地であったことがうかがえる。一方こうした発展の前段階である前期後半の遺跡は顕著とは言えず、比較的大規模な貝塚が知られている霞ヶ浦沿岸とは対照的なあり方を示している。

上記の貝塚等の貝類から、環境変化の復元を試みた西村正衛氏によると、先土器時代末期に始まる海進現象は、「条痕文土器のこの時期は、利根川水系においても、鹹水の侵入が非常に高まった頃」と推測されている（西村 1984）。以降前期前半においては前代同様利根川溪谷を遡った支谷の奥端部まで鹹水の影響が見られるが、後半になると小貝川左岸の丘陵に立地する向山貝塚では海退の兆候が認められるものの、中期の霞ヶ浦西岸部から小見川町の黒部川溪谷に臨んだ地域では、鹹水産貝類をもって貝塚が構成され、中期前半の大規模な貝塚が多く存在している。しかし後期まで存続するものは非常に限定され、後・晚期の貝塚の多くは加曾利E



- 1 : 天神後遺跡 2 : 内野貝塚 3 : 清水堆遺跡 4 : 木内明神貝塚 5 : 城ノ台貝塚  
 6 : 向油田貝塚 7 : 白井通路貝塚 8 : 白井雷貝塚 9 : 白井大宮台貝塚 10 : 八本貝塚  
 11 : 神生遺跡 12 : 小塚野Ⅰ遺跡 13 : 大倉南貝塚 14 : 三郎貝塚 15 : 多田遺跡  
 16 : 台烟貝塚 17 : 下小野貝塚 18 : 毛内遺跡 19 : 妙見堂遺跡 20 : 山川遺跡 21 : 吉原三王遺跡

第2図 遺跡位置図

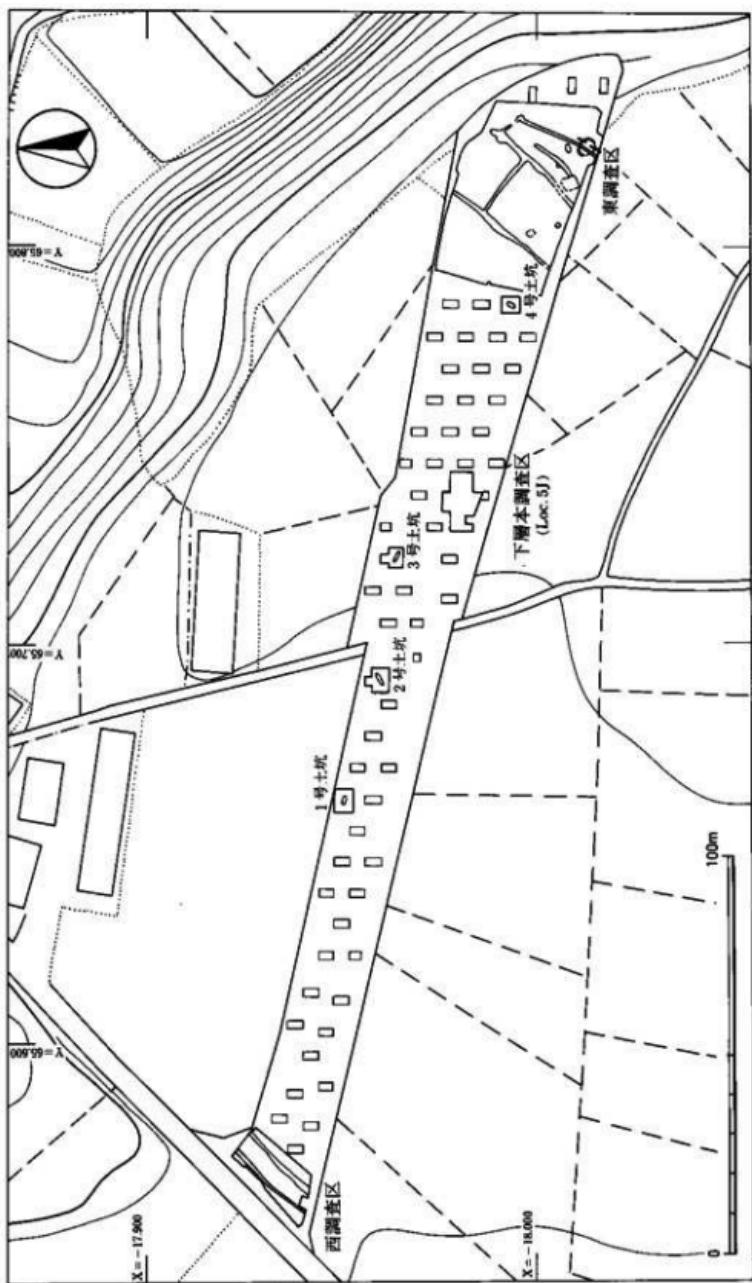


第3図 遺跡周辺地形図（縮尺：1/10,000）

式の後半を基点に形成されるものが多いことから、西村氏は加曾利E式後半に海退等の自然環境の変化に伴う居住地転換の動きを想定し、その後の中心が東京湾沿岸部に移ることを指摘している。後期になると海退が徐々に進展し、鹹水から淡水の貝塚への移りゆきが、利根川を多少週った荒海貝塚・吉原貝塚等で確認されているが、利根川河口から約35kmの佐原市の大倉南貝塚ではなお鹹水産の貝類が主体となっており、加曾利B式期の佐原市周辺までは外洋水の影響を受けていたことがうかがえる。

以上を考慮し本遺跡周辺の環境を推測すると、城之台貝塚の成果から早期後半にはこの一帯の沖積支谷は鹿島灘方面から寄せた外洋水の侵入を受けていたことが明かであり、前・中期を通じ波静かな内湾的性格をもった景観の場所となり、中期前半を中心内湾的魚撈活動が繁栄していたと想定される。しかし近年近接の清水堆遺跡の調査が実施され、安行2式の住居内貝層が検出され、ヤマトシジミを主体としたアカニシ等鹹水産の貝を少々含むことが判明していることから、後期も後半になると外洋水の影響の度合いに変化が生じ、生業形態にも影響を及ぼす結果になったと思われる。

第4図 遺跡全体図



## 第2章 発掘調査

### 第1節 先土器時代

土層 Loc. 4 Mを標準とした。表土、漸移層下にソフトローム層(III層)があり、ハードローム質に移行するが、ハードローム層を掘り始めるとすぐにVI層が露呈し、IV層・V層の一部は膨張化しているらしい。第2黒色帯は安定しており、上部明色部(VII層)と下部暗色部(IX層)が識別される。以下褐色ローム(X層)を経てMLに至る。

Loc. 5 J 使用痕つき剝片4点(5・8・9・12)、剝片3点(10・11)、石核1点(13)、台石1点(7)、計9点の遺物から構成されている。産出層準はVII層～VI層で、大体VII層上面を中心としている。剝片は不整なものばかりであるが、使用痕の観察されるものが多い。また、石器生産の痕跡に乏しい。

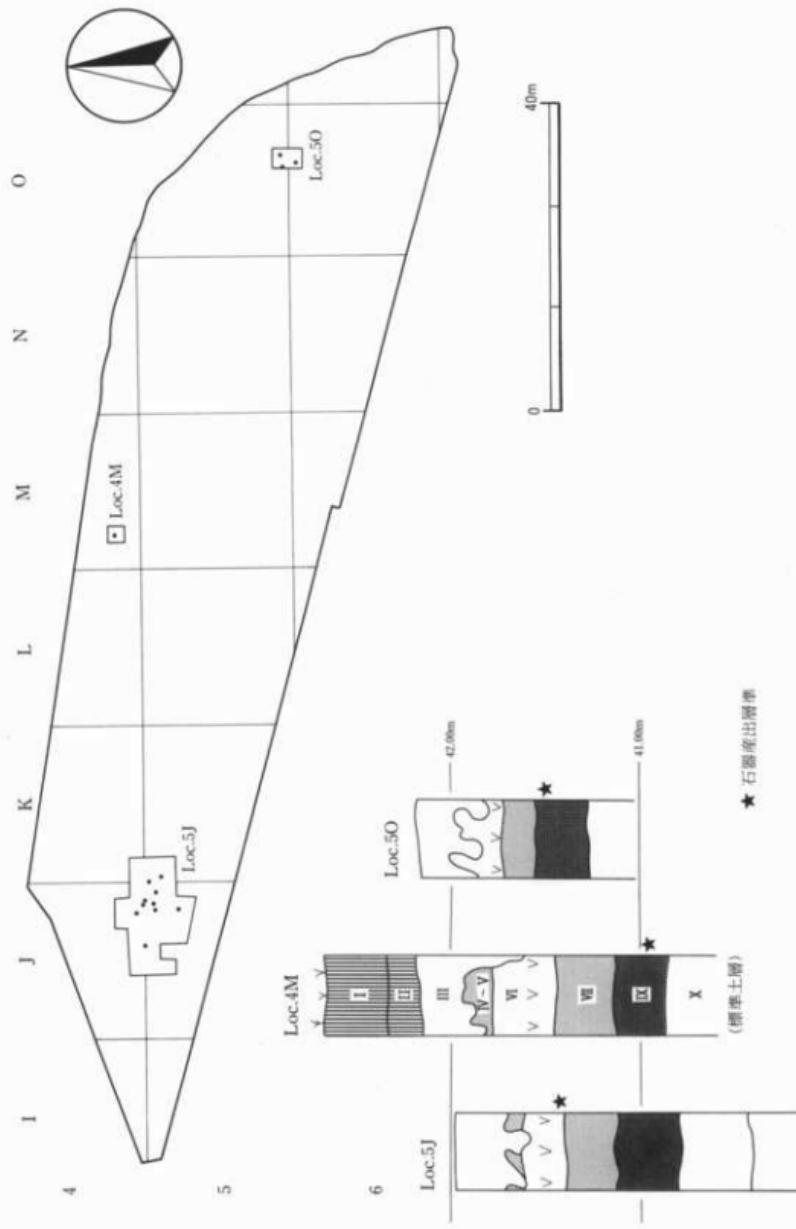
Loc. 4 M 第2黒色帯下部から使用痕つき剝片(1)が単独で出土した。

Loc. 5 O 第2黒色帯中部から、剝片2点(2・3)、使用痕つき剝片1点(4)の計3点が出土している。

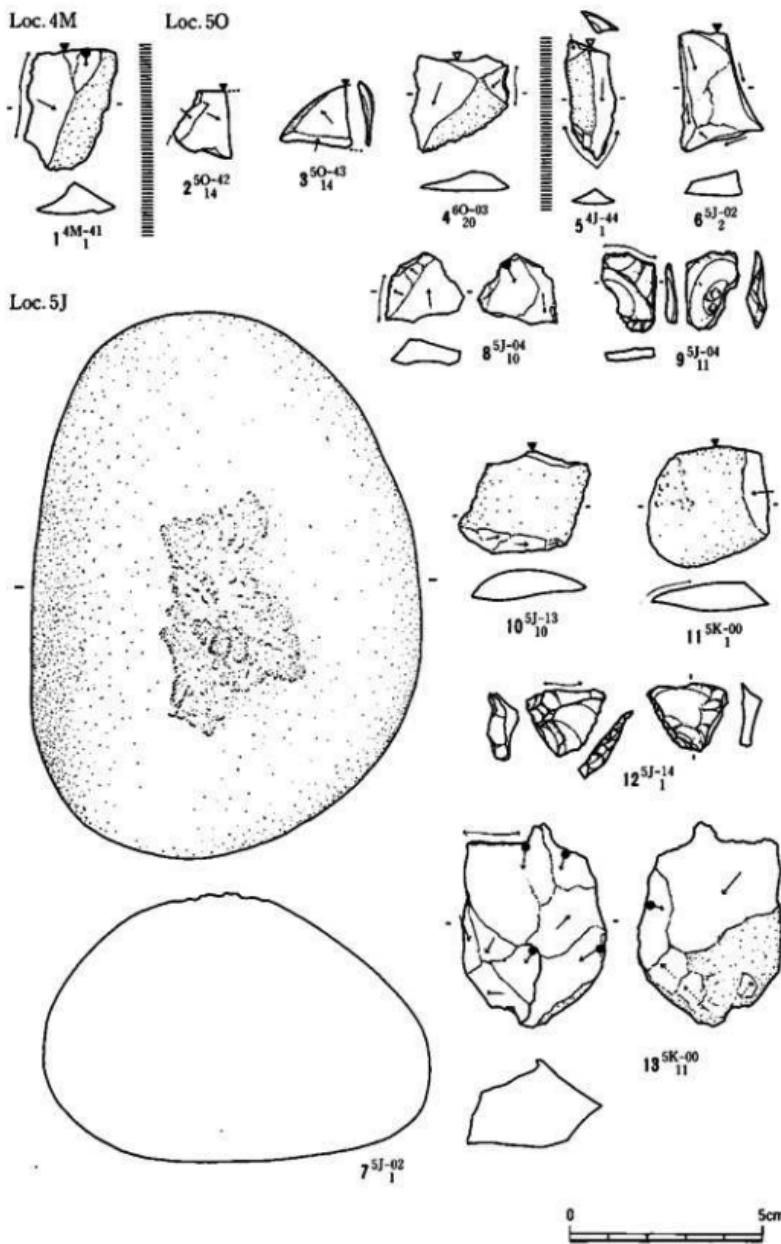
まとめ 本遺跡から遺物が出土しているのは、上記の3地点にすぎず、また、各地点ともに少量の石器しか保有していない。ウォブストは、いくつかの前提条件のもとで、あるテリトリー内に1,000年間に形成される遺跡の数を計算している(Wobst 1974)。それによると、ファミリー・キャンプ(家族を中心とした小集団のキャンプ)が5,000ヶ所、ミニマム・バンド(複数の家族の集合)のキャンプが70ヶ所になるという。これはかなり内輪な数字であるというが、前提条件の差異を考慮したとしても膨大なキャンプが形成されていたにちがいない。本遺跡の様相は、ウォブストの言うファミリー・キャンプに近いものであったのかもしれない。

第1表 先土器時代石器計測表

登録番号	分類	計測値 (mm)	重量(g)	石 材	備 考
4J-44-1	UF	30.5×13×3	1.21	チヨコレート頁岩	頭部欠損
4M-41-1	UF	22×26×8	5.63	流紋岩	頭部欠損
5J-02-1	台石	141×97.5×67	1316.90	砂岩	完形
5J-02-2	フレイク	31.5×21.5×7	3.55	流紋岩	完形
5J-04-10	UF	18×21.5×6	2.16	チヨコレート頁岩	素材O E F
5J-04-11	UF	15×21.5×3	0.94	白滲頁岩	切出状刃器
5J-13-10	フレイク	26×33×8	7.68	安山岩	完形
5J-14-1	UF	19×18.5×7	1.95	凝灰岩	完形
5K-00-1	フレイク	30×31.5×9	8.93	砂岩	完形・打痕
5K-00-11	石核	52×37×31	50.97	粘板岩	
50-42-14	フレイク	18×14×4	1.27	粘板岩	破片
50-43-14	フレイク	16×19×3	0.96	安山岩	完形
60-03-20	UF	26×25.5×6	3.49	安山岩	頭部欠損



第5圖 先土器時代遺物出土狀況圖

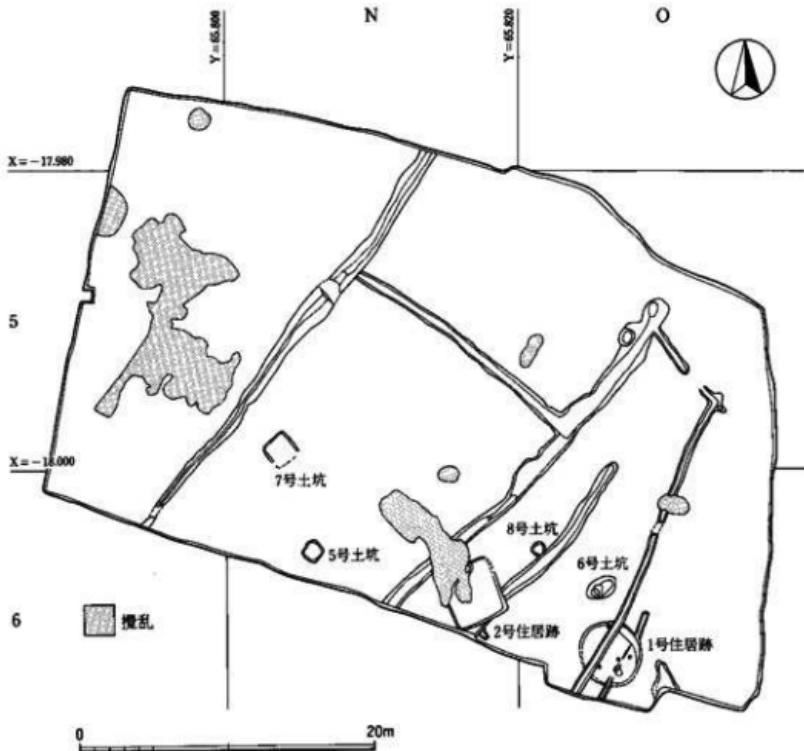


第6図 先土器時代遺物実測図

## 第2節 東調査区

### 1. 概要

東調査区の面積は1,575 m<sup>2</sup>で、検出された遺構は縄文時代及び平安時代の住居跡各1軒、土坑4基、近世溝6条で、いずれも散漫な分布を示しているが、住居跡・土坑等は東に片寄る傾向にある。調査区の所々には風倒木等の擾乱が7ヶ所存在し、特に西側に広く認められる。溝の内5条は北東から南西方向にほぼ平行して走り、2軒の住居跡を切っており、残りの1条はそれ等に直交している。また西側には水道管が埋設されており、7号土坑と5号溝を切っている。東調査区は海拔42 m前後の平坦な地勢を形成しているが、調査区の東端は急峻な斜面となっており、低地面との比高差は約18 mを測る。遺物は総数で約6,000点出土し、縄文時代前期の土器が圧倒的多数を占め、全面に出土している。特に1号住居跡周辺の東南部分には第II群土器が、北西部分には第I群土器が多く認められる。なお東調査区では先土器時代の遺物が3点出土している (Loc. 5 O)。



第7図 東調査区遺構配置図

## 2. 1号住居跡

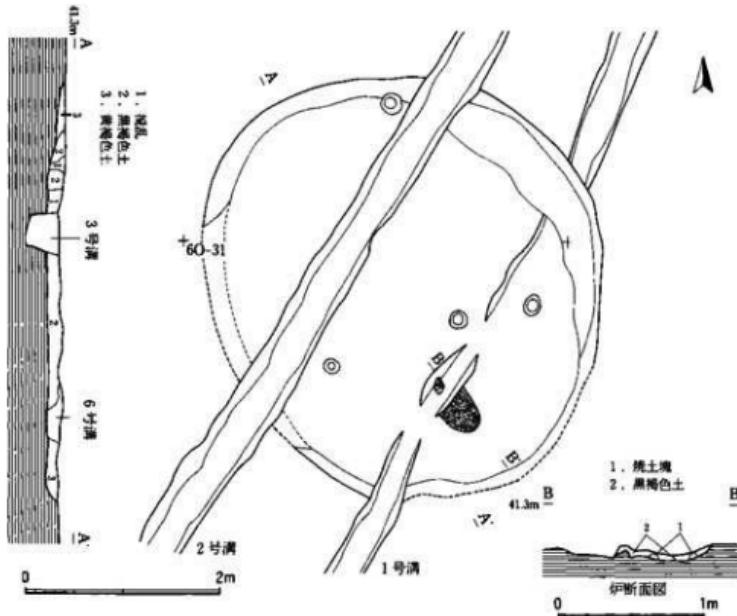
台地の東側縁辺に当たる、60-21-31に位置し、住居の周囲は平坦であるが、30m東で急峻な斜面となっている。

住居跡は、南西部分を2号溝に、南部分を1号溝に切られ、形状の全貌を確認できなかったが、やや南北に長い円形を呈し、推定径は4~4.6mを測る。検出面からの掘り込みは10cm弱で、壁の立ち上がりは緩やかである。床はほぼ平坦で、硬化面が認められず全体に軟弱で、1・2号溝の擾乱が及んでいる。壁溝は検出されず、柱穴と思われるものは4個存在するが、それ等の配置は不規則で、ピットの径は20cm前後と大差ないものの、深さは8~33cmと一定ではない。住居跡内の堆積土は浅く、根の混入と思われる擾乱が所々認められ、僅かに中央に黒褐色土、壁付近に黄褐色土の2層に分離し得るのみである。

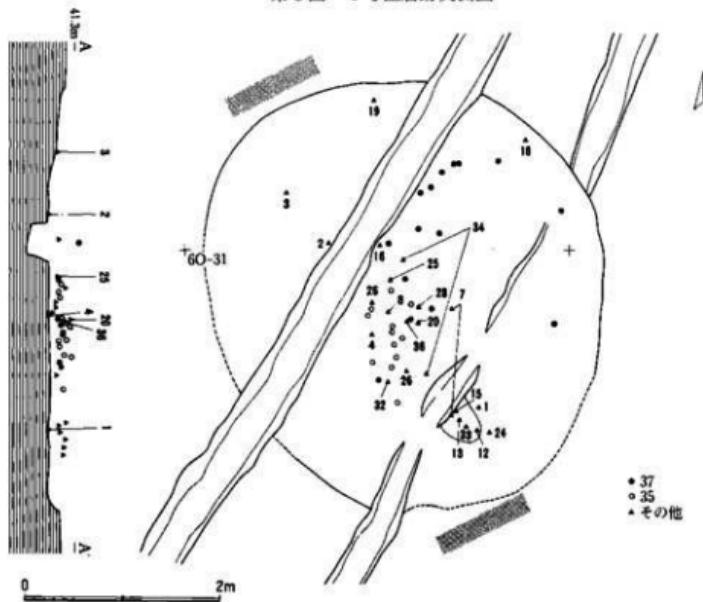
炉は南東よりの所で検出され、地床炉である。西半分は1号溝に壊され、痕跡が僅かに残り、床面と炉の底面とのレベル差は15cmで、覆土に焼土塊が認められる。

出土遺物は土器が総数163点、剝片が12点、手づくね状土製品が1点出土した。床面からは土器が4点出土したのみで、多くは住居跡の中央付近から北にかけての床上10~20cmに集中した。土器の内訳は、第I群土器が2点、第II群土器が98点(貝殻文の12類土器27点、無文の20類土器37点)、第IV群土器が35点、その他の土器が28点で、床面出土の土器はいずれも第II群に属する。

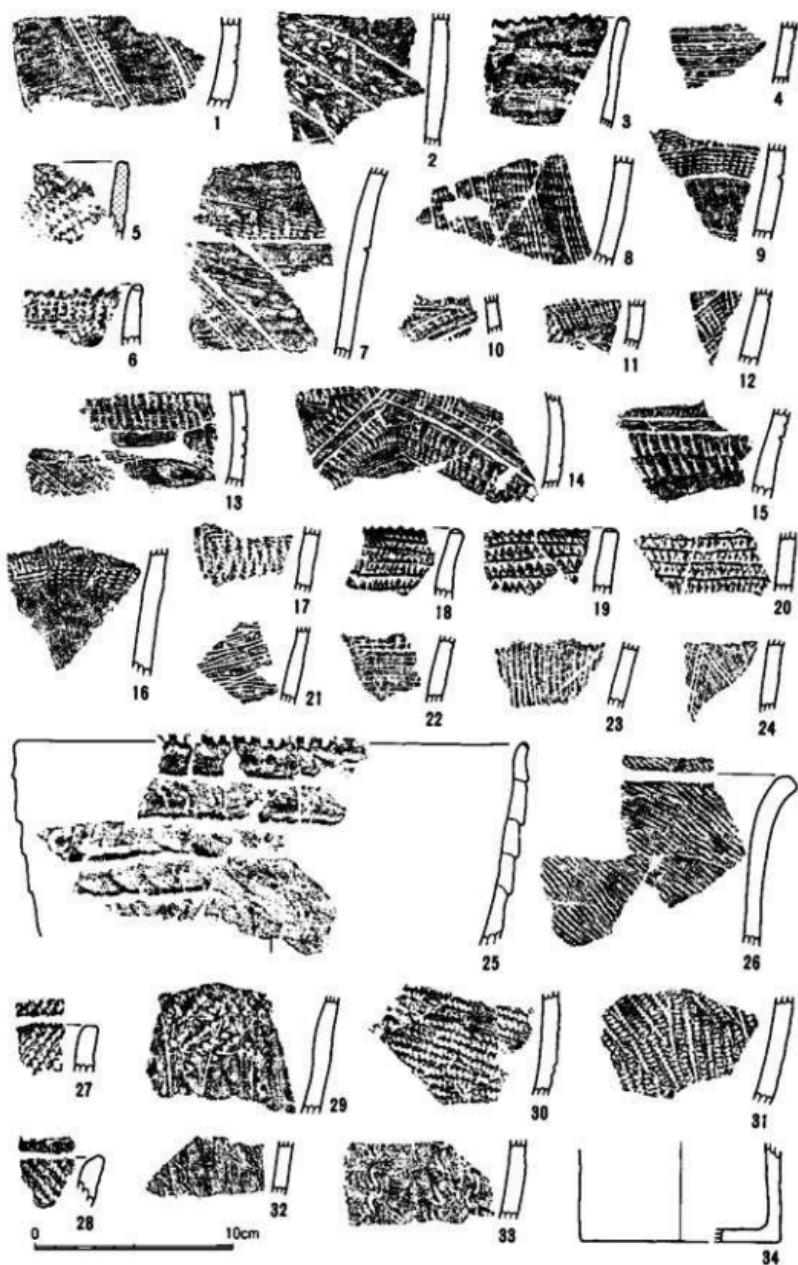
1~4は床面から検出された土器である。1は第II群12類で、貝殻腹縁による貝殻文を沈線区画後磨消している。2は第II群15類で、2列一単位の刺突が斜位の沈線区画内に充填される。3は第II群20類で、小波状の口縁で横位方向の擦痕を残す。4は第II群16類で、半截竹管により横位方向の平行線文が施される。5~37は住居内堆積土から検出された土器で、5を除き第II群に属する。5は第I群1類に属し、口縁部は平坦で体部にLRが施され、胎土に纖維を包含する。6~16は第II群12類A種に分類される。6は口唇部に刻みを持ち、貝殻文を巡らせ半截竹管による押し引き沈線文で区画される。7~15は沈線を区画文として貝殻文を磨消しており、いずれも三角形と菱形を組み合わせた幾何学的文様を構成する。11~13の区画沈線は細く、鋭利な施文具が使用されており、同一個体と思われる。15は区画後貝殻文を施文しているが、平行沈線の上位には篠状工具による文様が認められる。17は第II群12類D種に属し、アナグラ属貝殻による波状貝殻文が施される。18~20は第II群11類で、同一個体である。18~19は北壁際、20は中央付近で出土した。口唇部に刻みを有し、2列一組の三角文が横位に巡らされ、三角文の一辺が向かい合い幅2mmの無文帯を作出している。第25図178~182と同一個体であろう。21~24は第II群16類に属する。21~22は半截竹管による横位の平行線文で、22の上位には押し引きの平行沈線文がみられる。23は綫位の集合沈線、24は斜位の集合沈線が交差している。25は第II群20類に属する無文土器で、口唇部に刻みが加えられ、四段の輪積みの製作痕



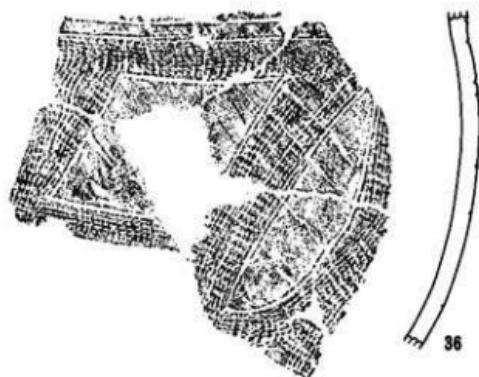
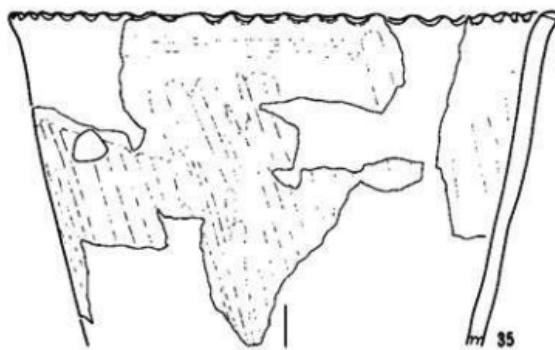
第8図 1号住居跡実測図



第9図 1号住居跡遺物出土状況図



第10図 1号住居跡出土土器(1)



0 10cm



0 20cm

第11図 1号住居跡出土土器(2)

を持つ。輪積み部分には凹凸文ではなく、弱い指頭圧が認められる。一体に粗野な作りで、輪積みの段が消された部分もみられる。残存状況は1/4で、推定径は26cmを測る。26～28は第IV群2類に属する。26は口縁部がやや外反しRLが、27はLRLが、28はRLが施される。29はLRで下半にはヘラケズリが認められ、縦位の沈線がみられる。30はRLR、31はRLが施される。32・33はS字状の結節文が縦位方向に加えられる。34は深鉢の底部で、横位の擦痕が頬著で、一部縦位のヘラミガキが認められる。直に立ち上がる器形で、残存状況は1/2、径は10.2cmを測る。35は無文の深鉢で、口縁部は小波状を呈し、やや外反する。口縁直下には横位の擦痕、頸部下に右傾のヘラミガキが認められる。残存状況は1/2弱で、推定径は28cmを測る。破片は住居中央付近の床上10～20cmでまとまって検出された。36は第II群12類で、住居跡中央で出土した。胎土・調整等から37と同一個体と判断されるが、文様構成の復元が充分にできなかったため、別に取り扱った。胸腹に張りを与える深鉢で、文様は菱形と弧状の幾何学的文様で構成される。37も第II群12類に分類され、口縁部を外反させ胴部に張りを与え、底部に至ってしまう深鉢である。口縁部には幅1.5～2cmの整った縦の条線帯が、4～5mm間隔で配され、その直下には幅1cmの半截竹管状工具によるC字状の刺突文が1cm前後の間隔で巡らされ、更に頸部には同一施文具により、2条の平行線文と断続的な平行沈線文が1条加えられ、計4～6条の平行線文を有する。体部は三角形や木葉状の幾何学的文様で構成され、沈線は鋭利な工具が用いられるが、部分的に刺突文と同一の工具である幅1cmの平行線文が認められる。胎土は緻密で細砂を含み、推定径は口縁部で51cmを測る。住居の中央から北より多く認められた。

本住居跡は床面出土の土器及び主体的な土器から判断して、興津II式の所産と思われる。

### 3. 2号住居跡

本住居跡は調査区の南より、1号住居跡の西6mの6N-24に位置する。立地は台地の平坦面で、床面の標高は41.9mである。

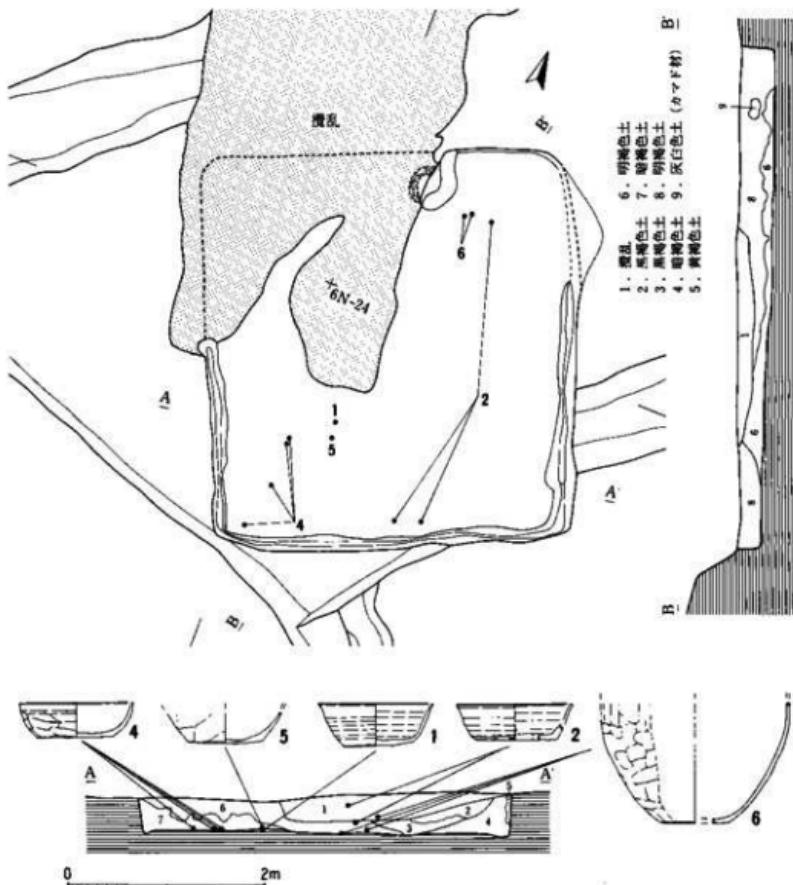
平面形態は4m×3.8mの正方形を呈し、主軸はやや北西方向であるが、北西隅が擾乱で、北東壁が6号溝で壊されている。壁は検出面からの高さが23～50cmで、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。壁溝はカマド付近の北壁を除く東・南・西壁で検出され、幅はほぼ15cm、深さは2～9cmで、西壁が深く東・南壁が浅く、断面はU字形である。床はソフトロームを削って床としており、やや北よりに傾き、貼り床はおこなっていない。柱穴・貯蔵穴は全く認められていない。覆土はローム粒を多く含む明褐色土からなり、東・西部に暗褐色土が堆積する。

カマドは西半分が擾乱で壊されており、辛うじて右の袖部と火床の残りと思われる焼土が認められるのみである。

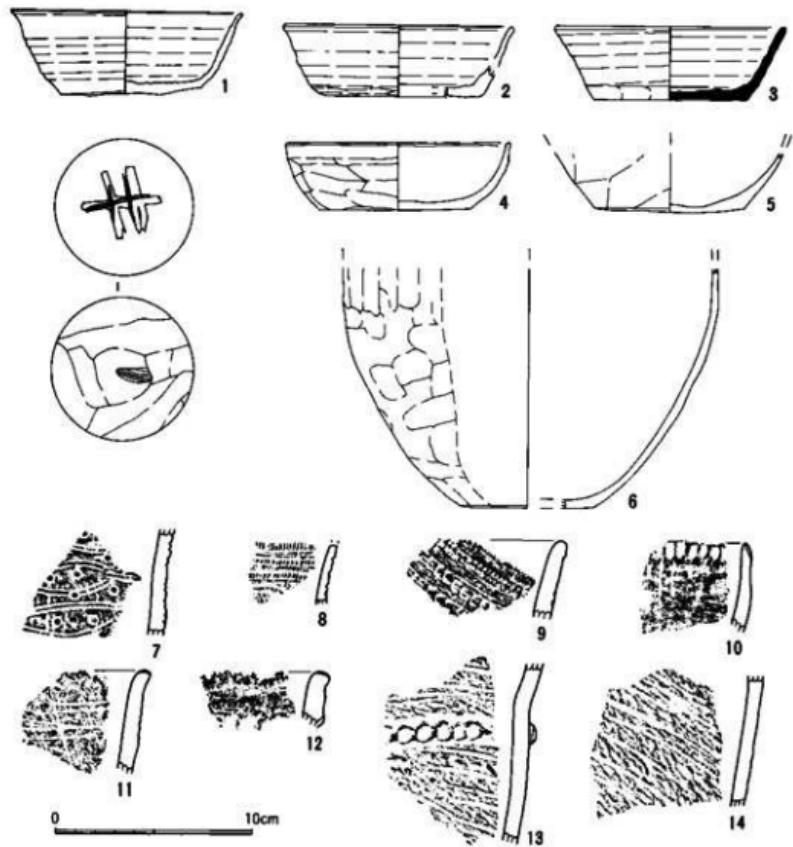
出土遺物は総数134点である。床面からは4点出土し、他は覆土中で、内訳は土師器32点、

縄文土器は第I群土器が3点、第II群土器が48点（諸磯a式・浮島I a式15点）、第IV群土器31点、第VIII群土器が11点、その他の土器が9点であった。

1・2は所謂箱形を呈するロクロ土師器杯である。1は口径12.0cm、器高4.4cm、底径7.2cm。底部を平坦に作り、体部は下端で強く外反した後直線的に開き、口縁部はやや細く外反する。底部は回転糸切り後ほぼ全面に手持ちヘラケズリが施される。胎土は砂粒を多く含み密である。色調は体部外面は褐色及び暗褐色、底部外面及び内面は橙色を呈する。口縁部内面に煤の付着がみられる。また、底部に「+」の墨書・刻書がみられ、墨書きされた文字をなぞるように刻書が行われている。2は口径12.0cm、器高3.7cm、底径8.3cm。口縁部はやや外反する。底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリを施す。胎土は密で色調は淡黄褐色を呈する。3



第12図 2号住居跡実測図



第13図 2号住居跡出土土器

は須恵器杯である。口径 12.0 cm、器高 3.8 cm、底径 8.0 cm。平坦な底部から直線的に体部を立ちあげる。底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリを周辺にのみ施し、体部下端にもヘラケズリを施す。胎土は砂粒の他小礫を含むが密で、色調は褐色及び暗褐色を呈する。焼成が良好であることや器形から籠み須恵器とした。内面底部から体部下半にかけて被熱による剥離痕がみられる。4～6 は土師器である。4 は杯である。口径 11.6 cm、器高 3.5 cm、底部 7.7 cm。平坦な底部から体部は円みをもって立ちあがる。体部外面には横方向の手持ちヘラケズリが施され、口縁部及び内面にはナデ調整が施される。胎土は密で色調は内面淡黄褐色、外面は一部が淡黄褐色を呈する。5・6 は甕の底部である。5 は小破片で底径 7.6 cm、底部及び体部外面にヘラケズリを施す。内面には被熱による剥離痕が見られる。6 は底径 7.0 cm で底部にヘラケズリを

施す。体部下端には横方向の手持ちヘラケズリ、上部には縦方向の手持ちヘラケズリを施す。胎土は密で、色調は外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。

縄文土器は7～12まで第II群に、13・14は第VIII群に分類される。7は第II群3類で、撲糸文Lを地文に半截竹管による木葉文と円形竹管の刺突が施される。8は第II群4類C種で、地文が明確でない。体部には半截竹管による曲線的文様が施される。9は第II群4類に属するが、波状口縁で口縁部に沿って連続爪形文ではなく、幅6mmの半截竹管による押し引きが施され、上端のものは間隔が密で、一部変形爪形文的にもみえる。10は第II群14類に属し、口縁部に太い条線帯が巡らされ、その下に縦位の平行線文が僅かに認められる。11は第II群16類に属し、半截竹管による平行線文が斜位及び横位に施される。12は第II群13類で、口唇部に刻みを有し輪積み部分に凹凸文が加えられる。13・14は第VIII群の粗製土器で、縄文施用後条線が施される。

床面出土土器（1～6）の様相は8世紀第4四半期のものであると考えられ、本住居跡の実年代もほぼその年代を与えることが可能であろう。

#### 4. 土 坑

##### 5号土坑

調査区の南端、6N-11に位置する。立地は台地の平坦面で、検出面の標高は42.1mである。平面形態は長軸1.3m、短軸1.25mのほぼ方形を呈し、底部では1.15×1.05mで、長軸の方向はN-40°-Eである。検出面からの深さは25cmで、壁は若干の傾斜をもって立ち上がる。底面は比較的平坦で堅い。覆土はロームを含む暗褐色土からなる。

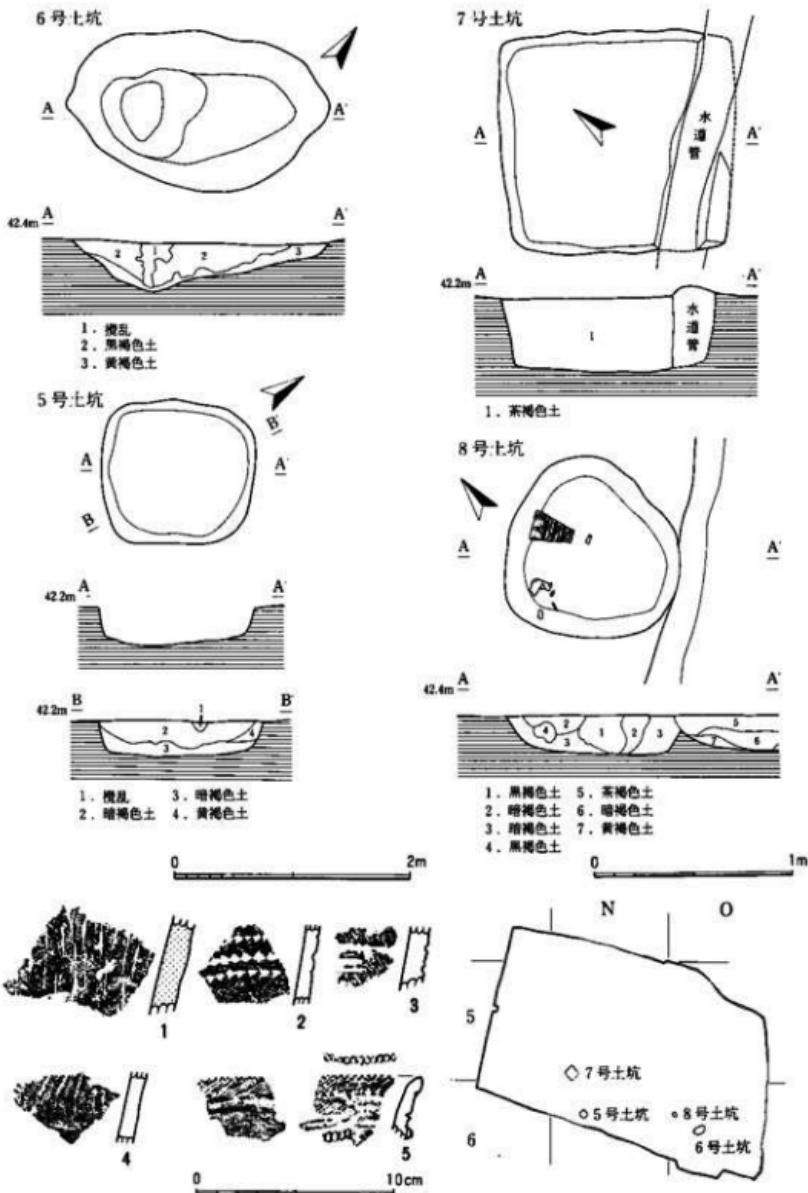
出土遺物は総数21点で、その内訳は第I群土器が8点、第II群土器が6点、第IV群土器が3点、第V群土器が1点、その他の土器が3点である。第14図1は第I群7類に属する。纖維を包含し、器面には縦位の沈線が断続的に施される。2は第II群11類に属し、2列1組の三角文が横位に施される。3は第V群に属し、沈線で区画された縄文帶内に2条の短沈線と刺突が交互に配され、胎土に砂粒を多く含み、器厚は9mmを測る。4は第IV群で、0段多条LRの原体が用いられる。

縄文時代前期中葉～後葉の土器が多く出土しているが、構築時期は不明である。

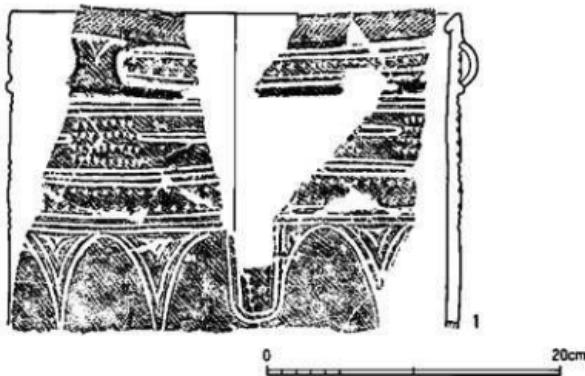
##### 6号土坑

調査区の東南部分、1号住居跡の北1mの6O-11・6O-21に位置し、検出面の標高は42.25mである。平面形態は2.25×1.4mの梢円形を呈し、底部は1.7×0.8mで、西部がやや深く掘り込まれ、検出面からの深さは42cmを測る。主軸方向はN-60°-Eである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸があるがしっかりしている。覆土は黒褐色土と黄褐色土の2層からなる。

出土遺物は総数26点で、内訳は第II群土器が6点、第IV群土器が6点、第V群土器が2点、



第14図 5～8号土坑実測図, 5号(1～4)・6号(5)土坑出土土器



第15図 8号土坑出土土器

第VII群土器が1点、その他の土器が11点である。第14図5は第V群に属する。口唇部には刻みが加えられ、口縁の折り返しの部分に刺突が配される。頸部には刻みを有する隆帯が巡らされ、その間に断続沈線が加えられる。また口縁内側にしの無筋縄文が施される。

縄文時代前期～後期の土器が出土しているが、構築時期は不明である。

#### 7号土坑

調査区のやや西より、5N-40・5N-41に位置する。検出面の標高は42.1mである。平面形態は一辺1.9mの正方形であるが、東側隅は水道管理設により壊されている。検出面からの深さは0.6mで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦でしっかりしている。覆土は上から下まで単一の茶褐色土でロームブロックを多く包含する。遺物は出土していない。

構築時期は平面形態や堆積土から比較的新しい時期と思われる。

#### 8号土坑

調査区の東より、2号住居跡の東3mの6O-10に位置する。検出面の標高は42.25mである。平面形態は0.9×0.9mの不整円形を呈し、底部は0.7×0.7mで、南部部分の上面は6号溝に切られている。検出面からの深さは0.2mで、壁は若干の傾斜をもって立ち上がり、底部は平坦である。覆土は粗いローム粒を多く含み、4層に分離される。

出土遺物は五領ヶ台式土器1点と土器片3点、石匙(第32図2)である。五領ヶ台式は左半分が表面で底面より5～10cm上で、右半分が裏面では底面から、石匙もほぼ底面より出土した。第15図の土器は1/4の残存で、口縁部の推定径は30.8cmを測り、胴部から口縁部にかけて直立に立ち上がる大形の深鉢で、現存の器高は21.5cmである。口縁部文様帶は上端を縄文帯、下端を隆起線で区切られ、それ等に沿って2本一組の区画沈線が巡らされ、その間に三角形刻文が2列加えられ、4単位の橋状把手が配される。頸部は3本一組の平行沈線が上下端とその中

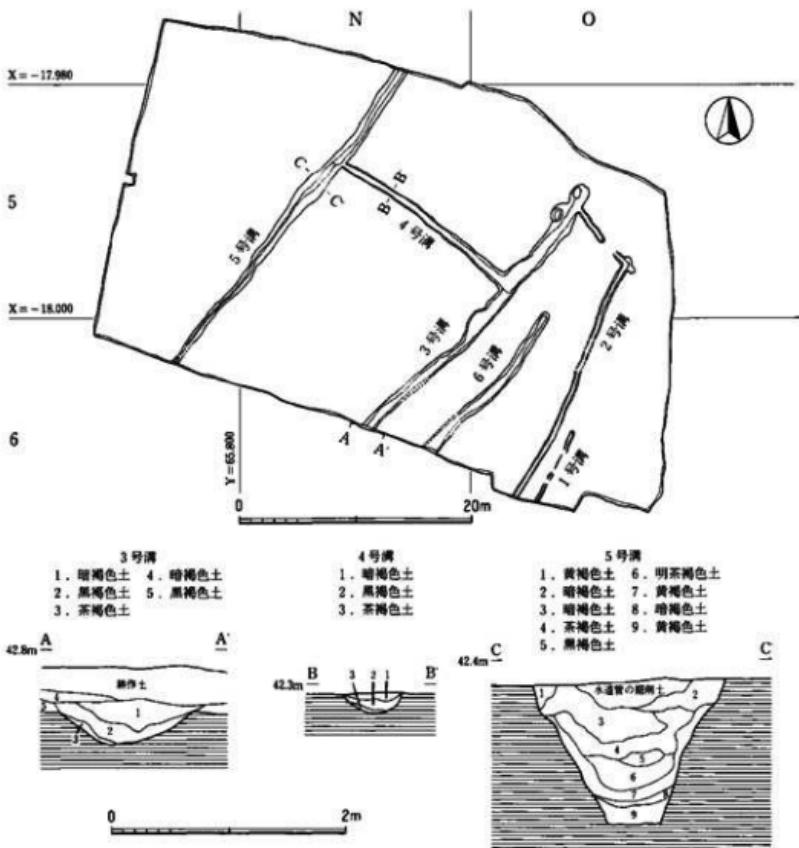
間に巡らされ、文様が上下に分離され、上段に4列の三角形刻文（柵状把手に合致）と起終点の完結した平行沈線が交互に配され、下段には区画沈線に沿って三角形刻文が施される。胸部文様帶にはY字状の懸垂文が等間隔に施され、柵状把手の中間点にU字文及び三角形刻文が配される。口唇部は断面三角形を呈し、口縁内側に突出し折り返されている。地文はL Rで口縁部の縄文帶のみ横位方向、他は縦位方向に回転施文されている。器厚は9mmで、胎土は細砂粒を多く含み緻密で、焼成は良好である。

本土坑は出土土器から、五領ヶ台II a式の所産と思われる。

## 5. 溝状遺構

本調査区では6条の溝が検出され、ほぼ全域に展開している。1～3・5・6号溝は北東一南西の方向にはほぼ平行して、また4号溝が北西一南東の直交する方向に走り、3号溝に接し直角に折れ、その延長上である北東方向に伸びている。1～6号溝とも底面は平坦であるが、多少凹凸を有し、傾斜に規則性は認められないものの、2・6号溝は北側に低くなる傾向にある。幅は40～170cmで、深さは1号溝が15cm、2・3・6号溝が20～40cm、4号溝は10～40cm、5号溝は40～90cmで、3号と4号溝底面の高低差は25cmを測り、後者が低く、4号と5号溝の高低差は70cmを測り、後者が低い。断面はU字形が多く、5号溝南半はV字形を呈する。

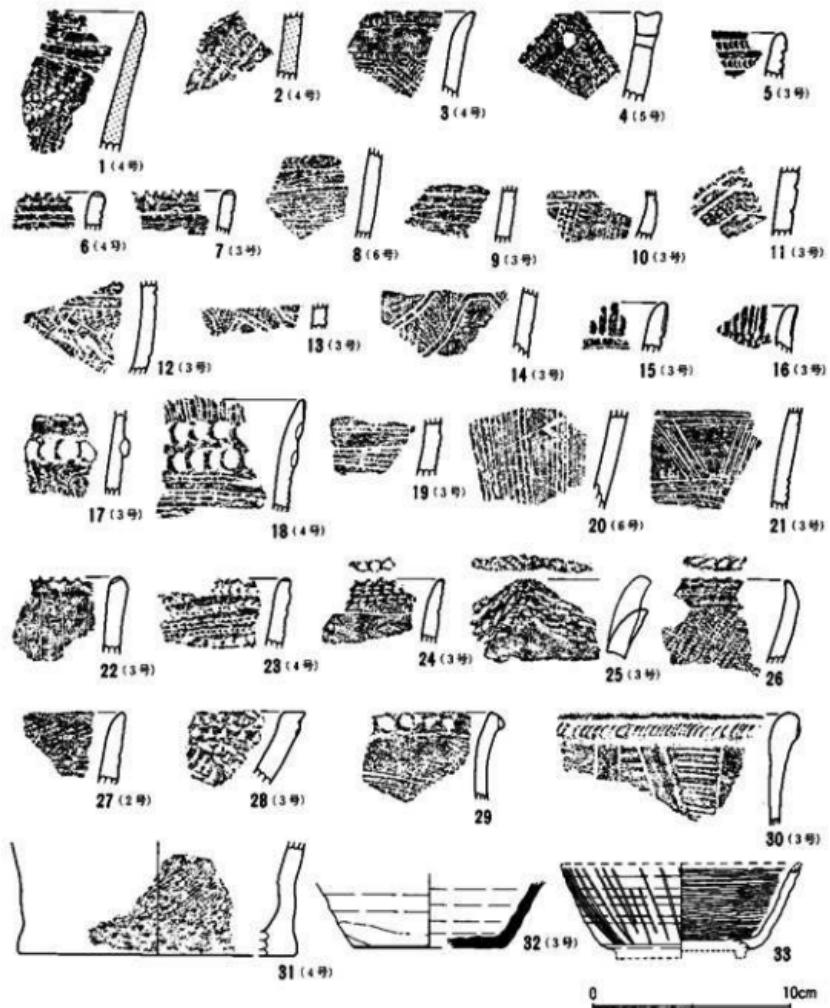
各溝とも遺物を出土しているが、ほとんどが縄文土器で、須恵器・土師器が少々である。縄文土器は包含層の様相に合致し、前期後半の土器が多数を占める。1・2は第I群8類A種で、第22図53と同一個体で、口縁部に沿って3条の押し引き文、体上半に断続的な押し引きと円形刺突文が施される。3～5は第II群4類に分類され、3は燃糸文しが横位・斜位に施され、4は波頂部直下に焼成前に貫通孔が穿たれる。6～9は第II群10類に属し、6・7は口唇部に刻みが加えられ、8・9には平行線文が施される。いずれも変形爪形文がはっきりしない。10～12は第II群12類A種に属し、磨消貝殻文で文様が構成される。13・14は同類C種で、同一個体である。15・16は第II群14類に属するが、16には僅かに貝殻復縁圧痕文が認められる。17・18は第II群13類で、いずれも輪積みとは無関係に凹凸文が加えられ、17には貝殻復縁圧痕文、18には口縁部に条線帯、体部に半截竹管による平行線文が施される。19・20は第II群16類A種で、半截竹管が用いられる。21は第II群7類D種で、斜位の沈線が施される。22は第II群16類C種で、口唇部内側に刻みが加えられる。23は第II群18類C種で、口唇部に刻みを有し押し引きの半截竹管による有節文を多段に巡らす。24～26は第II群の範疇で、24は口縁部に2条の半截竹管による押し引き文が巡らされ、口唇部に刻みが加えられる。25は波状口縁で波頂部が内側に指頭で張り出され、口唇部にR L、口縁部に沿ってLのZ字状結節文が3条加えられる。26は口縁部が尖鋭で内側に屈曲し無文となる。27は第IV群に属する。28は第V群に属し、棒状工具による押し引きの短沈線で文様が構成され、口唇部は平坦となる。29は第VIII群の粗製土器で、



第16図 溝状遺構実測図

口縁端部に紐線を巡らし縄文を地文に条線が施される。30は口縁端部に工具による押捺を加えた紐線を巡らす深鉢で、口縁部が肥厚する。体上半には横位の条線が施され、縦位・斜位の平行線文施工後区画内が磨消される。安行3a式の粗製土器であろう。

32は須恵器で、1/8程度の破片であり、口縁部を欠くため口径及び器高は不明、底径は8.4cmである。底部を平坦に作り体部は直線的に開く。底部及び体部下端に手持ちヘラケズリが施される。内外面ともに灰白色を呈し、口縁部外面のみ灰色もしくは暗灰色を呈する。重ね焼きの痕跡と考えられる。胎土は雲母粒・白色砂粒・黒色砂粒の他径3mm内外の小砾も見られ、粗い感じを受ける。以上のことから考え、東海系の須恵器であると考えられる。33はロクロ土器器高台付杯で、口径約12.2cm、器高約4.8cm、底径8.4cm。全体の1/4の破片であり、高台部分



第17図 溝内出土土器

は残存していなかったが、高台の貼り付けによる立ちあがりが観察できたので高台付杯とした。体部内面にヘラミガキを施し、外面に放射状暗文状のヘラミガキを施す。内外面ともに赤褐色を呈するがヘラミガキにより内面のほうが赤みが強く感じられる。胎土は砂粒を多く含むが全体的に緻密であり、焼成も良好である。いずれも8世紀後半のものと考えられる。

溝状造構は全て同じ時期と特定はできないが、3～6号はその配列から時期的に近似しているように思われる。恐らく近世の所産であろう。

## 6. 遺構外出土の土器

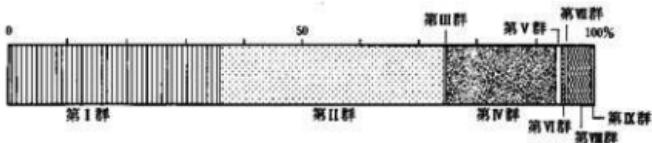
本調査区の遺構外出土の縄文土器は、前期から中・後・晚期各期を通じて出土しており、総数は5,261点である。ほとんどが小片で、器形を復元し得る資料は極めて少ない。群別の比率は第18図に示しているが、前期中葉～後葉に属するものが圧倒的多数を占める。それぞれの内訳は以下の通りである。

第I群土器：前期前半の繊維包含の土器	1,329点
第II群土器：前期後葉の竹管文と貝殻施文の土器	1,398点
第III群土器：前期末葉の土器	1点
第IV群土器：前期後葉から中期初頭の繊文施文の土器	674点
第V群土器：中期初頭の土器	43点
第VI群土器：中期後葉の土器	15点
第VII群土器：後期前葉の土器	8点
第VIII群土器：後期中葉の土器	142点
第IX群土器：後期後葉から晚期前葉の土器	9点
時期の特定できない土器	1,642点

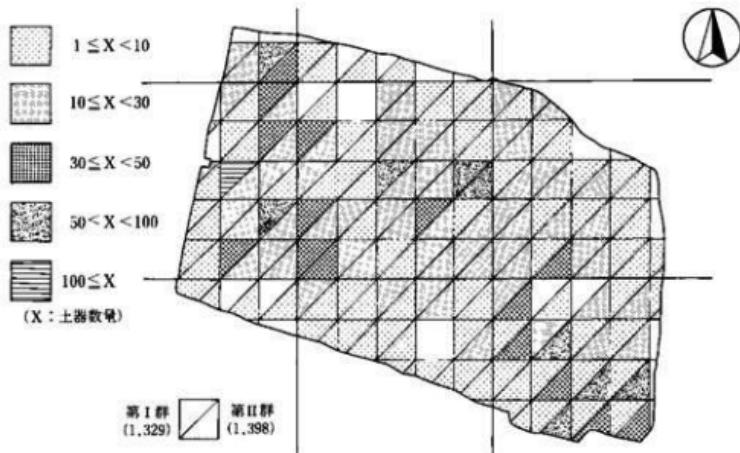
上記の他土器が65点、須恵器が34点出土している。第I群は全体の37%、第II群は39%を占め、2つの群を合わせると76%に達する。

縄文土器は調査区内全域で検出されたが、特に多いのは調査区南東部分と北西部分である。群別の分布をみると、第I群は調査区の西半に多く、東半が希薄になる傾向がみられる。第II群は東南部分から中央にかけて多く、特に1号住居跡付近の60で顕著である。第IV群は東南部分が多く、第V～VII群も出土量は僅少だが同様の傾向がうかがえる。第VIII群は全体的に散漫に分布し、数量的な多寡はあるものの、目だった特徴は形成されない。

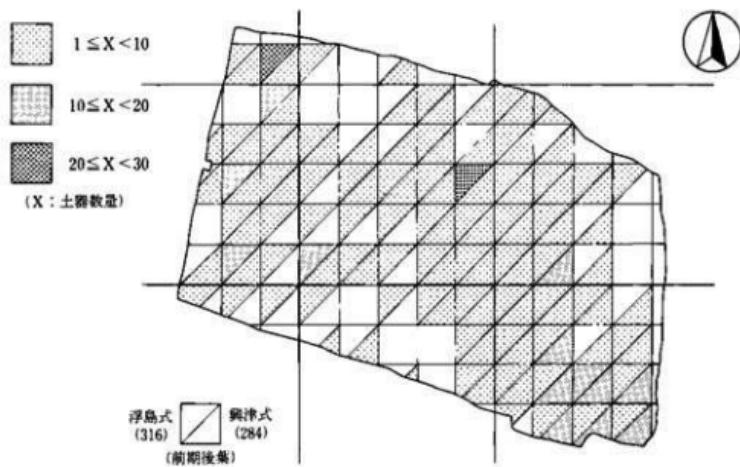
第I群と第II群の出土率はほぼ同じだが、分布では異なった傾向が認められる。両群とも全域から出土しているものの、第I群は北西部分で、第II群は南東部分で優勢で、中央付近では近似した割合となっている。第II群は後述の様に弁別困難な要素が存在するため、浮島式と興津式を同一群で取り扱ったが、分別可能な属性による出土数量の差異をみると、前者が西半に多いのに対し、後者は東南部分に多いことが指摘できる。この差異は1号住居跡を中心とする後者の立地のあり方を反映したものと思われる。



第18図 遺構外出土土器群別数量比



第19図 第I・II群土器の分布状況



第20図 第II群土器の類別分布状況

#### 第I群土器

本群は胎土中に多量の植物繊維の混入が認められる前期前半の土器で、本遺跡の主体を占める一群である。総数1,329点。縄文や竹管文等によって器面が飾られることが多く、この時期の遺構は検出されていない。

1類(1~17)。縄文の付された土器であるが、さらに押し引きによる刺突文を持つものも本類とした。使用原体の燃方は2段が多いが、軸の縄の燃と同方向に絡げた附加条を異方向に回転させ羽状にしたもの(13)、1段の燃の原体を異方向に回転させ羽状にしたもの(11~16)も存在する。括れを有する深鉢には、屈曲部に押し引きによる刺突を有するものが多々みられる(6・7・10・11)。6・7・10は半截竹管状工具が使用されており、2条巡らさる。8・9は口縁がやや外反し、0段多条の縄が用いられ、8は斜位方向に回転される。15には条自身で結節を作つて燃を止めたZ字状の結節文が僅かに認められる。

2類(18~24・31~38)。縄文を地文に櫛齒状工具・半截竹管による沈線を描出したもので、いずれも縄文施文後沈線を加える。櫛齒状工具は太く、4本を単位とし流水状に施されたもの(18・20・21)、コンバス状のもの(23)、小波状のもの(24)がみられる。18・20・21は同一個体で、胴部が緩く括れ、胴上半は流水状の文様、下半はR Lの異方向回転による羽状縄文で構成される。口縁は小波状を呈する。半截竹管による沈線が加えられるものには、工具を立てることで沈線内を陥没するもの(31~32)、断続的押し引きが加えられるもの(33~35)があり、いずれも口縁部や屈曲部分に配される。37の体上半には半截竹管の曲線的な文様が施される。36は附加条とみるべきか断定できないが、条に沿つて竹管文を加える部分も認められる。

3類(26~30)。円形竹管による刺突をランダムに加えたもの。口縁部は緩い波状を呈する(26・27)。27~30は胎土・色調・調整が近似する。26にはR Lの地文がある。

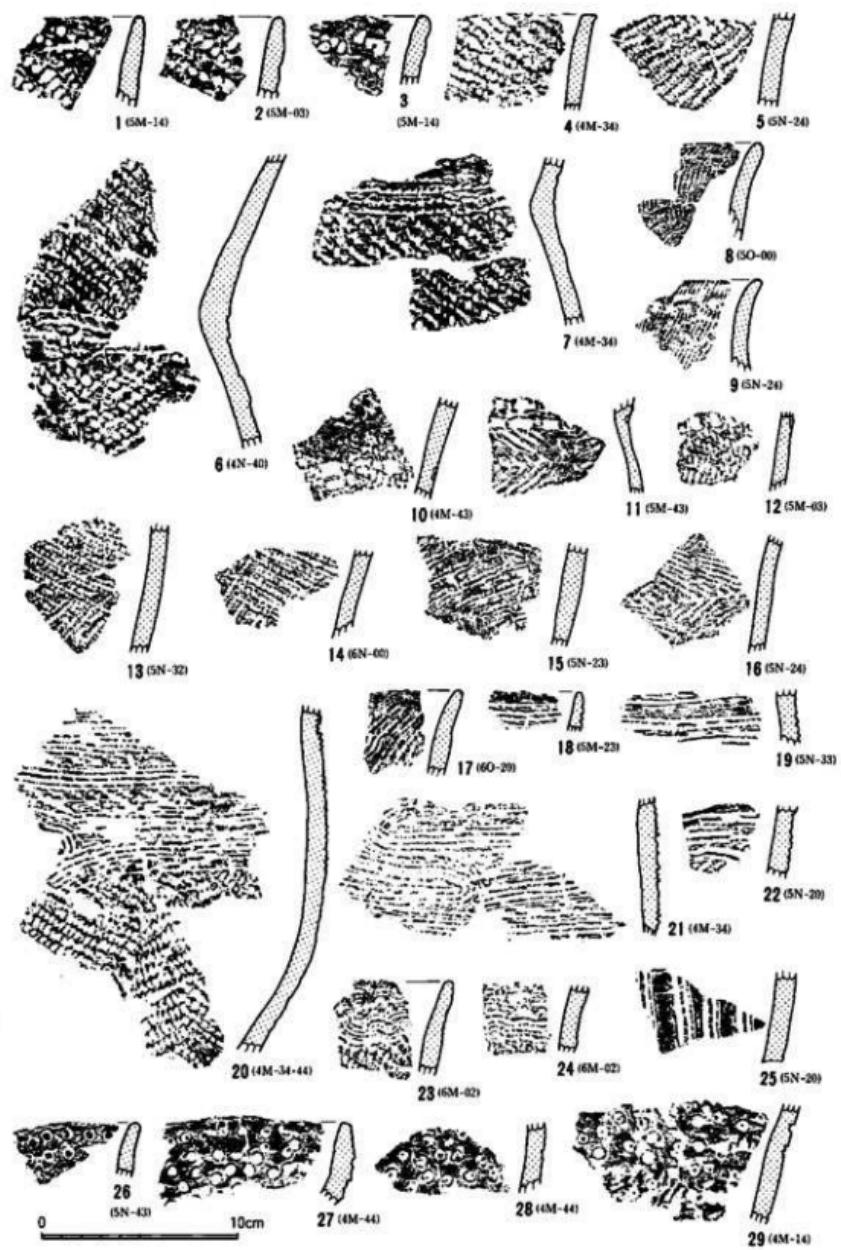
4類(39~42)。口縁部に沿つて隆帯が巡らされる。隆帯には刻みが加えられ、口縁部との間に半截竹管文が1条施され、隆帯の下位にも半截竹管文が施される。39は大波状口縁を呈し、隆帯は波頂部に集束される。いずれも胎土・調整が近似するが、半截竹管の幅が39・41が7mmであるのに対し、40・42は4mmを測り、同一とは判断しかねる。

5類(43)。燃糸を地文に沈線を施したもの。燃糸文Rを斜位方向に回転した後、半截竹管による平行沈線文が条の方向に加えられる。口縁部は半截竹管で区画され、波状を呈する。

6類(25・44~50)。地文を持たず、竹管等の工具で沈線を施したもの。半截竹管を用いたもの(44・45~47・50)と3本一組の櫛齒状工具を用いたもの(25・48・49)に分類される。45は平行沈線が矢羽状に配され、46・47も同様のモチーフで構成されると思われる。46は半截竹管の一方のみ強調し、他方を弱く描出し、单沈線に近似する効果を上げている。49は3本一単位の櫛齒状工具で縦位の沈線に菱形の沈線を加え、幾何学的文様を構成している。

7類(51)。細かい櫛齒状工具で施文したもので、8本を一単位とし格子目状に配される。外側に強く張り出す器形で、内面のミガキは良好である。

8類(52~71)。連続爪形文を施した土器であるが、さらに押し引きによる刺突を有するものも本類とした。爪形文の形態や地文等から5種に分類できる。A種は半截竹管を押し引きしたもので、刺突の間が連続するもの(53・55)と断続的なもの(54・56・58)に分類できる。



第21図 グリッド出土土器(1)

前者の内 53 は大波状の口縁を呈し、刻みが加えられる。口縁部に沿って 3 条の押し引きが巡らされ、体上半には L R を地文に 2 列一組の断続的な刺突文と円形竹管文が交差するように施される。4 号溝出土の第 17 図 1・2 と同一個体である。55 は口唇部に籠状の工具で刻みが加えられ、口縁に 2 条の稚拙な押し引き文が巡らされる。原体には附加条 2 種が使用される。後者の内 54 は口縁に沿ってやや鋭利な刺突文が 3 条巡らされる。体部には撫糸文 L が斜位方向に施される。56 は下端のみ区画沈線が認められるが、上端にはみられず、円形竹管文が配される。58 は粘土をつまみ上げ瘤状突起を作出し、文様を集束させている。B 種は連続爪形文のもので、さらに抉りが深く比較的間隔のあるもの (59~61・63・67~69) と浅く間隔の密なもの (62・65・66) とに分けられる。前者の内 60 は口縁部が外に張り出す器形で、体部の原体は附加条 1 種と判断される。61 は表面が剥落しているが、微かに 3 条の連続爪形文が見取れる。63 は大波状の口縁で波頂部が肥厚する。口縁直下から 3 条の爪形文が巡らされ、L R を地文とする。67 は後者の部類に近似するが、下段の間隔が長い。口唇部は外側に削がれ、やや内湾気味の器形を呈する。68 は口唇部が平坦で、L R を地文とする。69 は口縁が山形を呈し、2 条の爪形文がやや斜位に配される。後者は口縁が緩い波状を呈し、3 条の連続爪形文が巡らされる。62・66 は半截竹管による区画沈線内に爪形文を充填している。C 種は連続爪形文によって文様が描出されるもので、曲線的なもの (52)、幾何学的なもの (57) がある。D 種は 2 条の連続爪形文内に半截竹管の鋸齒文が加えられたもの (64・70) で、口縁に沿って円形竹管文が配される。爪形文は半截竹管内に充填したもので、鋸齒文付近に撫糸文 L の横位方向回転が認められる。E 種は地文に波状貝殻文を有するものである (71)。比較的大きめのアナグラ属の腹縁を軽く圧痕させ、凹部のみ表出し、凸部は下位に僅かに認められる。

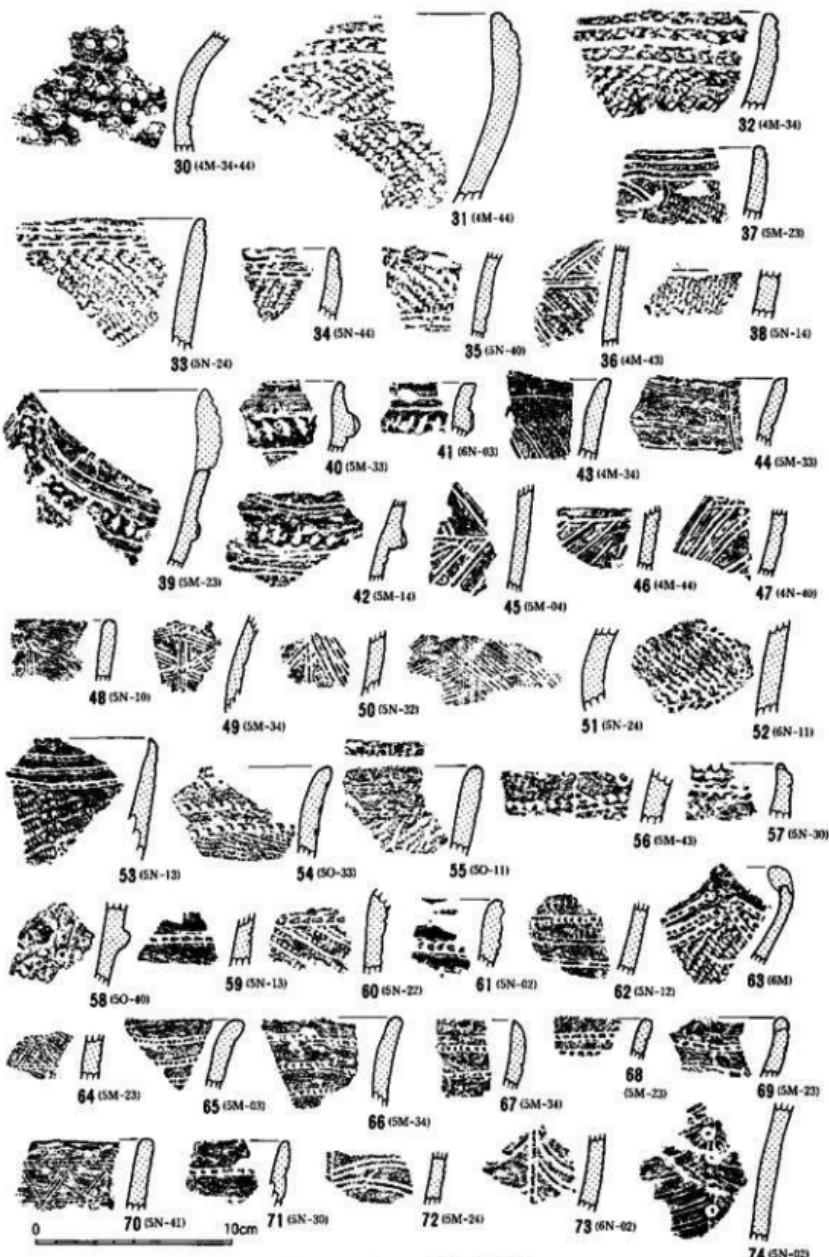
9 種 (72~77)。肋骨文で文様が構成されるもので、縦位の竹管文を基点に懸垂状または逆行に沈線が連結される。波状口縁に沿って爪形文が巡らされるもの (75)、縦位に円形刺突を有するもの (74・76・77) があるが、76 は肋骨文の左右の傾きに差がみられ、その下端には連続爪形手法による鋸齒文が配される。

10 種 (78)。アナグラ属の貝殻腹縁文を波状に施したもので、かなりの厚さを有し、胎土には多量の繊維が含まれる。

11 種 (79)。繩文を地文に縦位に円形竹管の刺突を施すもので、施文原体は L R である。

## 第 II 群土器

本群は前期後葉の竹管文と貝殻文の土器で、第 I 群と並んで、本遺跡の主体を占める一群である。総数 1,398 点。この時期の遺構としては 1 号住居跡がある。本群の土器は竹管文を主体とする諸磯 a 式・浮島 I a 式の前半の一群と、磨消貝殻文や三角文を主体とする浮島 III 式・興津式の後半の一群とに分けることができる。しかし要素によっては永く存続し、型式に帰属することが困難なものもみられたため、同一群として捉え、今後の検討課題とした。なお分類に



第22図 グリッド出土土器(2)

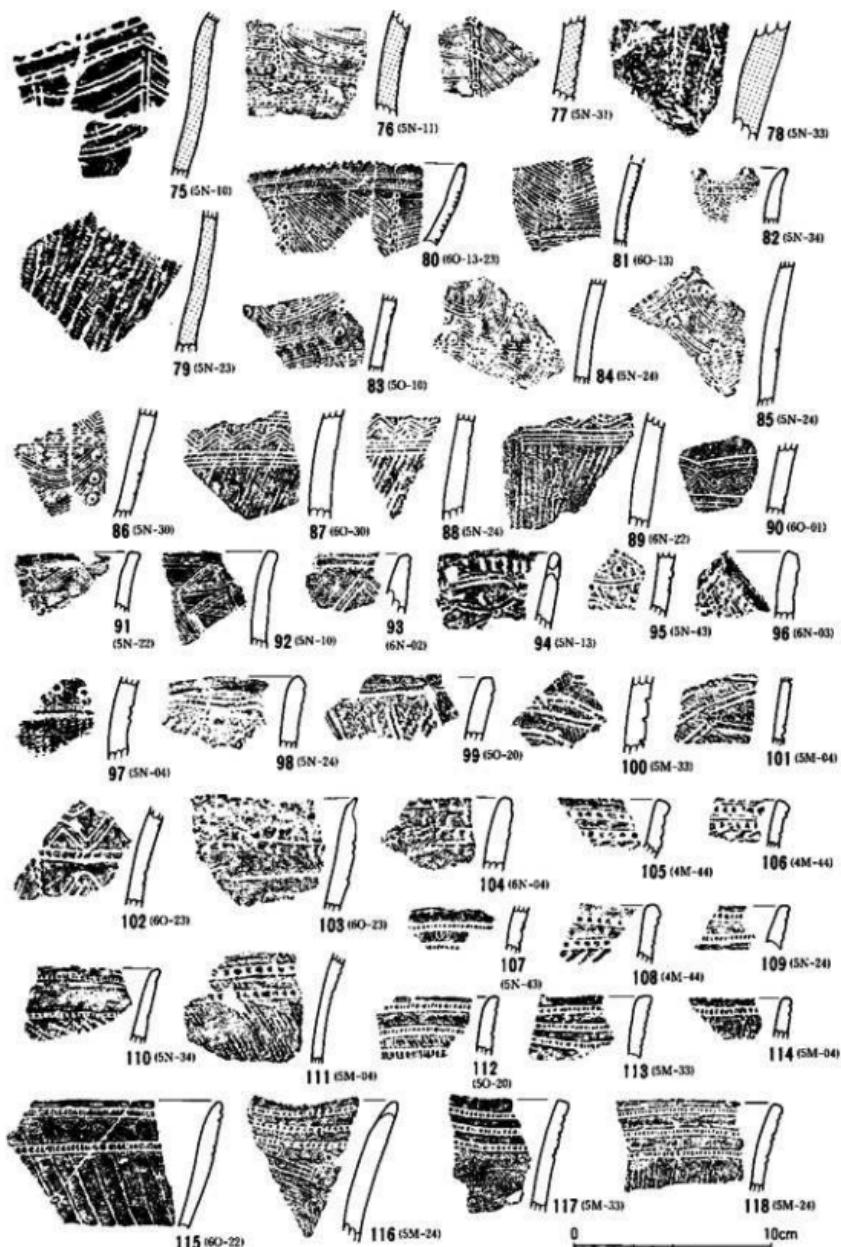
当たっては特徴・主体的文様をもつて基準としたが、複数の類に該当するものも多々存在する。

1類(80～86)。縦位に円形竹管の刺突を有し、肋骨文を構成するもの。葉脈状文様のものも本類とした。80・81は同一個体で、体上半が外に開き、口縁部でやや内湾する。口唇部には刻みが加えられ、2条の連続爪形文が巡らされる。体上半は上下端を連続爪形文に区画され、撚糸文Rを地文とし、半截竹管による縦位の平行沈線施文後、これを基軸に斜位の平行沈線が異方向に交互に配され、最後に縦位の沈線上に円形竹管による刺突が加えられる。半截竹管の幅は2～3mmで、爪形文はかなり密に施される。赤色顔料の痕跡が微かに認められる。82～86も同一個体で、施文具に6本一単位の櫛齒状工具が用いられる。体上半が緩く外に開く器形で、口唇の外側に刻みを持つ。体上半には縦位の単沈線施文後、櫛齒状工具で懸垂状に連結させ、最後に単沈線上に円形刺突を加える。文様帶の上下端は櫛齒状工具による押し引きの平行線で区画され、平行沈線間に鋸齒文が施される。

2類(87～93)。櫛齒状工具や半截竹管で鋸齒文を施したもので、一段のみのもの(87～90)と、多段に構成されるもの(91～92)に分けられる。前者の内87～89は同一個体で、撚糸文Rを地文とし、4本一単位の工具で平行線文施文後、同一工具で連続的な鋸齒文が加えられる。90も胎土・色調で類似するが、上端の区画沈線が直線的でない。後者も同一個体で、4本一組の工具が用いられる。平行線文施文後上段より連続的な鋸齒文が加えられる。口唇部が平坦である。93は半截竹管で断続的な鋸齒文が施される。

3類(94・95・97～101・122～135・138)。半截竹管による沈線を施したもので、さらに円形竹管による刺突を持つものも本類とした。地文により3種に分類できる。A種は縄文を地文とするもの(97～99・101)で、口縁部が無文のもの(98・99)、地文の一部が磨消されるもの(101)がある。97は半截竹管施文後連続押し引き乃至変形爪形文を加えているが判然としない。B種は撚糸文を地文とするもの(95・100・122～129)で、木葉文のもの(95・100)、小波状のもの(122)、押し引きによる有筋文のもの(123)、波状口縁に沿って半截竹管による集合沈線が加えられるものの(129)等がある。原体の撚は95のみLでほとんどがRである。C種は地文がみられないもの(94・130～135・138)で、木葉文のもの(94)、斜行線文のもの(130)、葉脈状文のもの(132)、曲線的文様のもの(134)等がある。94は口縁に沿って刻みが巡らされる。135は波状口縁で波頂部を欠損し、直下に粘土をつまみ上げて作出した小突起を有する。

4類(96・102～121)。連続爪形文のもので、爪形文の描出手法で3種に分類される。A種はやや間隔をあけ、施文具を立たせ気味に施したもの(103・104・110・116)で、爪形文間は變化に乏しい。103・104は雑な作りで、纖維包含の有無が微妙な土器で、口縁に沿って無文帶を挟まず、爪形文が重疊される。110は使用工具の幅が3mmで、2条の爪形文間には幅広の無文帶を有し、体部にはRLが施される。116は波状の口縁を呈し、口縁に沿って幅3mmの工具で爪形文が3条巡らされ、体部には撚糸文Lが斜位に施される。B種は爪形文が粗大なもの(105・



第23図 グリッド出土土器(3)

106・108・111)で、いずれも同一個体である。波状の口縁を呈すると思われるが判然としない。5 mm幅の半截竹管を深く突き、粘土を少々盛り上げ粗大に表現している。口縁部はやや肥厚し、2段目の爪形文の下位には斜位の短沈線が加えられる。地文にR Lが施される。C種は連続爪形文が密に施されるもの(107・109・112~115・117~121)で、いずれも3~5 mmの施文具が用いられ、地文に撚糸文を持つものが多い。117は波状の口縁を呈する。119はL Rの繩文を地文とし、縦位の短沈線が加えられ、器厚は10 mmを測る。

5類(136・137)。単沈線で鋸齒文を施すもので、同一個体と思われるが、暗褐色・明褐色と色調に差異がみられる。口縁部は外反し、口唇部にL Rが加えられる。地文にはL Rの繩文を有し、屈曲部分の単沈線で文様帯が区画され、上位に鋸齒文が断続的に描出される。

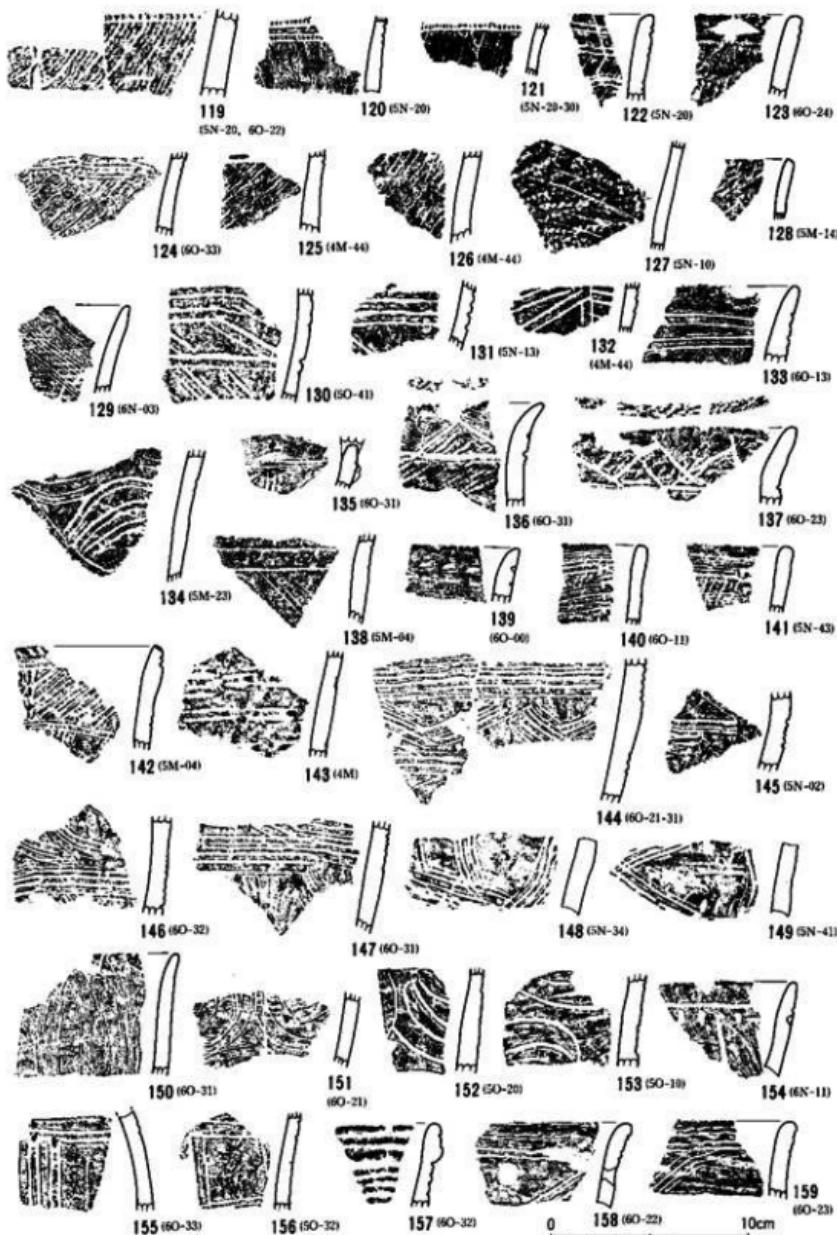
6類(139~143)。半截竹管・叉状工具を用いて断続的な沈線を施したもの。139は叉状工具で横位の短沈線が施される。140・141は同一個体で、半截竹管による横位の集合沈線施文後縦位に短沈線を加える。地文に撚糸文Rを有する。142は口唇部に刻みを有し、体上半には半截竹管による斜位沈線と縦位の短沈線を施す。地文は撚糸文Rである。143は半截竹管による横位の短沈線が数条施される。

7類(144~156)。複数の沈線で文様が構成されるもので、4種に分類される。A種は粗めの櫛齒状工具で施文されたもので、144~147は6本一組、148・149は4本一組の工具が用いられる。前者は鋸齒文が、後者は曲線的文様が施されるが、148の下位には平行有節沈線文が認められる。B種は単沈線を重疊させ曲線的文様を描出するもので、150・151は倒卵形の文様を入れ子状に展開し、円形竹管の刺突が斜位に加えられる。口唇は内側が傾き尖銳になる。152・153は先端が集束するやや拙劣な沈線で描出される。C種は刺突が加えられるもので、154は横位と縦位の明確な沈線の施文前、3本の筋を有する3 mm幅の工具による斜位の文様が加えられるが調整痕とも見受けられ判然としない。D種は半截竹管による方形等の幾何学的文様で構成されるもの(155・156)で、竹管文が数条平行する。

8類(157)。平行沈線を施し凸帯を有するもの。平行線文は7 mm幅の半截竹管で、隆起帯は低く刻み・刺突等は認められない。口唇部は丸味を帯びる。

9類(158~161)。平行有節沈線文を施したものの。158・159はいずれも口縁部がやや肥厚し丸味を帯びる。5 mm幅の半截竹管で口縁に沿って2条の平行有節沈線文が巡り、体上半に斜位の平行線文が配される。158は体上半の平行線文も有節文で描出される。160・161は凸帯に刻みを施し、粘土を盛り上げている。

10類(162~164・223~226)。変形爪形文を施したもので、いずれも爪形の文様が不明瞭である。162は変形爪形文の上下段に平行有節沈線文を有する。爪形文の工具の幅は7 mmを測る。163・164は同一個体で、口唇部には刻みが加えられる。口縁に沿って2段の変形爪形文、その下位に半截竹管による横位の集合沈線が施される。爪形文の幅は7 mm。225・226も同一個体で



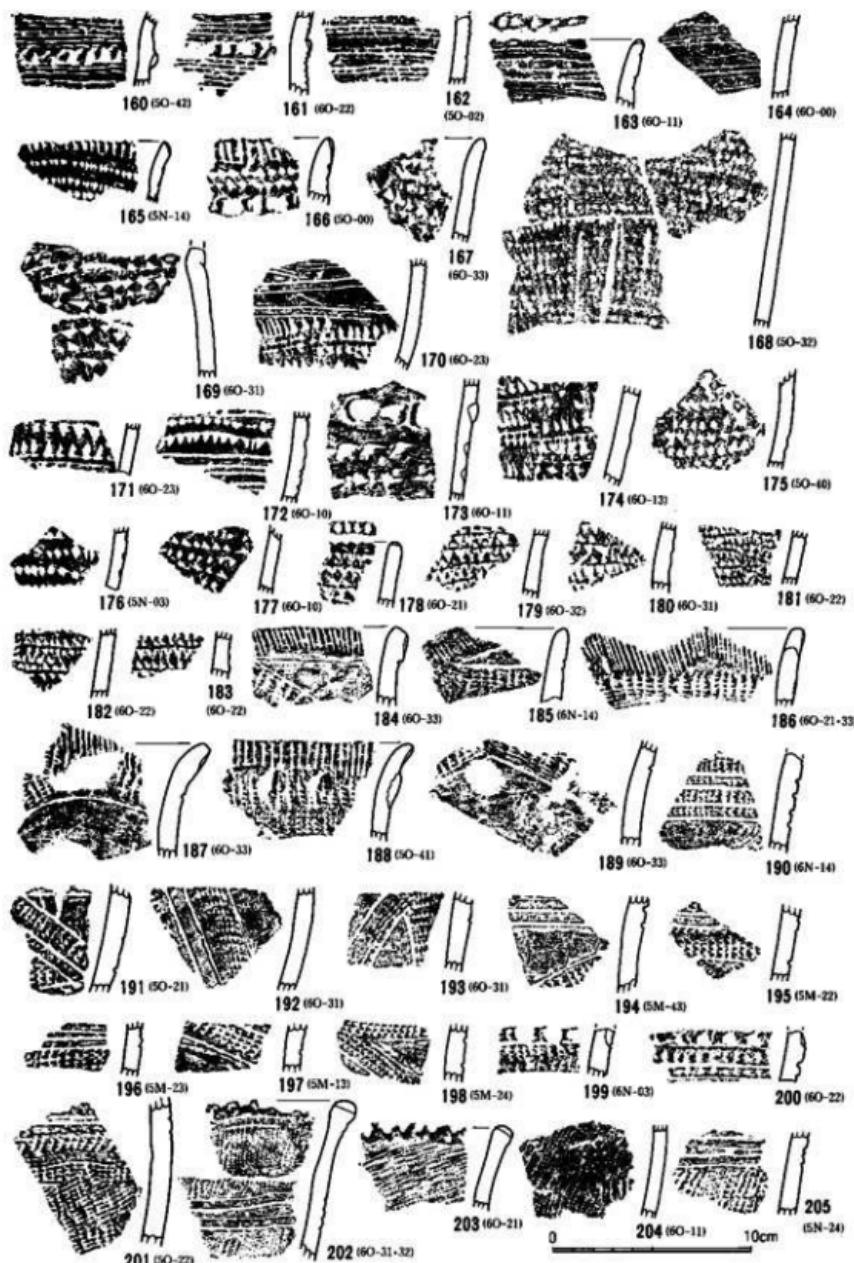
第24図 グリッド出土土器(4)

口唇部に刻みを有し、口縁直下には4条程度の変形爪形文、その下位に半截竹管による横位の集合沈線が施される。爪形文の幅は6mmで、部分的に乱雜に引きずるような手法もみられる。223・224は口縁部に条線帯が巡らされ、口唇部が尖銳である。爪形文の幅は11mmを測る。

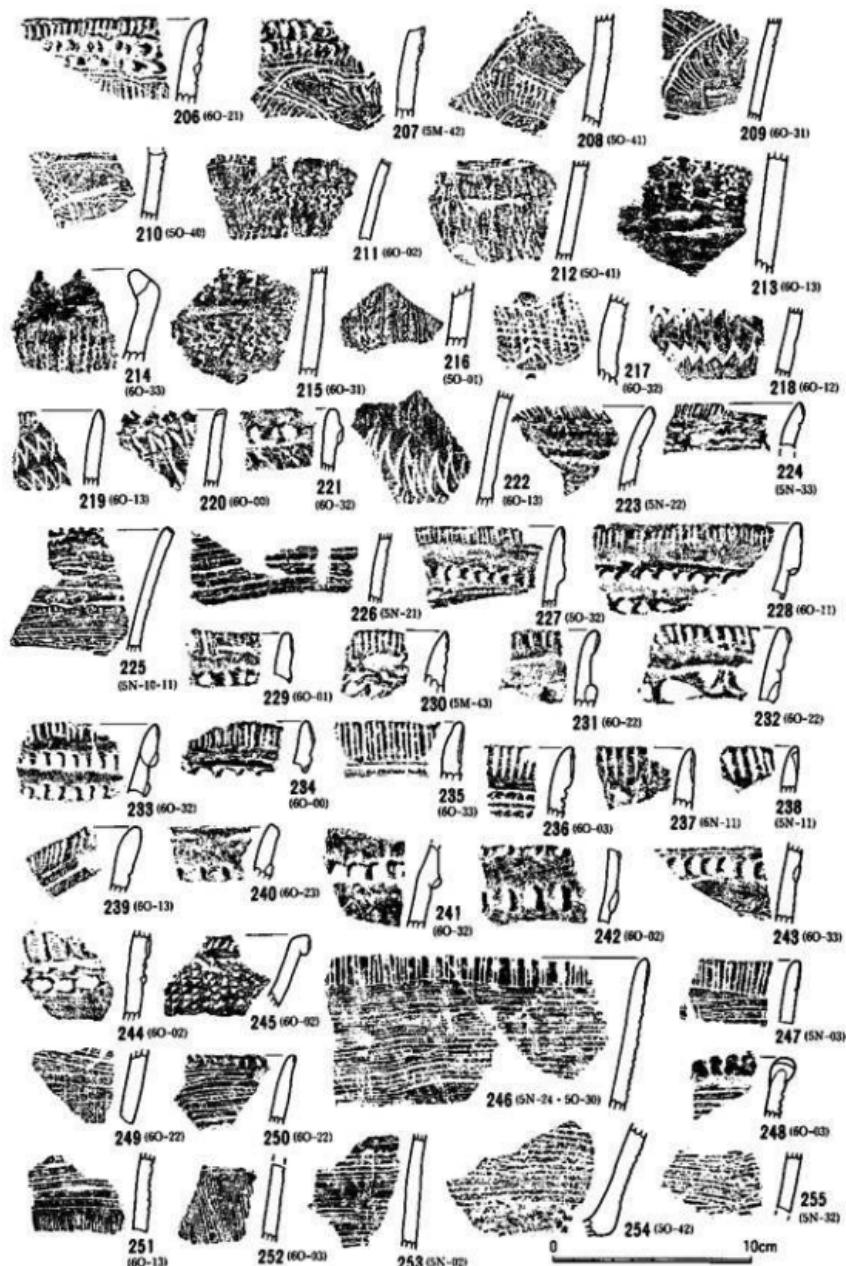
11類(165~183)。三角文を施したもので、複合する他の要素をみると条線帯を有するもの(165・166)、凹凸文が加えられるもの(166・173)、半截竹管文を伴うもの(170・172)、平行有節沈線を施すもの(171・174)等が存在する。三角文は2列一組で巡らされ、半截竹管状工具が用いられたと思われるが、三角間の無文を強調したもの(178~182)、三角文が密に加えられるもの(165)、粗大な三角文を有するもの(169・173)等バラエティーに富む。173は大きめの半截竹管を背面にして交互に刺突を加えたものであろう。171・174は同一個体であるが、三角文は半截竹管の有節に連動し、工具の筋が認められる。174は半截竹管の内側を器面にして交互に刺突を施すが、片側のみ強調されている。

12類(184~222)。貝殻文を施したもので、貝殻腹縁圧痕文のものと波状貝殻文とに大別され、さらに使用される貝の種類によって細分される。A種はアナグラ属の貝殻を施文具に、磨消手法を用いたもの(184~201)で、口縁部に条線帯を巡らし、文様は幾何学的モチーフで構成され、胴腹に張りを与える独特の器形が多い。波状の口縁を呈するもの(185~187)、頸部に刺突を有するもの(188・199・200)もみられ、188の刺突には貝殻が用いられる。B種は半截竹管による横位の平行線文を数条巡らし無文帯としたもの(202~205)で、アナグラ属が用いられ、頸部の括れをあまり持たない器形である。202~204は同一個体と思われ、口縁部がやや外反し肥厚する。口唇部には太めの刻みが加えられる。202が縦位の貝殻腹縁圧痕文であるのに対し203は斜位である。C種は文様区画に半截竹管を併用したもの(206~210)で、曲線的モチーフで文様が構成される。貝殻施文後半截竹管で区画されるが、区画が及ばない部分もみられ、粗雑な感を持つ。206は口縁部に条線帯を巡らし、その直下に半截竹管による刺突を2段有し、粘土を突き上げる。207も半截竹管による刺突が加えられるが、間隔がまちまちで粘土を引きずり潰しており稚拙である。D種は波状貝殻文の内アナグラ属を用いたものである(211~217)。214は口縁部が内側に屈曲し、山形の突起を配する。217は波状貝殻文施文後半截竹管で小波状の文様を描出する。E種は放射肋のない貝殻を用いて波状貝殻文を施したもの(218~222)で、条線帯を有するもの(219)、折り返し口縁で凹凸文を持つもの(221)、口唇部に刻みが加えられるもの(220)がみられる。

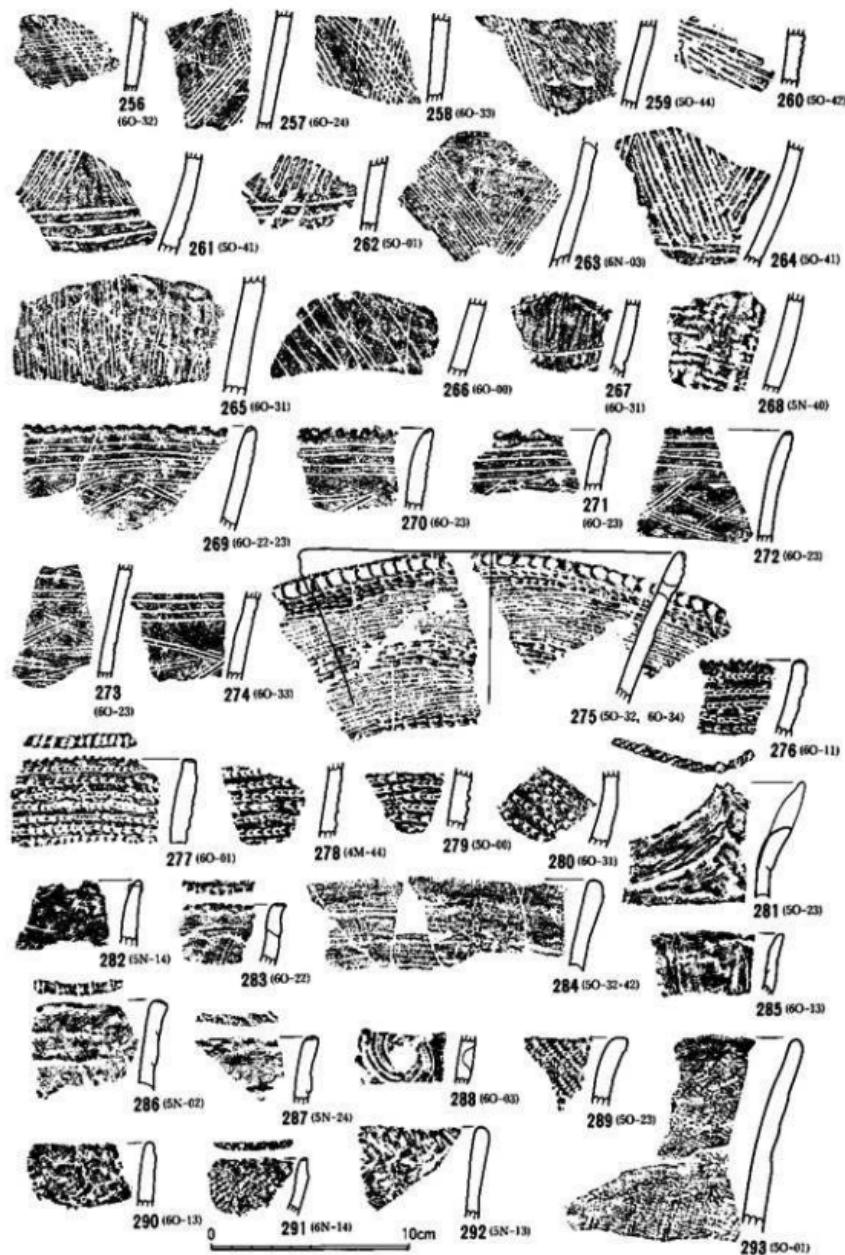
13類(227~234・240~244)。所謂凹凸文が加えられるもので、多くは輪積みの段に加えられるが、無関係に加えられるものもある(231・243・244)。条線帯を巡らすものはいずれも沈線が短く、凹凸文と接することはない(221~234)。228・229・234の条線帯は半截竹管で口唇部から下位方向に加えられる。244の凹凸文には筋がみられ、小形のアナグラ属の腹縁で粘土を引き上げたと思われる。またその直下には叉状工具による刺突列が巡らされる。



第25図 グリッド出土土器(5)



第26図 グリッド出土土器(6)



第27図 グリッド出土土器(7)

**14類** (235~239・246・247・250)。口縁部に条線帯を巡らすもので、11~13類にも該当のものがよくみられる。235の条線帯には半截竹管が使用され、片側のみ深く、頸部から口唇部に向けて施される。246・247は同一個体で、条線帯は235と同様の手法で描出される。体部には半截竹管による横位の平行線文を配する。

**15類** (245・267)。刺突を主な文様として構成されるもの。245は折り返し口縁で、条線帯に相当する刻みが巡らされる。口唇部は平坦で、体部には7本単位で幅約25mmの櫛歯状工具を縦位に押し付けている。267は沈線区画後刺突を加えるが、一部貝殻腹縁圧痕文が認められる。

**16類** (248~259・265・266)。横位・縦位・斜位に平行線文を施すもので、3種に分類される。A種は半截竹管を用い横位に平行線を施したもの (248~255) で、14類に含めた246等との関連が強い。249・251・252は同一個体と思われるが、縦位の沈線には半截竹管は使用されず、半截竹管による横位の沈線を切っている。254は底部であるが、下位まで平行線文が施される。248は口縁部に粘土紐を貼り付け刻みを加える。B種は斜位の沈線が交差するもの (256~259) で、櫛歯状工具が用いられる。C種はその他の沈線文の土器で、櫛歯状工具で縦位に施すもの (265)、疎らな沈線文のもの (266) がある。

**17類** (260~264)。集合沈線文により三角形を描出したもので、半截竹管を用いるもの (260~262・264)、櫛歯状工具を用いるもの (263) がある。264は竹管が深く入り込む。

**18類** (269~280)。その他の有文の土器で、文様構成から3種に分類される。A種は半截竹管により菱形乃至三角形状の文様を展開するもの (269~274) で、いずれも同一個体である。口唇部内側が尖鋭で刻みを有し、外に僅かに張り出す。口縁部に沿って半截竹管文が2条巡らされ、体上半には直線的な格子目状の文様が施されるが、施文具の幅が口縁部のものより狭くなる。内面は良く磨かれており、外面には斜位の擦痕がみられる。B種は半截竹管により有節沈線と平行線文が横位に交互に施されたもの (275) で、口唇部の外側に刻みを有し、粘土を盛り上げている。有節沈線は一部斜位に傾斜しており、文様の描出は丁寧とは言い難い。残存状況は1/3強で、推定径は19.8cmを測る。C種は押し引きの半截竹管による有節文を多段に巡らしたもの (276~280) で、276・277は同一個体である。口唇部は竹管の背面で刻まれ、器面は寝かせた施文具で横位に押し引きが加えられるが、間隔は一定でない。有節文には連続爪形文のような区画はみられない。280は斜位の有節文で、節の間隔があいている。

**19類** (268)。繩文施文の土器である。前期後葉の繩文施文の土器については第IV群の中で取り扱ったが、焼成・調整が第II群の範疇に近似することから独立させた。L Rの斜位方向回転により横位に描出しているが、施文前縦位のヘラケズリを行っている。

**20類** (281~287・325)。無文の土器を一括した。折り返し口縁のもの (281~283・285~287・325) と折り返さないもの (284) に二分される。前者は平縁と波状のものがあり、平縁の口唇部には刻みを加えたものが多い。282には棒状、283には籠状、286には半截竹管、287には櫛

齒状の各工具が用いられる。285は内側に折り返され、器面には縦位のヘラケズリが加えられる。

#### 第III群土器

本群は前期末葉に位置づけられる有文の土器で、60-03から1点のみ出土した。288は半截竹管による集合沈線が渦巻状に施され、中心が大きく凹んでいる。

#### 第IV群土器

本群は前期後葉から中期初頭にかけての縄文施文の土器である。総数674点。分布は第II群の後半に類似し、調査区東南部分に多い。第II・III・V群に含まれる一群であるが、所属型式の確定が困難であるため、独立して取り扱った。

1類 (289・290・292~294・303)。器面に縄文のみを施文したもので、口唇部には何も加えられない。原体の撫はLRが多く、口唇部が肥厚するもの(292)、肥厚し外反するもの(289)、尖鋭で外反するもの(303)等がある。

2類 (291・295~302・304・307)。口唇部に縄文を施したもので、さらに刻みのもの(298)も本類とした。口縁部が外反するもの(299~302)としないものに大別される。307は波状口縁で波頂部は指頭で外に張り出される。

3類(305~311)。口縁部がやや外反し、弱い凹線を有するもので、口唇部が尖鋭になるものが多い(305・306・308・310)。凹線は縄文施文前に加えられる。

4類 (312・327)。撫紐の側面圧痕を有するもの。312は地文は無く、2段の撫LRを横・縦位に押し付けている。口唇部は平坦で外に傾く。327はLRを縦・横位に押捺後、LRの縄文を横位方向に回転させる。口縁部はやや外に開く。

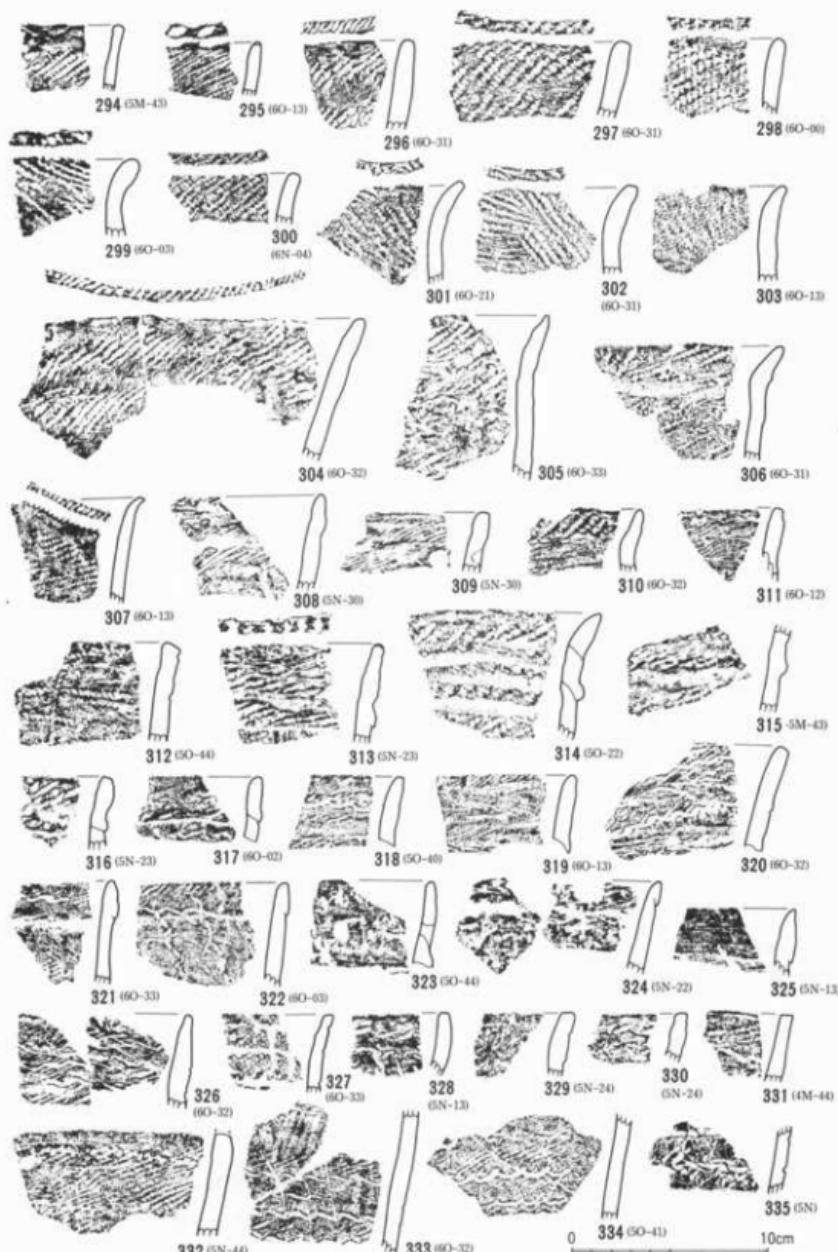
5類(313~316)。折り返し口縁で弱い凹線が加えられるもの。口唇部に縄文を施すもの(313)、口唇部が尖鋭で外反するもの(314・315)等がある。

6類 (317~324)。折り返し口縁で結節文が加えられるもの。横位のもの(317~321・324)、縦位のもの(323)、併用されるもの(322)がある。

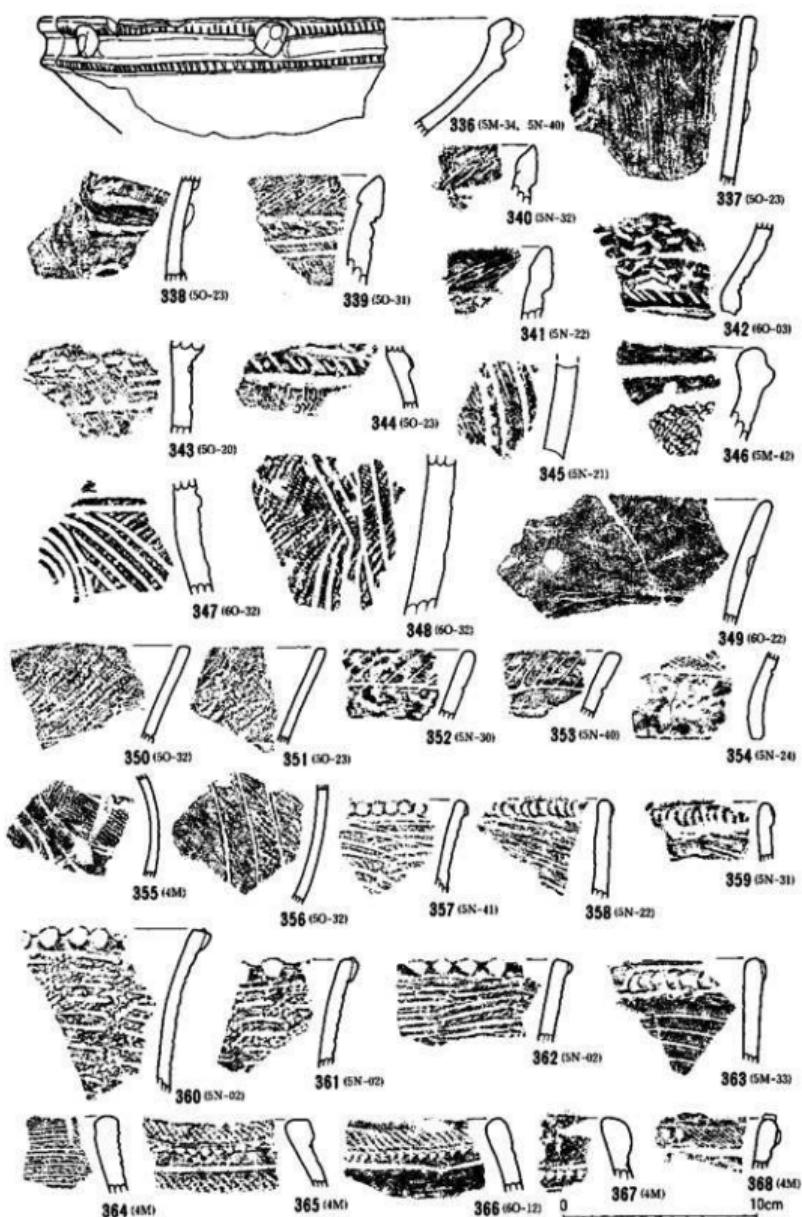
7類 (326・328~331)。結節文を有し口縁が折り返されないもの。結節文は全て横位である。

#### 第V群土器 (337~345)

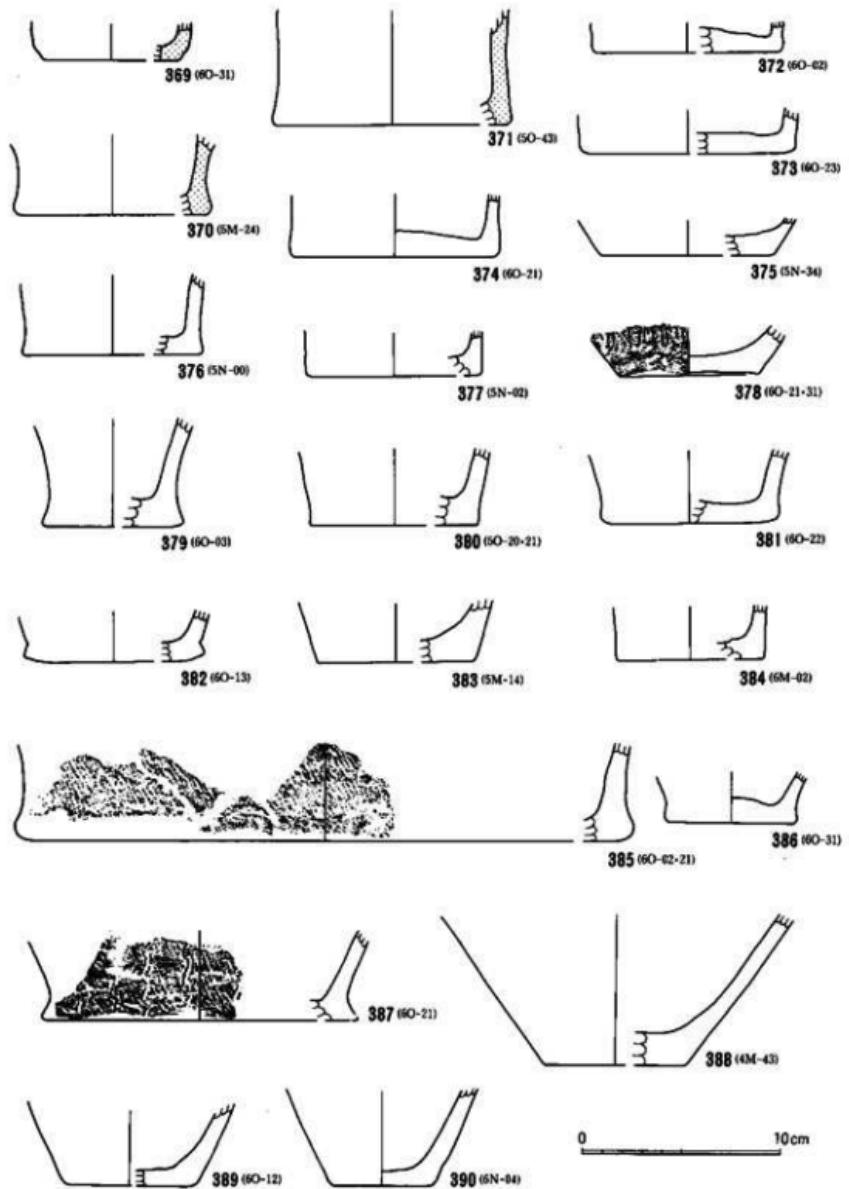
本群は五領ヶ台式に比定される土器で、総数43点。この時期の遺構としては8号土坑がある。337・338は無文地に太い隆起線文を施した土器で、同一個体と思われる。体上半がやや外に張り出す深鉢で、器面は良く研磨され、隆帯は低く接着部は丁寧になぞられる。色調は暗褐色・黒色を呈する。339~341・343は8号土坑出土土器に類似し、断面三角形の口唇部を有し、三角形刻文が文様に用いられる。胎土に細砂粒を多く含む。342は胴部が括れる深鉢で、上半には膨らみを有し山形文が加えられ、括れ部には刻みを持つ隆帯が巡らされる。細砂粒を多く含む。



第28図 グリッド出土土器(8)



第29図 グリッド出土土器(9)



第30図 グリッド出土土器 00

#### 第VI群土器 (346)

本群は加曾利E式に比定され、総数は15点。調査区東南部分に認められた。346は口縁部は無文で隆帯で区画され、両脇には丁寧なナゾリが加えられる。加曾利E III式に相当する。

#### 第VII群土器 (347・348)

本群は堀之内式に比定される土器で、総数は8点。調査区の東南部分に認められた。いずれも縄文を地文とし、沈線が加えられる深鉢で、347は括れを有する。堀之内1(新)式に相当する。

#### 第VIII群土器 (349～357・360～362)

本群は加曾利B式に比定される土器で、総数は142点。調査区全域から散漫な状況で出土している。精製と粗製に二分される。349～354は鉢形土器で、口縁部が無文のもの(349)・縄文のもの(350・351)、斜位沈線文のもの(353～355)がみられる。355は屈曲する器形である。加曾利B 2式であろう。355-356は位置づけが判然としないため、取り合えず本群とした。357-360～362は口縁端部に紐線文を巡らした深鉢で、縄文を地文に条線や断続沈線が施される。加曾利B 2式に伴う粗製土器であろう。

#### 第IX群土器 (358・359・363～368)

本群は後期末葉～晚期前葉に位置づけられる土器で、総数9点。358・359・363は口縁端部に工具による押捺を加えた紐線を巡らした粗製土器で、体上半に横位・斜位の条線文が施される。安行1式に比定できよう。364は横位に条線文が施され、口縁部がやや肥厚し内傾する深鉢で、横位の条線文が施される。安行2～姥山II式の粗製土器であろう。365～367は口縁部が肥厚し内傾する精製の深鉢で、口縁部に沿って縄文帯を巡らせ、直下に押し引き手法による連続列点文を加える。安行1式であろう。368は口縁部に縄文帯を巡らし、縄文上や口唇部に貼瘤を配し、前者には刻みが加えられる。体上半には弧線文がみられる。安行2式であろう。336は推定径25cmを測る浅鉢で、刻みを持つ隆帯2条と貼瘤が付される。隆帯と貼瘤に沿ってナゾリが加えられ、体部は良く研磨される。一応本群に包含したが、詳細な位置づけは判然としない。

#### 底部 (第30図)

残存状況1/5以上のものを図示した。いずれも深鉢の底部で、文様を有するものは少ない。369～371は胎土中に纖維を包含し、第I群に属する。370・371は底面がやや張り出し、371にはLRが微妙に認められる。372～384・386は第II群に属すると思われる。底面が張り出すものや直立のものもみられる。378は縦位の燃糸しを有し、弱い上げ底で内外面とも良く研磨される。385・387は第IV乃至V群に属し、底面が張り出す。385は推定径32cmを測り、大形の深鉢であることが想定される。器面にはLRが縦位方向に回転され、胎土には多量の細砂粒が含まれる。五領ヶ台式に帰属できよう。388～390は第VII群に属すと思われ、無文で内外面とも良く研磨されている。

## 7. 石器

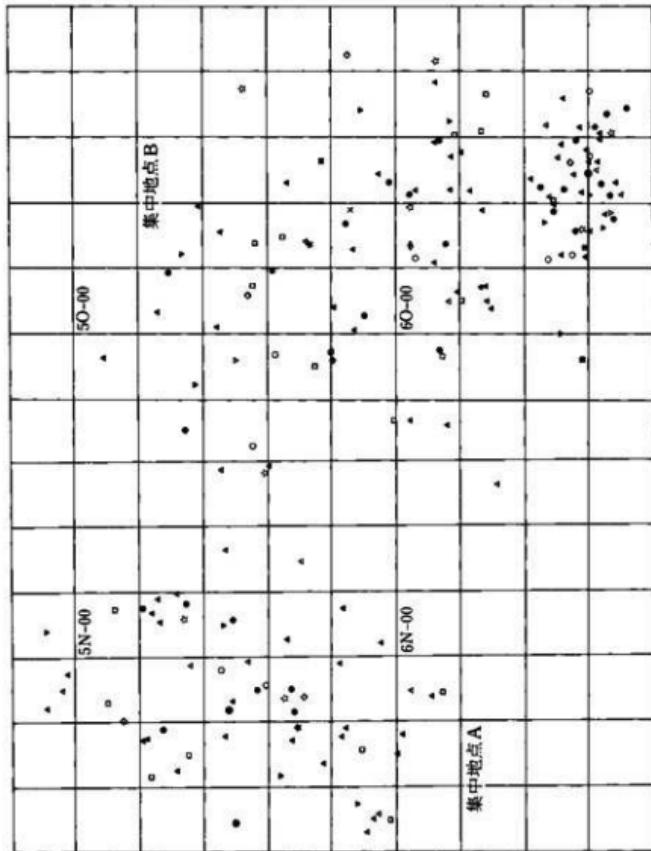
本遺跡においては、遺構内と包含層から比較的まとまった量の石器群を検出することができた。はじめに遺構内検出石器について、その特徴を指摘し、次いで包含層の石器群の概要を観察したい。

**遺構内出土の石器** 1号住居跡からは12点の石器が出土したが、そのうち9点が楔形石器から剝離された剝片（O E F）によって占められていた。石材は全て黒色緻密質安山岩である。石材の制約があって使用痕の観察は困難である。同種の石器は包含層中からも多量に得られており、本遺跡における石器製作の中核をなしている。これ以外には粘板岩製の削器が1点ある。2号住居跡からも楔形石器（O E）に伴ってO E Fが出土している。土坑出土の石器についてはその項目に譲る。

**包含層出土の石器** 包含層からは、矢尻や石匙、ドリル、削器、あるいは磨石、凹み石などの定型的石器も出土しているが、主体となるのはO Eと、O E Fであった。集中地点Aではチャートを主材に、集中地点Bでは黒色緻密質安山岩を主材として、多量のO E、O E Fが製作されている。両地点間の差は、A地点では比較的小型の円錐を素材としているのに対して、B地点では大型の剝片を素材としている（25→26→27と進行する）。この素材の差は、チャートが円錐で搬入されているのに対して、安山岩の場合はブランク=剝片という、全く異なる搬入形態がとられていることに起因する。なお、安山岩は良質のもので、東総地域の前期にはよく使用される石材であるらしい。使用頻度が時期的に特定できれば、該期の交通関係に重要な問題を提起することになる。なお、銚子産の輝石安山岩は栗島台遺跡などでは、削器の素材として使用されているが、本遺跡の安山岩とは全く異なっている。

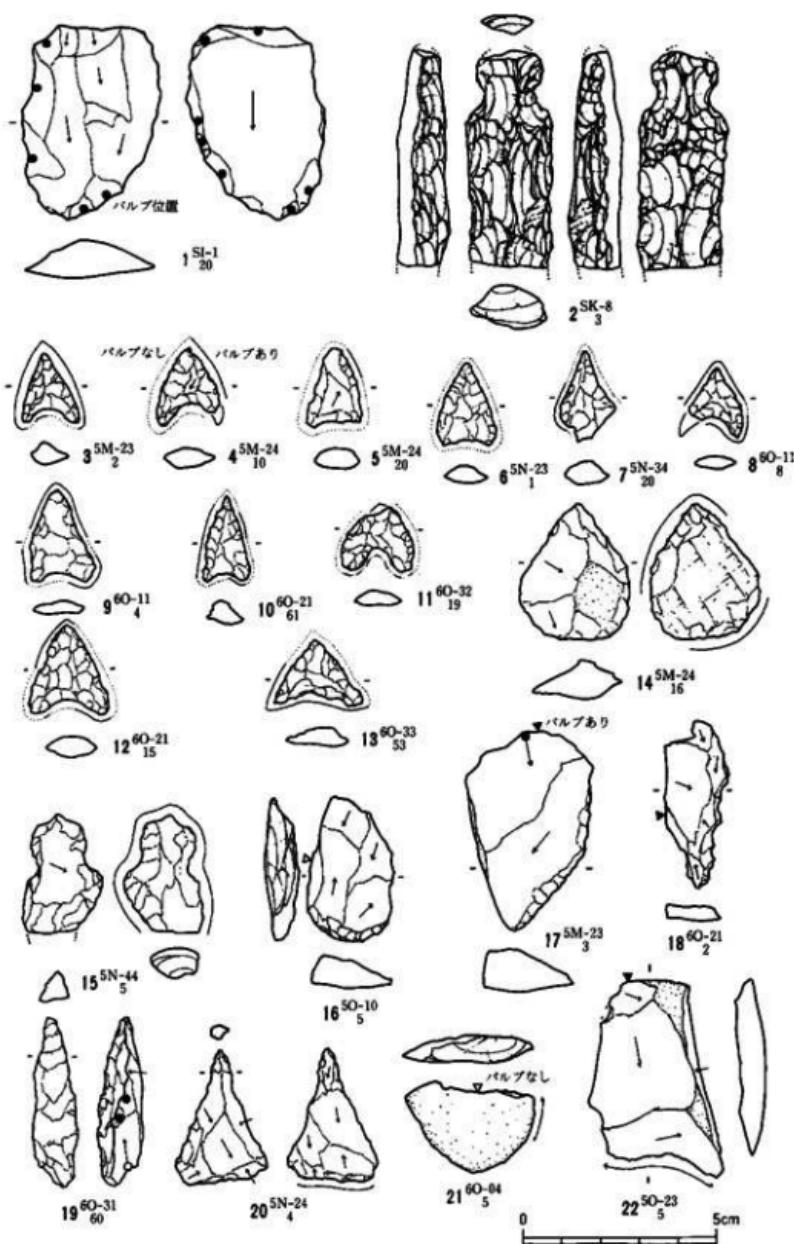
O E及びO E Fについては近年研究が進んでいるが、使用頻度に格差は認められるものの、各時期、各地方で報告されており、画一的な理解は難しい。例えば、石材の欠乏、或いは大型原石の入手の困難な地域での適応形態であるというモデルは理解しやすいが、岩手県碁石遺跡のように、頁岩原産地に立地するにもかかわらず、多量のO E・O E Fを出土する遺跡も知られており、石材のリダクションのプロセスを空間的に理解することの困難な場合もある。トーレンスは、新石器時代の石器群が、一方で磨斧のような精製品を専業的に生産しながら、また一方で、「分類学者の悪夢」とも「石器の暗黒時代」といわれる不定形石器が大量生産されることの本質的要因を、生業パターンの変化にともなう、長期的かつ短期的なリスク転換と、それが石器製作技術に及ぼした影響に求めている（Torrence 1989）。このリスク回避という時間的視点は、単純な地理的モデルよりもはるかにパワフルな理論的地平を切り開く可能性を秘めており、今後のO E・O E F研究の指針となるであろう。例えば、前期後半におけるセトルメント・パターンや、生業パターンと石器生産のプロセスとの、組織的かつ構造的関係といった視点からの理解が求められているのではないか。

- 矢 戻
- 矢尻形石器
- ◆ 石 鞍
- ▼ フリル
- ▲ 圓錐器
- ★ 剣 鋸
- ▲ O E
- ▲ OEF
- UOEF
- ブレイク
- △ U F
- \* R F
- チップ
- 原 石
- ◇ 破 石
- × 破片石
- 四 石
- 錐 石
- ▼ 錐

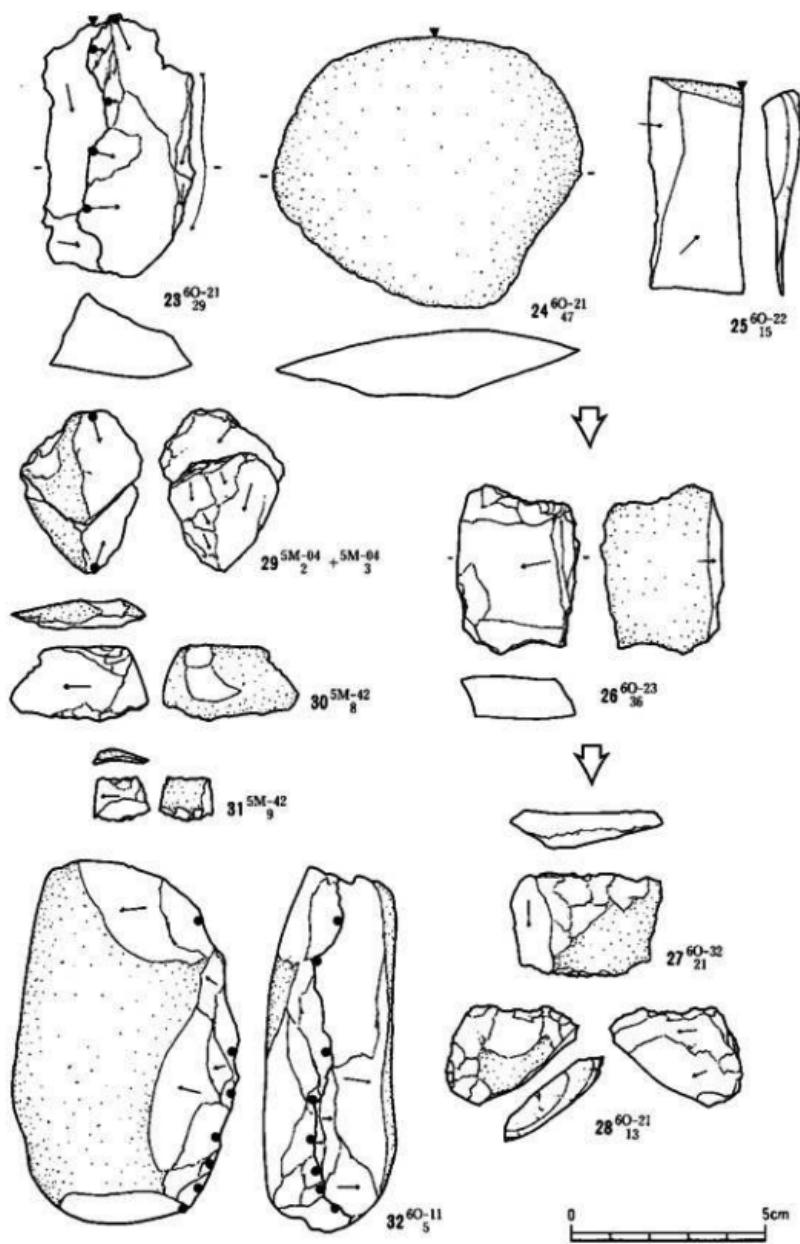


第31図 東調査区石器出土状況図



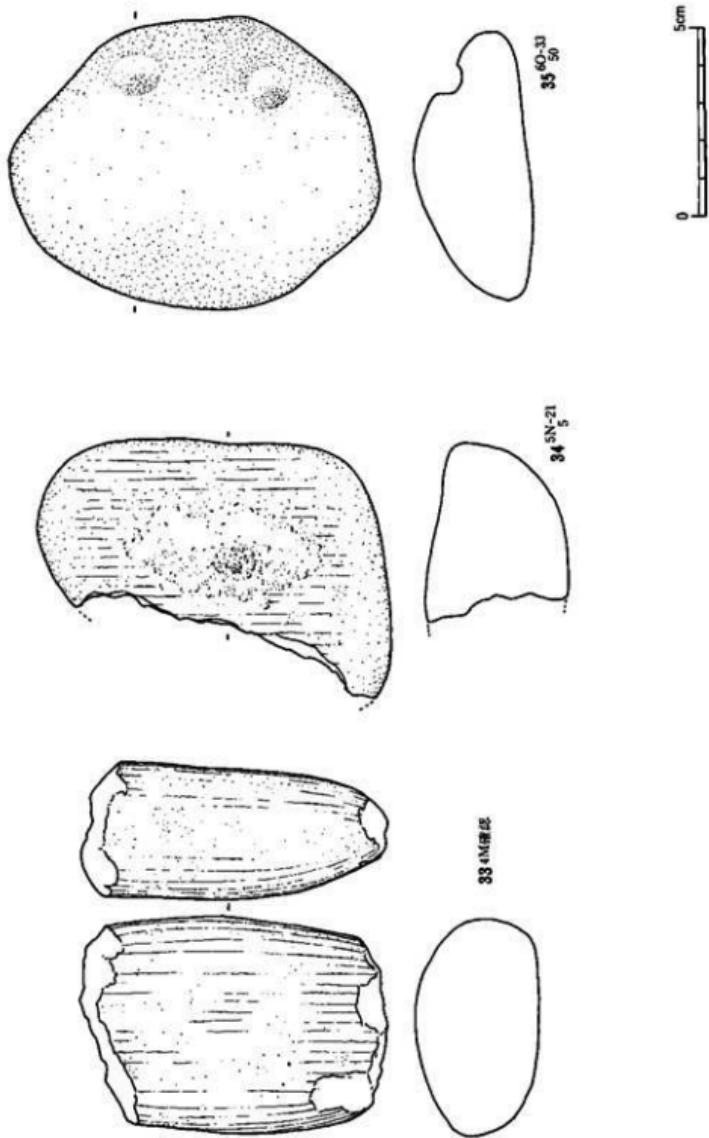


第32図 石器実測図(1)



第33図 石器実測図(2)

第34圖 石器実測図(3)



第2表 遺構内出土石器計測表

## 1号住居跡

登録番号	分類	計測値(mm)	重量(g)	石材
S I - 1 - 14	O E F	13 × 19 × 2	0.48	安山岩
S I - 1 - 15	O E F	22 × 21.5 × 2.5	1.15	安山岩
S I - 1 - 16	O E F	14 × 7.5 × 1	0.09	安山岩
S I - 1 - 20	O E F	29 × 23.5 × 4	2.27	安山岩
S I - 1 - 21	O E F	30 × 17 × 6	2.50	安山岩
S I - 1 - 59	O E F	12.5 × 19 × 4	0.02	安山岩
S I - 1 - 60	O E F	16.5 × 16 × 4.5	0.27	安山岩
S I - 1 - 61	O E F	21 × 15 × 5.5	0.64	安山岩
S I - 1 - 94	O E F	13.5 × 14.5 × 2	0.38	安山岩
S I - 1 - 25	チップ	10.5 × 19.5 × 9.5	1.43	粘板岩
S I - 1 - 26	削器	50 × 45.5 × 11	19.00	粘板岩
S I - 1 - 91	フレイク	17.5 × 26 × 3.5	1.43	粘板岩

## 2号住居跡

登録番号	分類	計測値(mm)	重量(g)	石材
S I - 2 - 23L T a	O E F	25 × 28.5 × 7	4.97	流紋岩
S I - 2 - 23L T b	O E F	41 × 16.5 × 9	8.60	安山岩
S I - 2 - 23L T c	フレイク	17 × 42.5 × 4	2.83	安山岩
S I - 2 - 23L T d	O E	20.5 × 11 × 5	2.01	安山岩
S I - 2 - 23L T e	O E F	30.5 × 17 × 6.5	3.17	安山岩
S I - 2 - 38L T	礫	27 × 33.5 × 19.5	18.87	砂岩

## 溝状遺構

登録番号	分類	計測値(mm)	重量(g)	石材
S D - 3 - 1	O E F	24 × 14.5 × 2	0.65	安山岩
S D - 3 - 2	O E F	19.5 × 14 × 3	0.96	安山岩
S D - 4 - 1	チップ	11 × 11.5 × 12	0.80	黒曜石

## 土坑

登録番号	分類	計測値(mm)	重量(g)	石材
S K - 5 - 6	O E F	22 × 18.5 × 4	0.72	流紋岩
S K - 8 - 3	石匙	56 × 22.5 × 12	18.14	チャート

第3表 集中地点石器組成表

集中地点A

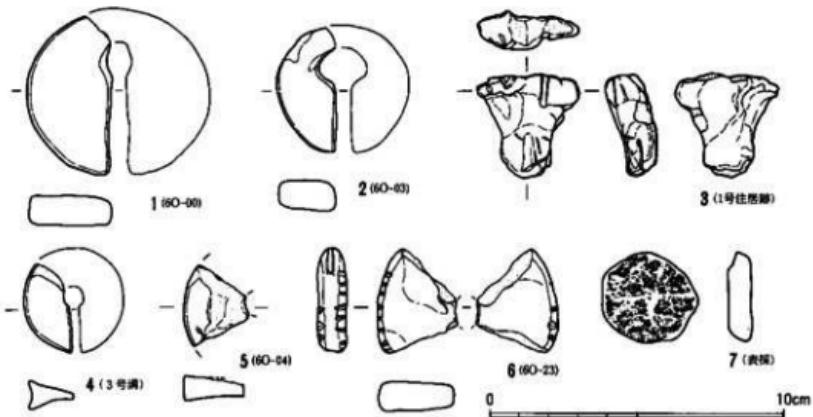
	尖尾	矢尻形石器	石器	ドリル	削器	O E	O E F	剝片	剥片 U + R	チップ	石核	原石	石片	磨石	敲き石	凹み石	絞石	石棒	小計
角 磨 石																			2
安山岩		1	1			1													5
流紋岩			1																1
凝灰岩				1															1
粗 石																			0
チャート	4																		51
粘板岩																			1
珪質頁岩																			0
砂 岩																			0
片 砂岩																			0
玉 繖																			0
アゲイト																			0
小計	4	1	0	0	0	1	15	19	7	3	8	0	1	2	3	0	0	0	64

集中地点B

	尖尾	矢尻形石器	石器	ドリル	削器	O E	O E F	剝片	剥片 U + R	チップ	石核	原石	石片	磨石	敲き石	凹み石	絞石	石棒	小計
角 磨 石	4	1	1	1	1	6	28	7	2	4	3								8
安山岩	2				2		1	1	1	1									51
流紋岩																			6
凝灰岩																			1
粗 石																			35
チャート	1	1	2	1	9	12	4	2	3	1									12
粘板岩						2	6	2	1	1									2
珪質頁岩						1													11
砂 岩							6	1				1	1	2				1	1
片 砂岩																			0
玉 繖																			0
アゲイト	1										1								1
小計	8	1	1	3	2	18	43	25	9	12	1	0	0	4	1	2	1	1	132

## 8. 土製品

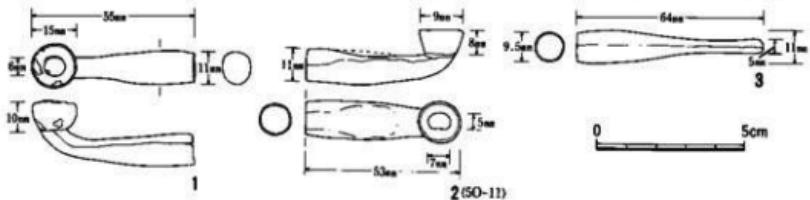
本遺跡で検出された土製品は7点である。内訳をみると土製耳飾りが5点、土製円盤1点、手づくね状土製品1点である。土製耳飾りは1・2・4～6で、4のみ3号溝から出土した。これ等は全て半欠もしくは残欠品で、平面形態はほぼ円形で、孔径より切れ目の方が長い鑿穴状を呈する。断面形態では周縁がやや角張り両面が水平なもの(1・2)、周縁が凹み両面が傾斜して孔の部分が細くなるもの(4)、周縁が角張り両面が湾曲するもの(5)、周縁に刻みが加えられるもの(6)とに分類される。いずれも前期後葉の所産であろう。7は土製円盤で中央に縦位の沈線が僅かに認められる。表探資料である。3は手づくね状の土製品で1号住居跡内から検出された。形状は不明瞭だが、側面に指頭痕が、表面に蓖状工具による沈線及びナデがみられる。裏面は調整が粗く、色調も異なる。



第35図 土製品

## 9. 近世の遺物

煙管は計3点の出土をみた。1は火皿部で脂返しとの接合部に補強帯がない。河骨形。18世紀前半の所産であろう。2は雁首で脂返しの湾曲小さくなる。火皿と首部の接合部に補強帯が残る。首部上側が偏平に二次的に凹む。18世紀後半の所産であろう。3は吸い口で流線形。



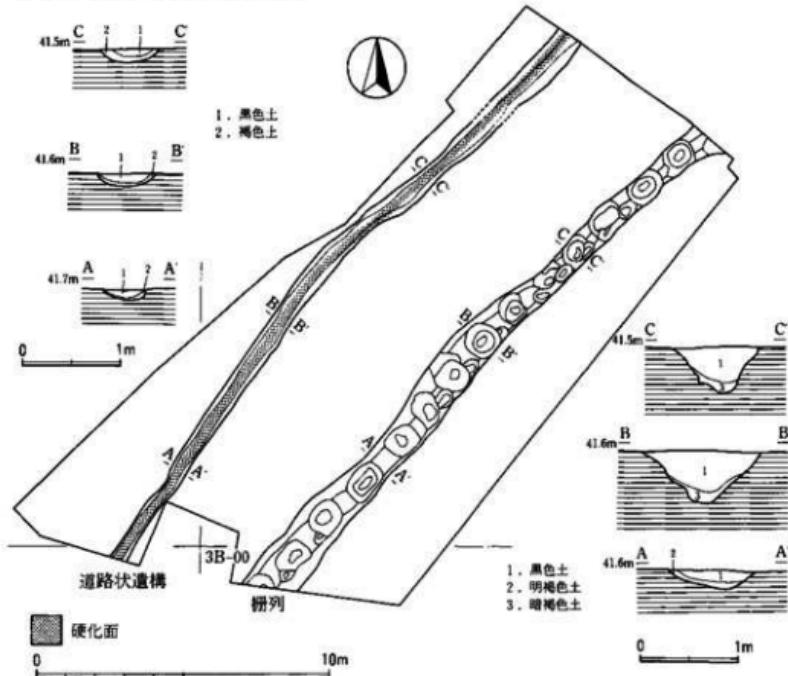
第36図 煙管

### 第3節 西調査区

調査区の西端では道路状遺構と棚列が各一条検出された。いずれも現在の道路と平行しており、遺構間の距離は4~4.5mを測る。

道路状遺構は大グリッド2A・2Bに位置し、幅0.4~1m、検出面からの深さは0.1~0.2mを測る。調査区内での全長は23.5mを測り、中央部分が西に僅かに張り出す緩やかな弧を描き、両端は調査区外へ伸びている。断面は浅いU字形を呈するが、底面はほぼ平坦で、硬化面が全体にわたって検出された。覆土は2層に分けられた。遺物は検出されなかった。

棚列は大グリッド2B・3Bに位置し、幅は0.9~1.7m、検出面からの深さは0.15~0.2mを測る。調査区内での全長は22mを測り、中央部分が西に僅かに張り出す緩やかな弧を描き、両端は調査区外へ伸びている。断面は浅いU字形を呈するが、底面はほぼ平坦である。底面からは径0.8~1.4m、底面からの深さが約0.3mのピット列が検出された。ピットはU字形の断面を呈しているものが多く、その間隔は一定ではないが、1.5~2mを測る。覆土は3層に分けられた。遺物は検出されなかった。



第37図 西調査区遺構実測図

## 第4節 その他の調査区

### 1. 土坑

東調査区と西調査区の間では4基の土坑が検出された。いずれも細長い楕円形の形状を呈し、一般に落し穴として理解されるもので、立地は台地の平坦面である。1～3号土坑は約30mの間隔で位置しているが、方向等に規則性は見いだし得ない。また底部施設も認められない。

#### 1号土坑

調査対象区域のやや西より、3G-20に位置し、検出面の標高は40.9mである。本土坑は溝状ピットと呼ばれるもので、規模は開口部で $2.15 \times 0.6$ m、底部で $2.1 \times 0.2$ mで、細長い楕円形の形状を呈し、長軸方向はE-75°-Wである。検出面からの深さは0.75mで、短軸の断面はV字形を呈する。堆積土は6層に分けられる。遺物は出土せず、時期については不明である。

#### 2号土坑

調査対象区域の中央付近、3H-42・3H-43・4H-02に位置し、検出面の標高は41.1mである。本土坑も溝状ピットと呼ばれるもので、規模は開口部で $2.95 \times 0.68$ m、底部で $2.68 \times 0.2$ mで、細長い楕円形の形状を呈し、長軸方向はN-65°-Eである。検出面からの深さは1.17mで、短軸の断面はV字形を呈し、長軸の断面は東側が0.4mほど入り込み、西側が傾斜をもって立ち上がる。堆積土は5層に分けられ、自然の堆積と思われる。遺物は出土せず、時期は不明である。

#### 3号土坑

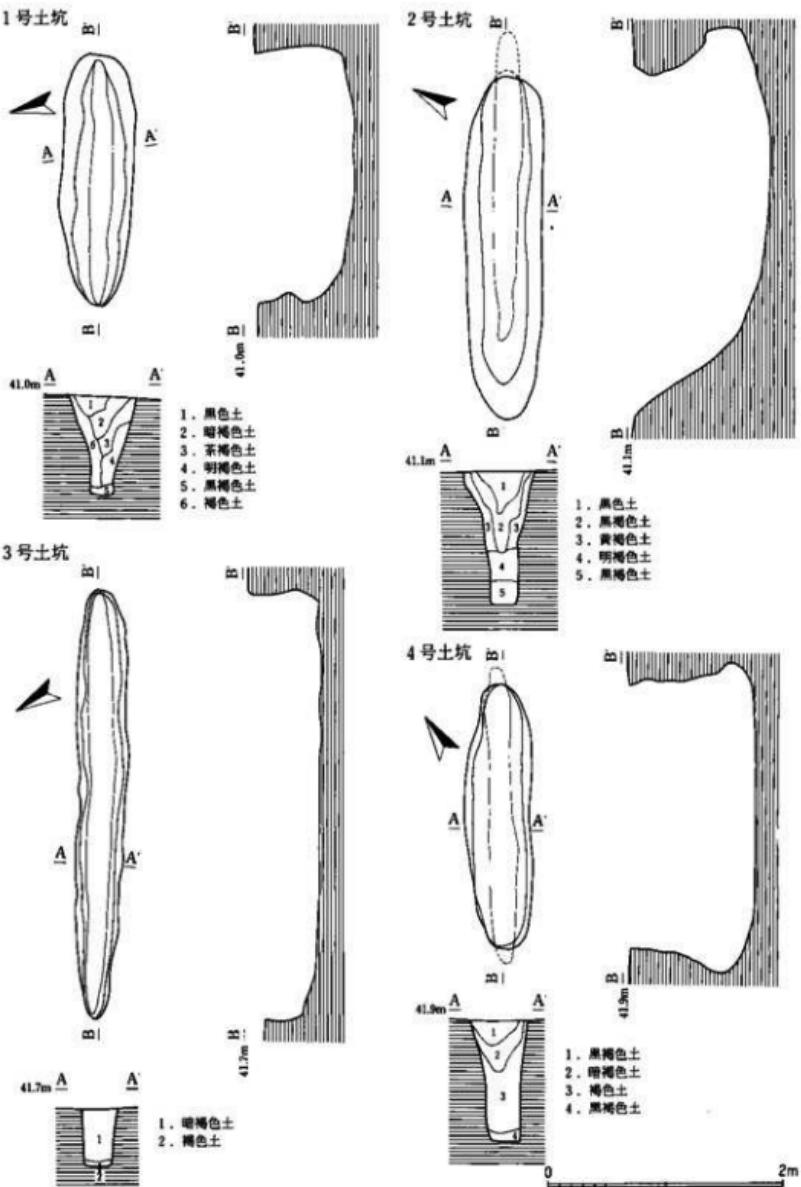
調査対象区域の中央付近、4J-00・4J-10に位置し、検出面の標高は41.5mである。本土坑も溝状ピットと呼ばれるもので、規模は開口部で $3.6 \times 0.4$ m、底部で $3.55 \times 0.2$ mで、細長い楕円形の形状を呈し、長軸方向はN-65°-Wである。検出面からの深さは0.6mで、短軸の断面はV字形を呈する。堆積土は2層のみで、上部は削平されたものと思われる。遺物は出土せず、時期は不明である。

#### 4号土坑

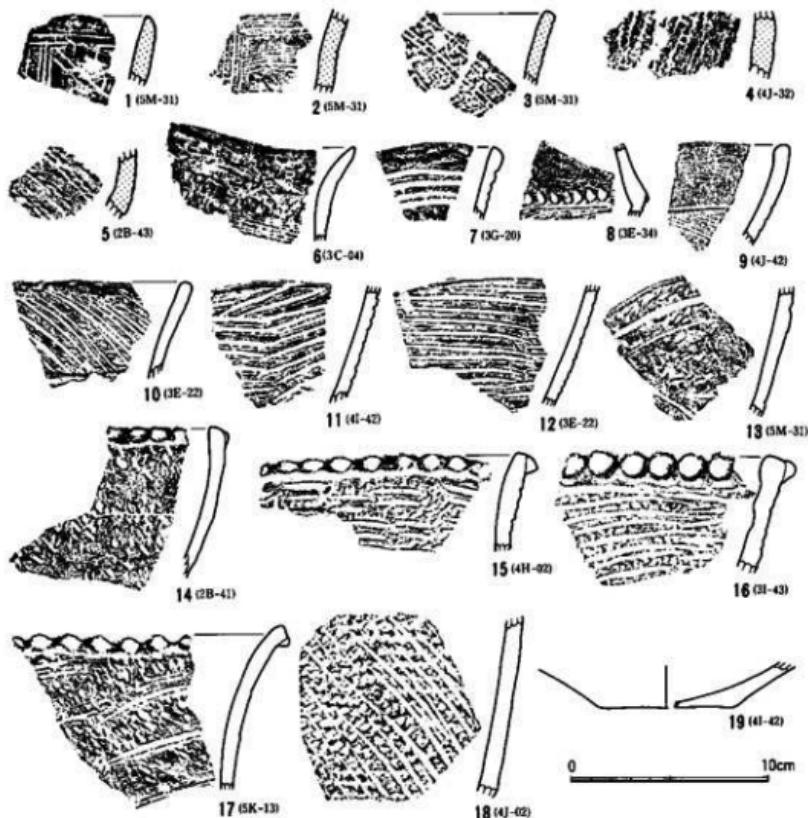
東調査区の西側、5M-31に位置し、検出面の標高は41.8mである。本土坑も溝状ピットと呼ばれるもので、規模は開口部で $2.25 \times 0.55$ m、底部で $2.5 \times 0.2$ と底部の長軸の方が長く入り込んでいる。長軸方向はN-30°-Eで、検出面からの深さは1.1mを測り、短軸の断面はV字形である。堆積土は4層に分けられ、自然の堆積と思われる。遺物は出土せず、時期は不明である。

### 2. 出土土器

東調査区外の確認グリッド出土の土器を取り扱う。いずれも散漫な状況で出土し、集中箇所は認められなかった。1は第I群6類に属し、口唇部が外に削がれ、尖鋭となる。2は第I群



第38図 その他の調査区土坑



第39図 その他の調査区出土土器

9類で、4本一組の櫛歯状工具が使用される。3は第I群8類で、波状の口縁に沿って半截竹管による押し引き文が巡らされる。LRを地文とする。4は第I群10類に属するが、波状貝殻文かどうかは判然としない。5は第I群で、燃糸文R斜位に回転している。6は第II群の範疇で、波状の口縁に沿って無文帯を挟み、櫛歯状工具による平行線文が施される。無文帯には擦痕が顕著であるが、地文にLRまたは燃糸文Rが微かにみられる。7~19は第IV群に属する。7は横帯文が3条巡らされる。8は体部張り出し部に刻文帯が巡る土器で、下部に沈線文が施される。加曾利B2式であろう。9・11・12は鉢形土器で、体部に斜位の沈線を加える。加曾利B2式であろう。10~13~18は粗製土器である。10は体上半に繩文地文に斜位の沈線が施され、屈曲部で区切られ無文帯となる。14~18は口縁端部に紐線が巡らされ、体部は繩文地文に条線が加えられる。

### 第3章 調査の成果

天神後遺跡が位置する利根川下流域の黒部川渓谷には、白井大宮台貝塚・内野貝塚・向油田貝塚等縄文時代中期前半の大遺跡が近接している。その中にあって本遺跡は縄文時代を中心とする先土器時代、奈良・平安時代、近世に展開された遺跡である。遺構としては住居跡2軒・土坑8基・先土器時代遺物出土地点3箇所、溝状遺構6条、道路状遺構・柵列各1条が検出され、遺物は総数約6,000点の出土をみた。その大半は縄文時代前期中葉～後葉の土器で占められ、遺物量の80%前後に達している。遺構数・遺物量から判断すると本遺跡は小規模な部類に属するが、学術的に貴重な成果も認められ、本章では縄文時代前期後半の土器・住居跡及び奈良平安時代についての検討を加えることで、調査の総括としたい。

#### 第Ⅰ群土器について

本群は胎土に纖維を包含する土器群で、広義の黒浜式に比定できる。東調査区に多く検出され、第Ⅱ群土器と分布を異にしている。全部で11の類に分類され、時間差をもって構成されると思われ、大きく神崎町所在の植房貝塚の資料に近似する部類と諸磯a式に近い文様を有したものとに分けることができる。

植房貝塚は、1955年西村正衛氏によって発掘され、縄文、櫛齒文、燃糸文、沈線文、竹管文、貝殻文を文様要素とする土器を出土し、前期関山式～黒浜式の中間に位置づけられた（西村1957）。中でも櫛齒状文の土器が特徴的で、この土器をもって「植房式」と呼称される傾向にある。植房貝塚資料と本遺跡を比較すると、第Ⅰ群1類は縄文施文の土器で、「植房貝塚第二群土器第II類」（以下略称を用いる）に相当される。本群中出土量が一番多く、コンパス文や付加条は少ない。第21図6・7は屈曲部に半截竹管による刺突を巡らす羽状縄文の土器で、植房貝塚図示資料に類似する。2類は植房貝塚第I類に相当すると思われるが、植房貝塚に顕著な、横位の平行線文による櫛齒文が認められない。第21図18～21は流水状の櫛齒文で構成されるが、全面施文ではなく、体下半に羽状縄文を有する。同図23の櫛齒状工具によるコンパス文は植房貝塚でも指摘されている。3類は植房貝塚第V類の一部の円形刺突のものに相当する。また植房貝塚で多く出土した燃糸文の土器の僅少性が差異として挙げられる。植房貝塚の資料について西村氏は関山式～黒浜式の中間に位置づけた。近年「関山II式及び並行型式の土器群」からの系統を考える見解（細田 1989）や、黒浜式の中位段階から後半にかけて時間差を有する土器とする見解（今橋 1991）等が提出され、研究者間でも開きがみられる。本遺跡では第Ⅰ群でも古相のものを植房貝塚に関連して考え、広義の黒浜式の範疇に入れておく。

8・9類は連続爪形文や肋骨文で文様が構成されるもので、諸磯a式の近い時期に位置づくことができる。8類は爪形文の形態や地文等から5種に分類した。いずれも口縁部に沿って

1～3条の爪形文が巡らされ、爪形文間は無文となる。A種は半截竹管を押し引きしたもので、連続爪形文よりやや古拙な感を有する。B種は連続爪形文のもので、地文の認められるもの多くが縄文で、第II群4類とは対照的である。D種は鋸歯状沈線が認められるもので、9類に関連する。9類は肋骨文で口頬部文様帯が構成されるもので、区画帯として連続爪形文を用いるものが多い。諸磯a式に受け繼がれる文様構成で、本群の中でも新しい部類に属する。これ等に類似する資料としては「遠原貝塚第3群土器（遠原式）」を挙げることができよう（川崎1980）。遠原例は纖維包含の撚糸地文の土器で、文様として連続爪形文、波状貝殻文、円形竹管文、平行沈線を有し、纖維土器群の最終末に位置づけられているが、地文においてやや様相を異にする。8類の内B・D種、9類とした土器は文様的に諸磯a式に近似することから、江坂輝彌氏を嚆矢とする「水子式」の範疇に相当しよう。しかし型式内容や設定状況等に首肯し得ない点も有り、「纖維の混入無」しをもって諸磯式とする山内清男博士の定義に従い、纖維土器から無纖維土器への変化を土器製作技術の転換期と考えたい。

## 第II群土器について

本群は諸磯式・浮島式・興津式を一括したが、竹管文を主体とする前半の一群と磨消貝殻文や三角文を主体とする後半の一群に分けることができる。しかし型式帰属の困難な属性もみられ、一括で取扱い後述の検討課題とした。

当該期の研究史は諸般の研究者によって論じられてきているが、西村正衛氏による型式設定以降、議論の対象になったのはその成立と終末についての問題である。前者については1966年の浮島貝ヶ窪貝塚の報文以降、井上義安・川崎純徳・和田哲の三氏によって活発な議論がなされてきた。議論の対象は浮島I式の細分とその併行関係にあり、結果的には西村氏の浮島I式を2細分し、古拙的なものを諸磯a式に、新しいものを諸磯b式の古い段階に併行させることで落ちついたように思われる。一方終末については興津式の併行関係とその後続土器について問題にされ、併行関係として諸磯c式を考える見解と十三音提式とする見解が提起され、また後続の土器として粟島台I・II式や三反田式等が提唱されている。

上記の如く活発に論議された成立・終末を巡る問題に対し、その間に位置する型式については余り論じられる機会が少なかったように思える。以下では西村氏による浮島貝ヶ窪・向山・興津貝塚の報告（西村 1966・1967・1968・1977・1980a・1980b・1984）を基に、浮島・興津式の各属性の消長を模式化することで、型式内容を明確にし、本遺跡第II群土器の検討を試みたいと思う。浮島・興津式土器は複合の文様要素から成り立つことは西村氏が主張する通りである。従って図示した如く各要素を単純に分断することは、それ等の関連性や系統を全く無視した行為であり、西村氏の真意から大きく逸脱するものである。しかし各属性が複雑に錯綜する当該期の土器に何らかの理解を得たいとする報告者の意図により、敢えて試みた次第である。

誤りがあればその責は全て報告者にある。

第40図は西村氏の報告で示された要素を模式化したものである。西村氏の一連の報告から16の属性を抽出して、その消長を型式毎に図示した。型式の判別はこれ等構成要素の組み合わせを考慮しなければならないが、両型式にわたり連続と続く要素は波状貝殻文と平行線文に限られ、諸要素の出現・消滅が浮島III・興津I式に集中している。型式の特徴を列挙すると、浮島I式は器形が口辺直口乃至やや外反し胴腹が円筒形を呈し、口縁は平坦なものが多く、口唇部はいくらく肥厚し、丸味をつけたものが多い。文様は撚糸の地文、変形爪形文、波状貝殻文に特徴づけられ、変形爪形文は6mm前後と狭く沈線的である。浮島II式は器形が底部から口辺部に向かってほぼ直に開いたり、口辺が外反する深鉢が多く、口縁の条線帯はまだ未発達で、円味のある口縁を有する。文様は変形爪形文の確立と発達に特徴づけられ、10mm前後の幅が多い。浮島III式は器形が口辺直口乃至やや外反する深鉢が多く、底部は基底のつき出た作りのものが多い。口縁は平坦乃至波状で、断面は片刃状をなし肥厚しているものが目立ち、粗く斜めに傾いた条線帯が巡らされる。文様は三角文や幅15~20mmの変形爪形文に代表され、波状貝殻文は彫りが深く貝殻を斜めに倒しづらすように施文しているのが特徴的である。興津I式は器形が口辺外反や直口の他に、口辺を幾らか外反させ胴腹に張りを与え底部で閉まる形態の深鉢が多く、口唇に刻目や口縁に条線帯が巡らされる。文様は細い半截竹管を斜めに刺し込んで粘土を逆立てたり押し引いて表出した爪形文（諸穂の爪形文）が変形爪形文や有節文・平行沈線文等と複合して文様を構成している。口縁部に施される凹凸文は半截竹管を45度位の角度で抉るようにして粘土を逆立てたものである。興津II式は前型式の形態に彎曲性を強めた器形に特徴があり、口縁は平坦乃至波状で、整然とした条線帯が巡らされ、波状口縁には突起の付されるものもある。文様は磨消貝殻文に代表され、平行沈線や単線による幾何学的圖柄を基調とする意匠文で構成される。口縁部の凹凸文は半截竹管或いはアナグラ属の貝殻を突き刺して抉っている。

西村氏の報告を発表順にみると、資料の集積に従い浮島III式の内容に若干の推移が認められる。浮島III式は浮島貝ヶ塚報告で三角文を主体とする土器群をもって代表とされたが、向山貝塚報告では変形爪形文が組成に加えられ、興津貝塚最終報告では「三角文は、浮島III式の時期を劃する標識土器とすることに問題がある」とし、「口縁に粗い条線帯をもち、それ以下に幅広の変形爪形文を施した土器を検討してみるとことであろう」（西村 1980 b）という見解が示され、変形爪形文をもう一方の代表として重視してきた経緯が認められる。この推移は西村氏自身の見解に変化が生じたのではなく、型式内容がより深められた結果と言える。西村氏は器形の変化、それらの大形化、竹管や貝殻を工具とする施文の複雑化および新たな文様構成の発生等が浮島式と識別されることから興津式を新たな型式として設定した（西村 1968）。この過渡的段階である浮島III式・興津I式の内容を検討すると、新しい要素とともに変形爪形文や平行有節文等の浮島式的要素が残存し、また当初浮島III式のメルクマールとされた三角文も時間幅

	文様要素	浮島Ⅰ式	浮島Ⅱ式	浮島Ⅲ式	興津Ⅰ式	興津Ⅱ式	典拠文献
口縁部刻目	条線帶			(傾斜し、粗縫)		(高度に整備) ?	(1977) (1968・1977)
折返し口縁	(一段)	(多段)				?	(1966・1977)
凹凸文・刺突文		(折頭)	(指頭・半纏竹管)	(半纏竹管)	(半纏竹管) (貝殻)		(1966・1977)
その他部位	燃綿文 波状貝殻文 貝殻文 低い隆起線 変形爪形文 平行有筋沈線文 爪形文 平行線文 三角文 沈曲線文	(6mm前後幅) (10mm前後幅) (15-20mm前後幅)	(斜め彎しつけ) (深い彎り、斜め押しつけ) (斜め押しつけ) (斜め押しつけ)	(斜め押しつけ) (斜め押しつけ) (斜め押しつけ)	(口縁部・羽状) (口縁部・羽状) (磨消目歯文)	(口縁部・羽状) (磨消したような板跡)	(1966) (1977-1980a・1980b) (1977-1980a・1980b) (1980b) (1986) (1966-1967・1980b) (1966-1980b) (1966-1977-1980b) (1980b) (1977-1980a) (1980a)
(口縁部付近含む)							

第40図 浮島・興津式文様構成要素変遷模式図 (西村正新氏文獻より作成)

を有する等諸要素が複雑に錯綜し、型式区分を困難にしている。以下では第40図の模式図を基に、本遺跡第II群土器に対し西村氏の見解に沿ったかたちでの時間的位置づけを試みたい。

第II群土器は特徴・主体的文様から20に分類したが、複数の項目に該当するものも多々みられる。1~4・6類は半截竹管文施文を基本とし、撫糸文を地文として持つものが多く浮島I式の古い段階、和田氏の浮島Ia式（和田 1973）に該当する。連続爪形文や肋骨文・木葉文・波状文・円形刺突文は諸磯a式にも多用され、その併行関係が示唆される。4類とした連続爪形文の内第23図110・第24図119には地文として繩文が施されており、諸磯a式に比定される。第23図82~89の櫛齒状工具施文も諸磯a式の関連であろう。第23図80は撫糸文を地文に葉脈状文様で構成されるが、口唇部に刻目が加えられる。浮島III式以降に盛行する刻目との系統が問題である。5類は単沈線による鋸齒状沈線を有するが、沈線が単沈線で構成され、また口縁の形態や口唇の繩文が第IV群2類に類似することから興津II式乃至その直後と推察される。7類は複数の沈線で文様が構成される土器群で4種に分類したが、明確な位置づけは困難である。A種は粗めの櫛齒状工具を用い鋸齒文や曲線的文様で構成されるが、平行有節沈線文が認められることから浮島式の範疇であろう。B種は単沈線で文様が描出され、特に第24図150・151の倒卵形のモチーフから興津II式に関連すると思われるが、円形竹管文が施されており、古拙な位置づけも可能である。D種は半截竹管の平行線をもって意匠文の表現がおこなっており興津式の所産と思われる。8・9類は凸帯や平行有節沈線文を有し、浮島I（b）式に該当する。しかし第25図160・161は刺突手法から興津I式に相当し、分類は妥当性を欠く。10類は変形爪形文の土器で、口縁部資料には刻目乃至条線帯が施される。爪形文の幅は6~11mmを測り浮島II式的であるが、爪形の文様が明瞭でない。このことから興津I式の可能性が高い。11類は三角文の土器である。条線帯や凹凸文、平行線文等複合する要素を有し、ほとんどが浮島III式であろう。178~182は細い半截竹管を施文具に用いている。1号住居跡出土の同一個体を考慮すると、興津式相当であろう。12類は貝殻文のもので、5種に分類した。A種は磨消貝殻文の土器で、興津II式である。文様は単沈線区画を基本とするが、意匠文の一部に頸部の横線と同様の幅1cm前後の半截竹管が用いられるものもある。第25図188はアナグラ属の貝殻を突き刺して凹凸文を表出している。B種は半截竹管による横位の平行線文が巡らされるもので、興津貝塚一次報文に類似例がみられる。第25図202・203は口唇部に太めの刻目が加えられるが、刻目手法が興津II式に残存する可能性もある。C種は文様区画に細い半截竹管が用いられたもので、描出表現が稚拙である。全く様相は異なるが、半截竹管区画の著名資料として市川市旧東練兵場貝塚例が挙げられる（西村 1984）。D・E種は波状貝殻文の土器である。波状貝殻文は浮島・興津両型式にわたり認められる構成要素で、型式の判別は困難である。第26図217は密度の高い貝殻文に半截竹管で文様が加えられており、興津II式に相当する。また同図219~221は条線帯・口唇の刻目・凹凸文から浮島III・興津I式相当と思われる。同図214

の「く」の字形に内接する口縁部の形態は諸磯 b (新) 式に類似する。13 類は凹凸文が加えられたもので、粘土を抉るように逆立たせており、興津 I 式に相当しよう。第 26 図 244 はアダラ属の貝殻腹縁で粘土を逆立たせており、興津 II 式である。14 類は条線帯を有する土器である。条線帯は浮島 III～興津 II 式を特徴づける構成要素で、雑な作りから整った作りへの変遷が認められる。第 26 図 235・236 は整った条線帯で、興津 II 式に位置づけられる。同図 246・247 は体部に半截竹管による横位の平行線が集合条線的に配されることから興津 I 式と思われる。15 類は刺突を主な文様とするもので、第 26 図 245 は櫛齒状工具をもって貝殻腹縁文に凝している。同様の手法は興津貝塚二次 B トレンチでも報告されており、また福島県下の興津 II 式の特徴に挙げられている (芳賀 1985)。いずれも磨消貝殻文の代用として用いられるのに対し、245 は意匠文は認められず地文となっており、折り返しの口縁に刻目が加えられる。条線帯が古拙な感を呈するが、興津式の範疇と思われる。16 類は平行線文を施した土器で、3 種に分類した。その内 A 種は半截竹管で横位に平行線文を施したもの、B 種は櫛齒条線のもので、浮島 III～興津 II 式に相当する。17 類は半截竹管や櫛齒状工具で三角形の集合沈線文が施される土器である。西村氏は興津式の平行線文の土器の特徴として意匠文の表現を指摘しているが、本例もこれに対比されよう。18 類はその他の有文土器を一括した。A 種とした第 27 図 269～274 は細い半截竹管で菱形乃至格子目状の文様を構成する。菱形の文様は浮島 III・興津 I 式にみられ、いずれかに属すると思われる。B 種とした同図 275 は有節文と平行線文が交互に施されており、興津 I 式に相当しよう。口縁部の刻目手法は該期の凹凸文に共通する。C 種とした同図 276～280 の押し引きの爪形文は、興津 I 式に特徴的な爪形文に合致する。20 類は無文土器で、折り返し口縁のものと、折り返さないものとに分類される。西村氏は製作痕を有するものは古式の伝統をひき、無いものは新しい型式という見解を示している (西村 1980 b)。本遺跡の場合、折り返し口縁の内ほどの口唇に刻目等が加えられており、浮島 III 式以降の位置づけがなされる。第 27 図 281 は波状口縁で口唇に繩文が施され、興津 II 式の特徴に類似する。折り返し口縁の伝統が存続しているのであろう。

確定できないものも多いが、各類と型式を整理すると下記のようになる (\* はその一部)。

浮島 I a 式：1～4・6 類

浮島 I b 式：8・9 \* 類

浮島 III 式：11 類

興津 I 式：9 \*・10 ?・13 \*・14 \*・18 B・18 C 類

興津 II 式：5 ?・12 \*・14 \* 類

1 号住居跡からは第 II 群土器が 98 点出土したが、11・12・15・16・20 類に該当し、特に 12 類と 20 類が顕著であった。床上 10～20 cm に集中していたが、第 11 図 36・37 に代表されるようにほぼ興津 II 式の型式内容を示していると思われる。同図 35 の無文土器は西村氏の指摘に合

致する。第10図25の折り返し口縁の土器は、興津貝塚Fトレンチ資料に類似する(西村 1980a)。興津貝塚では爪形文との層位関係が得られており、25も興津I式に含まれる可能性がある。同図18~20の三角文の土器も、単純に判断すると浮島III式に位置づけられる。西村氏が興津式に含めた三角文には、複合する文様が施される。本住居例は口唇に刻目を有し、細い半截竹管による三角文のみで構成されるが、細い工具使用は興津I式の爪形文にも共通しており、同様の位置づけができるかもしれない。今後の課題として提起しておきたい。

本遺跡の土器を概観すると浮島II式相当の土器が未検出であったことが指摘される。従って1~4・6・8・9類とそれ以外の土器とで群を異にすることが妥当である。分布をみると浮島I式が第I群の分布に近似するのに対し、浮島III式以降は1号住居跡付近に集中する。これは浮島II式を境界として織維土器終末~浮島I式及び浮島III~興津II式の型式的連続性、選地形態のあり方を反映した結果と思われる。また諸磯式に対比される資料が諸磯a式以外認められなかった。客体的存在としの検出例が一般的であることから、調査区域が限られたことに起因するかもしれない。

浮島・興津式土器は5乃至6の型式に区分することで研究者間の一一致をみている。このことは層位的出土状況に立脚した西村氏の型式細分の正当性を示す結果と言えるが、浮島III式の認識においては、研究者間で理解を異にしている。西村氏は三角文を浮島III式の代表的文様として紹介し、大形の変形爪形文を出土状況から組成に含めた経緯がある。浮島III式の内容が示されるに従い、変形爪形文に特徴づけられる浮島II式との区分が問題となる。三角文のみを重視し、大形変形爪形文を浮島II式の範疇に含める報文を多く目にするが、西村氏の編年からは逸脱した見解と言える。浮島III式から現れる属性は条線帯と三角文であり、前者が興津式を特徴づける構成要素となっていく。三角文・条線帯の出現、幅15~20mmの大形変形爪形文もって浮島II式との区分を考えるべきであり、報告者は条線帯を重視したい。浮島貝ヶ窪の浮島II式の基準資料の中に、粗い条線帯を有する土器が含まれているが、近年の西村氏の区分に照合するなら、再考を要するであろう。浮島III式の良好な資料は山内清男博士による浮島貝ヶ窪貝塚の調査で得られているという(西村 1966)。資料の公開が待たれるところである。

当該期の併行関係は西村氏により浮島I式=諸磯b(古)式、浮島II式=諸磯b(中)式、浮島III式=諸磯b(新)式、興津II式=諸磯c式=大木4・5式の位置づけが与えられている。芳賀英一氏は福島県内の伴出状況から興津II式=諸磯c(古)式=大木5a式の併行関係を考え、西村氏の編年を援用している(芳賀 1985)。更に近年山形県高畠町押出遺跡では大木4式と諸磯b(中)式、浮島II・III式の良好な共伴関係が得られ、西村氏の編年を追証する結果となっている。一方では興津II式を前期末葉の十三菩提式に位置づけ、「興津式土器を諸磯c式と対比する考えは少なくなり、十三菩提式土器に併行する考えが一般的となっています」(麻生・白石 1986)と主張する研究者も存在する。既に東北地方で大木5式との併行関係が得られており、

疑問である。

最後に三角文の施文手法について触れておきたい。三角文は前述のとおり浮島III式・興津I式に特徴的な文様である。西村氏は施文方法について、「方形のへらの先端部を斜目に押しつけて構成される」(西村 1966)、「尖端を角ばらしたへら、あるいは太目の竹管を半截して、その半截した角を押しつけたりして表出したと思われる」(西村 1967)、「方形の細い棒の先端部を斜目に押しつけたか」(西村 1977)、「三角文表出の調査を進めているが、一つは太い半截竹管の切口の角を粘土に押しつけると酷似した文様が表れることが分った」(西村 1980 a)、「直徑2cm以内と考えられる竹管を半截にしてその切口の角で器面を押す」(西村 1980 b)という見解を示し、半截竹管を施文具として用いることが明らかにされた。しかし具体的な手法については明言していない。三角文は2列一組で施されることが一般的であり、半截竹管が用いられた可能性が極めて高い。半截竹管を用い、切口の両端部で押しつけたとすると、2通りの手法が想定される。一つは半截竹管の内側で交互にロッキングするもので、もう一つは外側で交互にロッキングする手法である。前者は内側が深く三角形の一辺が向かい合うものが多いのに対し、後者は外側が深くなる。前者の手法が一般的であるが、後者の手法も僅かにみられ、本遺跡では第25図173が該当する。三角文の施文方法は半截竹管を交互にロッキングする点で変形爪形文や平行有節沈線文のテクニックに酷似する。但し2列間に爪形文を有さないことから工具は複数あるに、また前者の手法は外に倒すように押しつけられたと推察される。西村氏は太めの施文具を想定されたが、第10図18~20のように細い工具も用いられている。浮島III式以降細い半截竹管が平行線文に用いられることに関連するのであろう。三角文は興津II式まで残存することが示唆されているが、その衰退は技術的に近似する変形爪形文や平行有節沈線文と軌を一にした動きであり、一見浮島式的伝統から異質に思える文様でも、技術的にその系統下で理解することが可能であろう。

#### 第IV群土器について

本群は前期後葉～中期初頭にかけての縄文施文の土器で、興津式～下小野式までを一括した。西村氏は興津貝塚報文の中で縄文施文の土器を興津式の範疇で取り上げ、口唇部の縄文、羽状縄文、撲紐の側面圧痕、粘土紐の貼付等を挙げている。本遺跡2類は口唇部に縄文が施されるもので、興津貝塚例に類似する。1号住居跡出土からも3点検出されており、興津II式の組成の中で考えられよう。3類は口縁部がやや外反し、弱い凹線を有するが、興津貝塚には類例がみられない。口唇部形態が後出的で、凹線を有することから、5類に近似し前期末葉に相当すると思われる。4類は2段の撲紐の側面圧痕を有する土器である。芳賀英一氏は福島県内の資料において大木5式に伴うものは2段の原体圧痕、大木6式に伴うものは1段撲りの原体圧痕であることを踏まえ、興津II式には2段の原体圧痕の多いことを指摘している(芳賀 1985)。

本例も2段の撲紐であり、興津II式に含まれよう。5類は折り返し口縁で弱い凹線を有するものである。結節文は認められず、3類同様前期末葉に位置づけられると思われる。6類は所謂下小野式と呼称される土器で、中期初頭に位置づけられよう。

和田哲氏が1・2・4類相当の土器を興津式に後続する型式として位置づけて以降(和田1973)、前期末葉を巡っては種々の型式が提唱され、混乱した状況にある。しかし興津II式を十三菩提式併行に置く研究者は論外として、いずれも東関東の前期末葉に縄文施文の土器を位置づけることで共通している。中期初頭の下小野式は折り返しの口縁と結節文に特徴づけられるが、前期後葉からの系統的連絡が問題となろう。折り返し口縁は浮島II式以降興津I式まで盛行するが、興津II式の様相は明確でない。また結節文の土器も1号住居跡で検出されたものの、興津II式に含め得るかは疑問である。近年側面圧痕土器を積極的に評価し、前期末葉に位置づける見解が示されている(小林 1991)。本遺跡では2点出土したのみであったが、いずれも原体から興津II式に近い位置が与えられる。本遺跡では3・5類を前期末葉として考えた。これ等は凹線に特色が見られるが、側面圧痕土器との関連も考えられるかもしれない。

#### 1号住居跡について

本住居跡は出土遺物から興津II式の時期と判断される。浮島・興津式期の住居跡はこれまで検出例が極めて少ない。西村正衛氏により1958・1967年に調査された茨城県向山貝塚で、初めて浮島III式期の住居跡が1軒検出された。向山貝塚では、隅丸方形の形状を呈し、長径は7.6m、短径は6.9~4.0mを測り、壁に沿って周溝を巡らし、壁内側0.6~1.0mにピットが計36配置され、ピット間に焼土が4カ所検出されている。千葉県内では中山秀吉氏により、7遺跡19軒の住居跡が集成されている(中山 1985)。近年佐原市毛内遺跡で14軒の住居跡が検出され、茨城県では勝田市達原貝塚で当該期の住居跡が2軒、石岡市新池台遺跡で13軒、同大谷津B遺跡4軒、同外山遺跡32軒、竜ヶ崎市町田遺跡でも数軒の住居跡が検出され、資料の集積が進みつつあるが、浮島式期に集中している。本遺跡に隣接する興津式期の住居跡としては、船橋市古和田台遺跡、印西町一本桜遺跡、流山市中野久木遺跡等が挙げられる。

当該期の資料を涉猟すると、特徴として以下のことが指摘できよう。形状は隅丸方形乃至隅丸台形が卓越し、橢円形も多々認められ、規模はいずれも長軸6m以下で、毛内遺跡では全て4m未満である(向山貝塚例は規模においてやや特異である)。周溝が認められるものは少なく(向山貝塚・北前貝塚1号住・毛内遺跡13号住等)、柱穴の配置は規則的とは言えない。炉は認められないものも存するが、掘り込みの浅い地床炉が多く、偏在する傾向にある。複数の炉を有するものもみられる(向山貝塚・毛内遺跡1号住・北前貝塚1号住等)。また床面が軟弱で、壁高の浅い例が傾向として認められる。

上記の状況に本遺跡例を対比すると、1号住居跡は円形~橢円形の形状で、4mの規模を測

り、掘り込みの浅い炉を有する等ほとんどの事項に合致しており、当該期の一般的な住居跡であったとみることができる。本住居跡は調査区の南端に位置しており、当該期の集落構成は調査区の南側に展開する可能性が強いように思われる。

#### 奈良・平安時代について

本遺跡は比較的広く安定した台地上に存在しており、各期にわたり集落が展開していた可能性が考えられる。しかしながら、今回の調査において該期の遺構は8世紀第4四半期(註1)の住居跡1軒が台地東側縁辺部から検出されたのみであった。

本遺跡周辺部における該期の調査例はほとんど皆無に等しい。わずかな調査例として、清水堆遺跡(第2図3)(註2)や妙見堂遺跡(第2図19)(註3)において8世紀代の住居跡を検出しているが、いずれも8世紀中葉と本遺跡にわずかに先行する。清水堆遺跡では台地東側縁辺部を調査しており、台地側をA区、谷側をB区としている。双方の調査区から3軒の住居跡を検出している。A区とB区の間には段差が見られるが、A区から検出された住居跡は確認面から床面まで6cm内外とB区から検出された住居跡よりも浅くA区が削平されている可能性が考えられる。また、本遺跡においても繩文時代の陥穴を数基台地中央部よりから検出しているが、明らかに上半部が削平された可能性が高い。以上のようなことから、清水堆遺跡や本遺跡の所在する台地上は中央部が後世の削平を受けている可能性が高いと考えられる。本遺跡や清水堆遺跡を調査し、集落構造を明らかにするためには、特に台地中央部の綿密な調査により住居跡の分布を明らかにしていく必要があると考えられる。

今回の調査は極めて部分的なものであり、周辺資料も少なく集落構造を明らかにすることは不可能である。

#### 註

1. 実年代を付するに際して、下記の文献を参考にした。

栗田則久ほか 1990 「佐原市吉原三王遺跡」 勘定千葉県文化財センター

滝口宏ほか 1979 「木下別所廐寺跡第二次発掘調査概報」 千葉県教育委員会・木下別所廐寺跡調査会

2. 平野功 1989 「小見川町内遺跡群発掘調査報告書」 小見川町教育委員会

3. 中野修秀ほか 1989 「織機地区遺跡群発掘調査報告書」 小見川町埋蔵文化財調査会

## 引用参考文献

- 麻生 優 1956 「十三菩提式土器の再吟味」『貝塚』NO.59
- 麻生優・白石浩之 1986 「縄文土器の知識 I 草創・早・前期」 東京美術
- 今橋浩一 1991 「縄文時代前期後半の文化動向－東部関東浮島式土器分布層における異系統土器と共存関係」『古代探叢』 早稲田大学出版部
- 今村啓爾 1982 「諸種式土器」『縄文文化の研究 3 縄文式土器1』 雄山閣
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に」『考古学研究室紀要』第4号 東京大学文学部
- 江森正義・岡田茂弘・鶴達喜彦 1952 「千葉県香取郡下小野貝塚発掘報告」『考古学雑誌』第36巻第3号 日本考古学会
- 岡田光広ほか 1991 「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI (佐原地区3)」 (財) 千葉県文化財センター
- 川崎純敏ほか 1980 「遠原貝塚の研究 (本編I)」 勝田文化研究会
- 小林謙一 1991 「東関東地方の縄文時代前期末葉段階の土器様相－側面压痕土器及び全面縄文施文土器の編年的位置づけ」『東邦考古』15 東邦考古学研究会
- 下村三四吉・八木英三郎 1894 「下総国香取郡阿玉台貝塚跡報告」『東京人類学会雑誌』第9巻第97号 東京人類学会
- 中山吉秀 1985 「房縁における縄文時代前期後半の様相－特に諸種式土器と浮島式土器の比較からみて」『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- 西村正衛 1957 「千葉県香取郡植房貝塚出土土器」『学術研究』第6号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1966 「茨城県稻敷郡浮島貝ヶ庭貝塚－東部関東における縄文前期後半の文化研究。その一」『学術研究』第15号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1967 「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚－東部関東における縄文前期後半の文化研究。その二」『学術研究』第16号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1968 「茨城県稻敷郡興津貝塚 (第一次調査)－東部関東における縄文前期後半の文化研究。その三」『学術研究』第17号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1977 「茨城県稻敷郡興津貝塚 (第二次調査)－東部関東における縄文前期後半の文化研究 (その四)」『学術研究』第26号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1980 a 「茨城県稻敷郡興津貝塚Fトレンチ出土土器－東部関東における縄文前期後半の文化研究 (その五)」『古代探叢』 早稲田大学出版部
- 西村正衛 1980 b 「茨城県稻敷郡興津貝塚 (第二次調査)－東部関東における縄文前期後半の文化研究 その六」『学術研究』第29号 早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1984 「石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として」 早稲田大学出版部
- 芳賀英一 1985 「大木5式土器と東部関東との関係」『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- 細田 勝 1989 「黒浜式土器成立の背景について－特に東北地方土器群との対比を通して」『古代』第87号 早稲田大学考古学会
- 山内清男 1929 「関東北に於ける縄維土器」『史前学雑誌』第1巻2号 史前学会
- 山内清男 1967 「日本先史土器図鑑」 先史考古学会
- 山内清男 1979 「日本先史土器の繩紋」 先史考古学会
- 山本静男 1982 「石岡都市計画事業南台土地整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」(財) 茨城県教育事業団
- 山本静男 1984 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9 -仲根台B遺跡・町田遺跡」 (財) 茨城県教育事業団
- 和田 哲 1973 「浮島系土器の諸問題」『古和田台遺跡』 細井市教育委員会
- 和田謙次 1983 「石岡都市計画事業南台土地整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 -新池台遺跡」 (財) 茨城県教育事業団
- Torrence, Robin, 1989 , 'Retooling : Towards a Behavioral Theory of Stone Tools', in R. Torrence (ed.), Time, Energy and Stone Tools, Cambridge University Press
- Wobst, H. Martin, 1974 , 'Boundary Conditions for Paleolithic Social Systems : A Simulation Approach', American Antiquity 39:147-78

# 写 真 図 版



天神後遺跡周辺航空写真 ( $S = 1 : 10,000$ )



遺跡近景



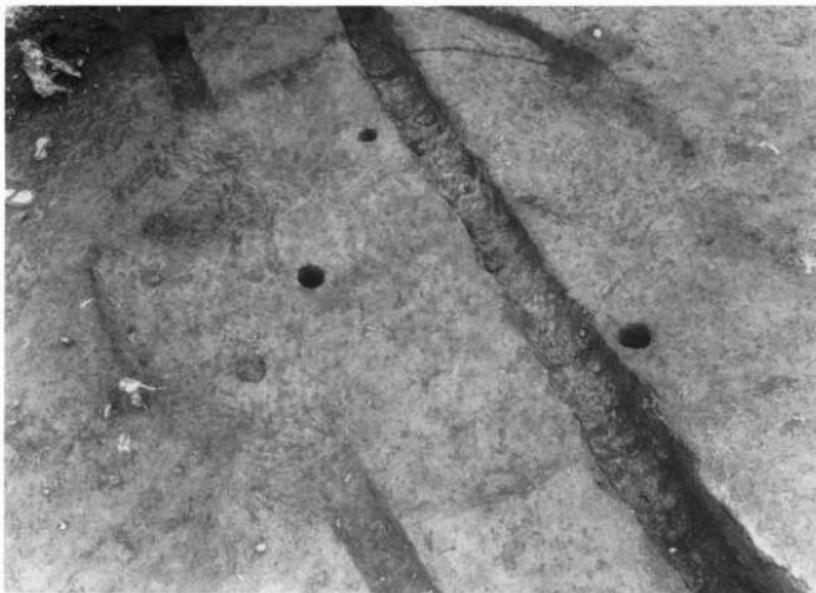
作業風景



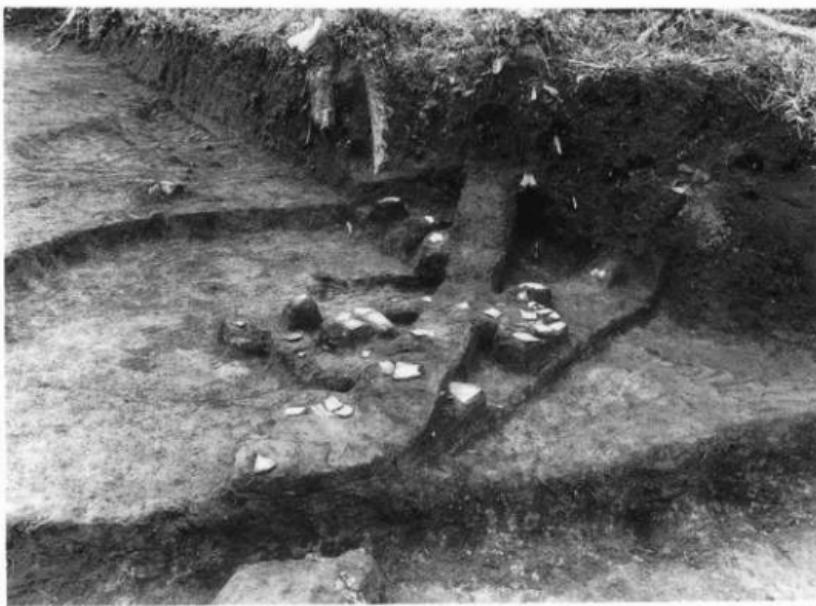
Loc.5J 遺物出土状況



3E-22 北壁土層断面



1号住居跡



1号住居跡遺物出土状況



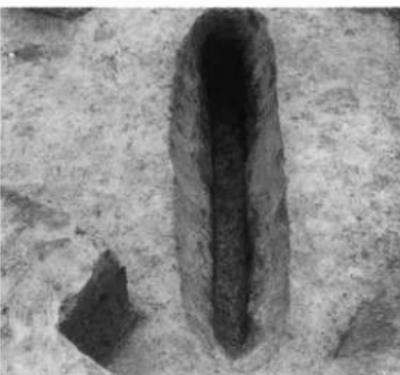
2号住居跡



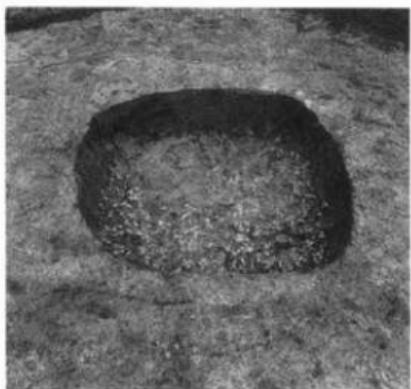
2号住居跡遺物出土状況



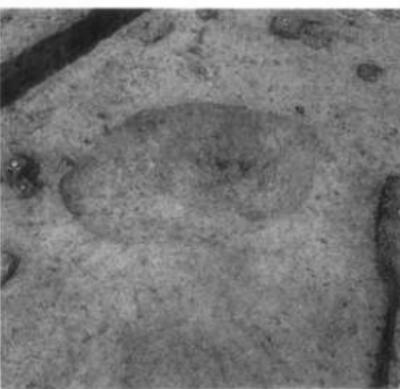
1号土坑



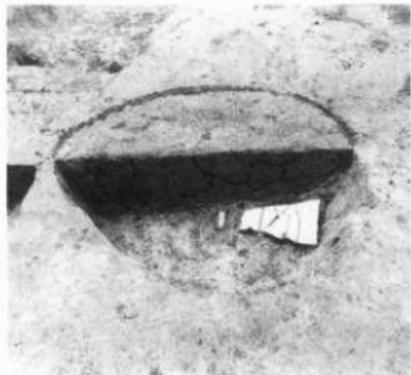
2号土坑



5号土坑



6号土坑



8号土坑



8号土坑



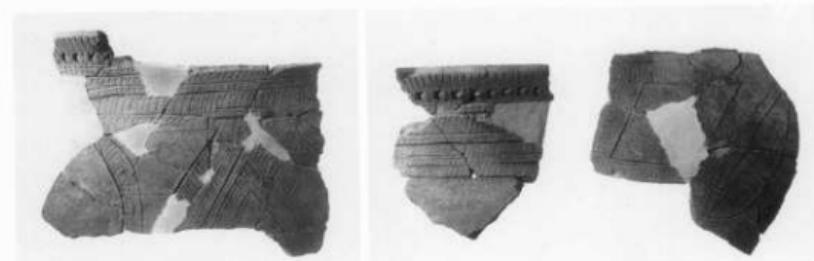
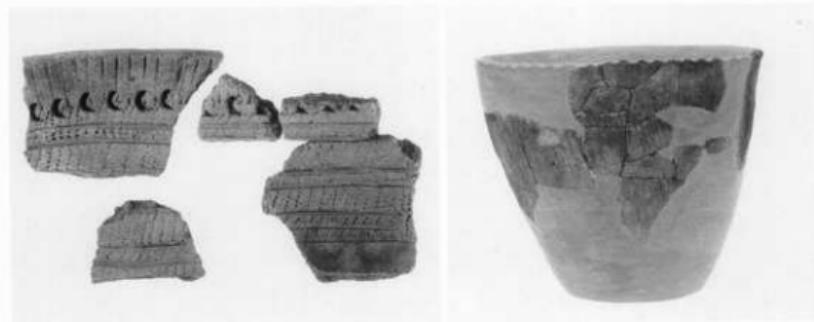
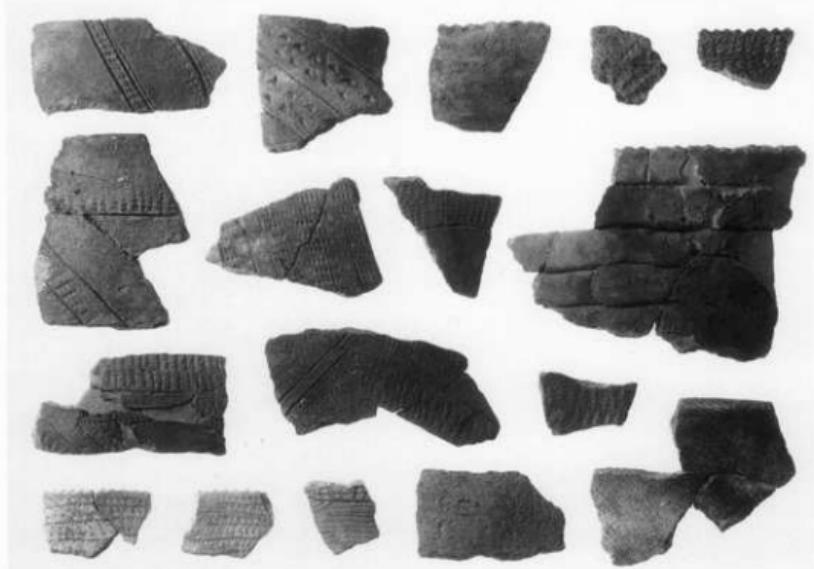
5号溝



道路状遺構



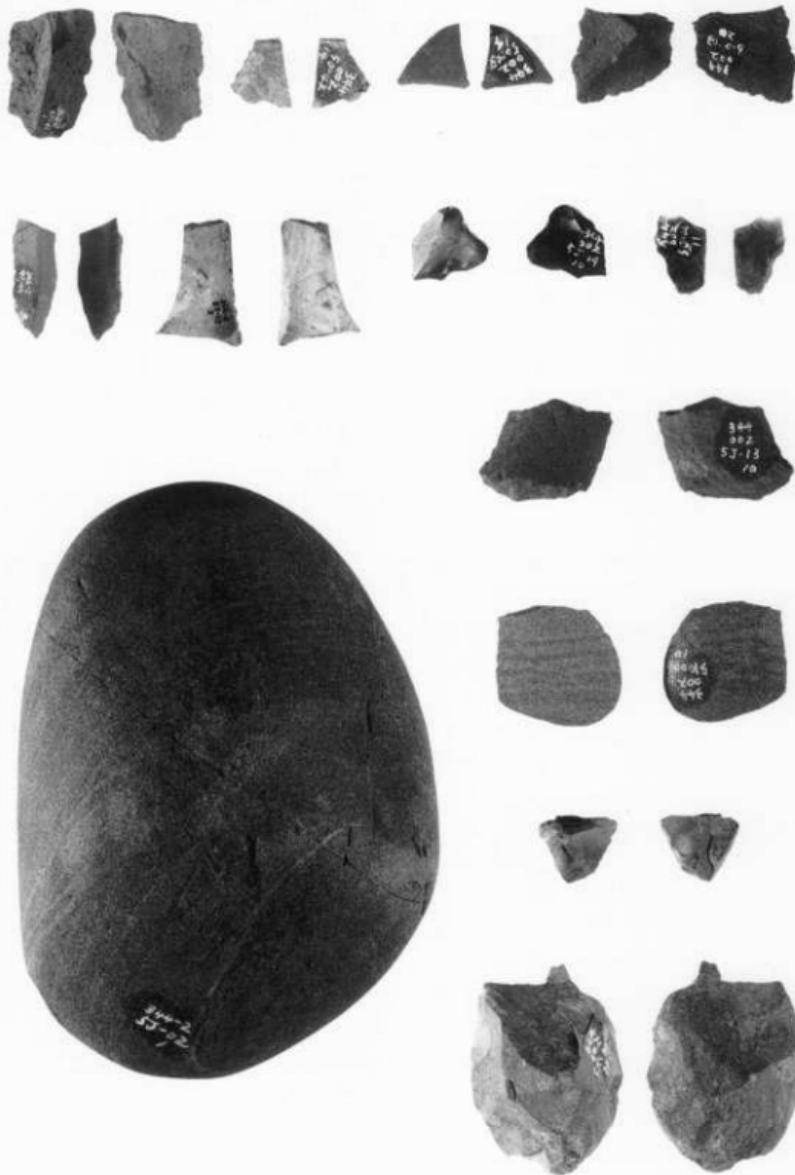
柵列



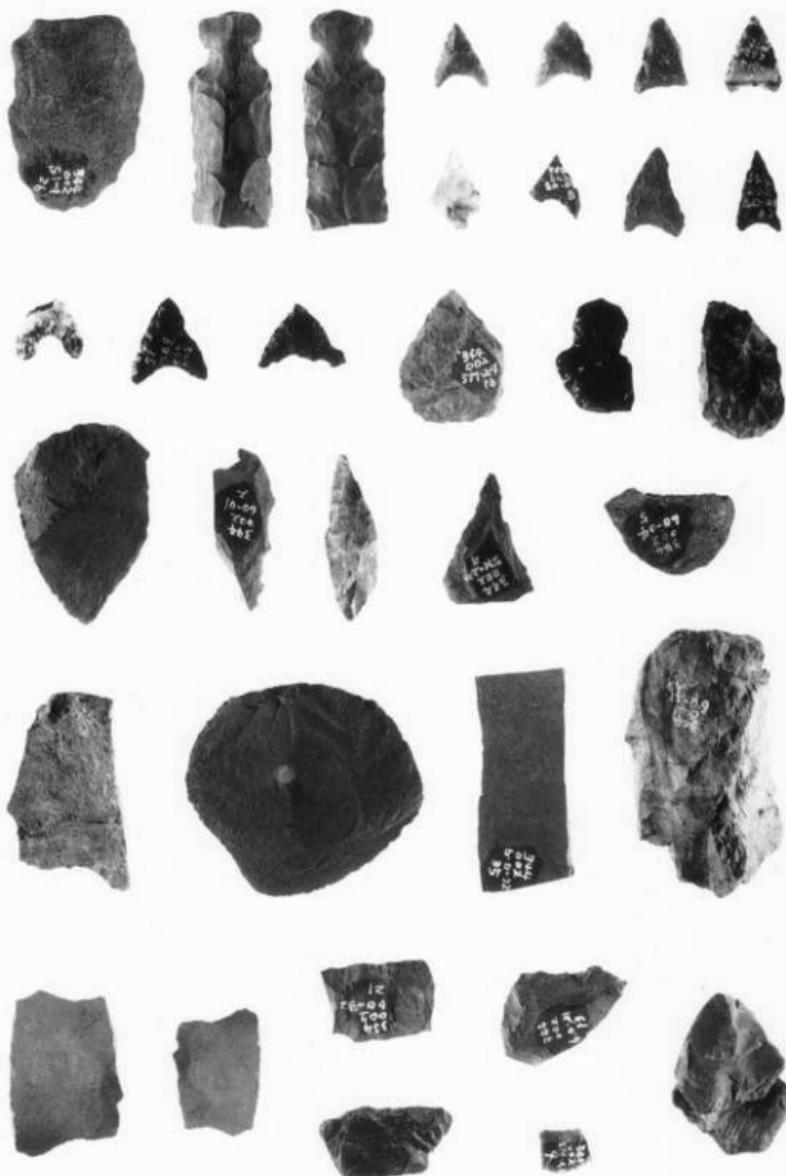
1号住居跡出土土器



2号住居跡出土土器



先土器時代遺物



縄文時代石器



溝状遺構出土土器



土製品

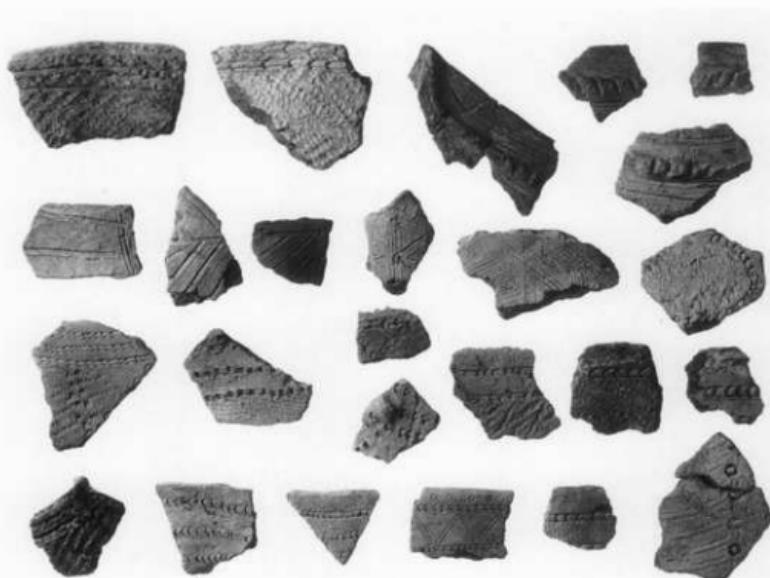


8号土坑出土土器

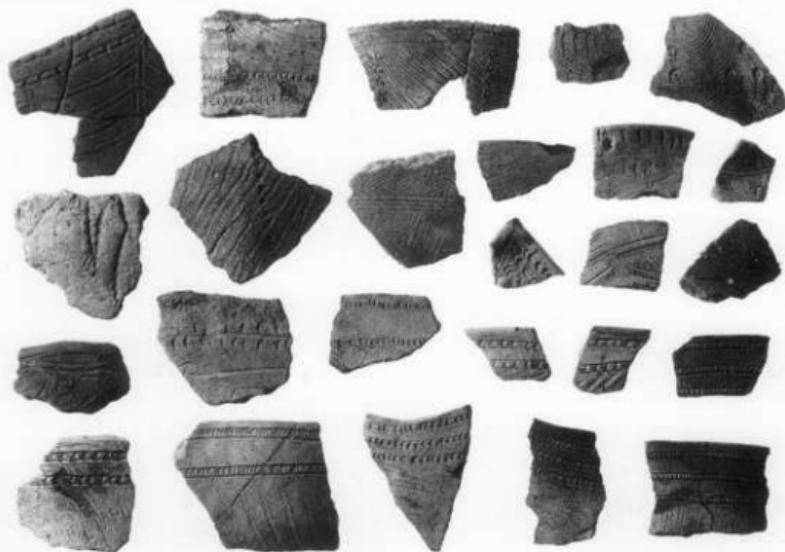
5・6号土坑出土土器



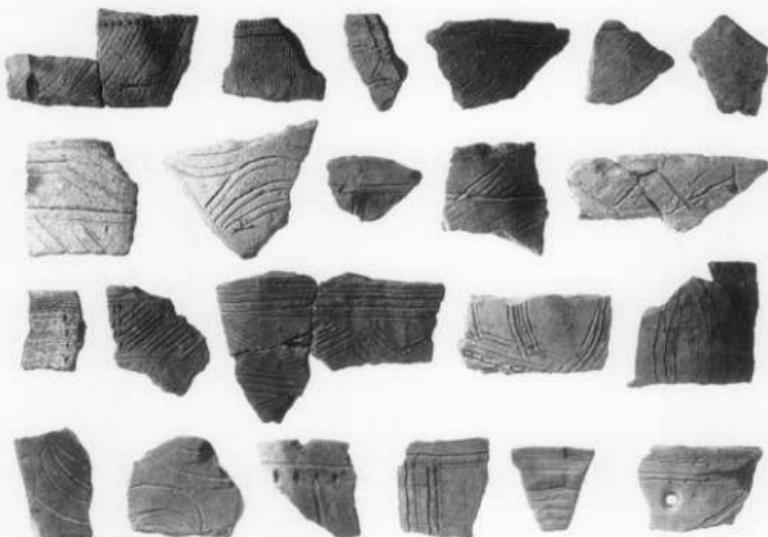
グリッド出土土器（第1群土器）



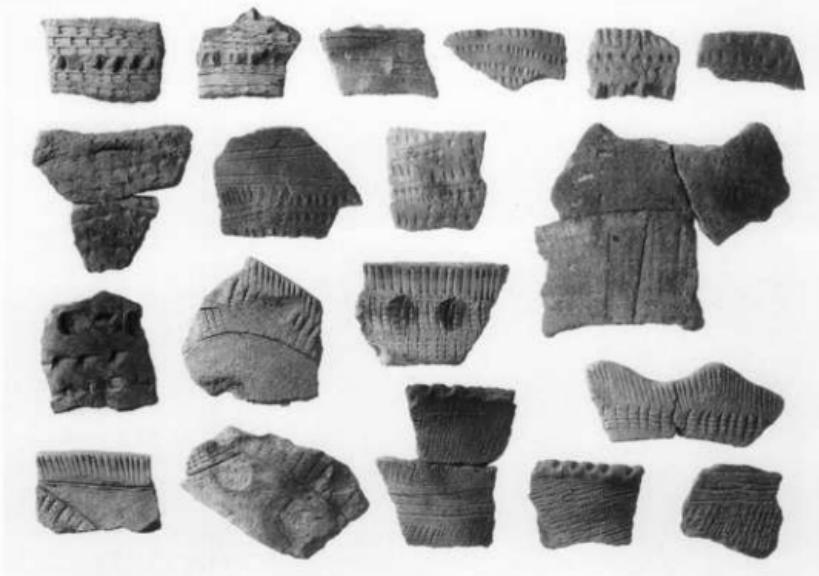
グリッド出土土器（第1群土器）



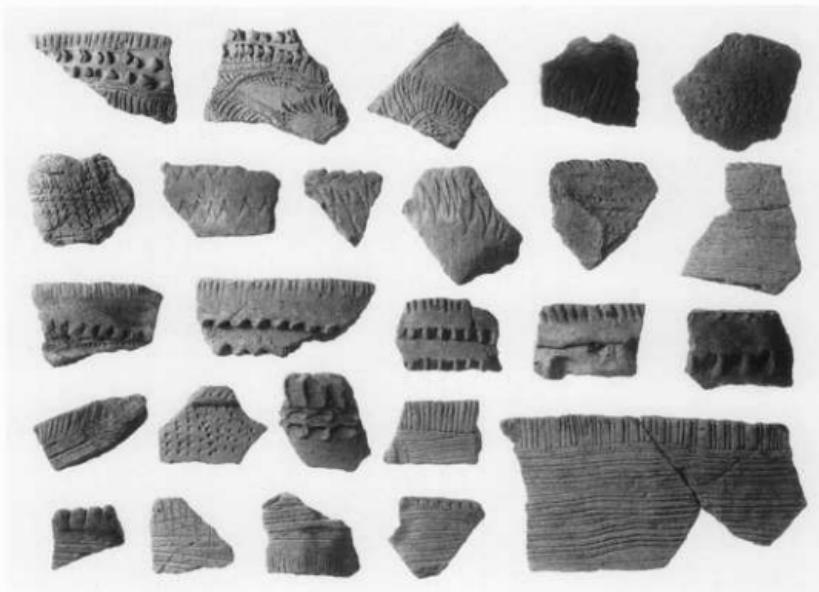
グリッド出土土器（第I・II群土器）



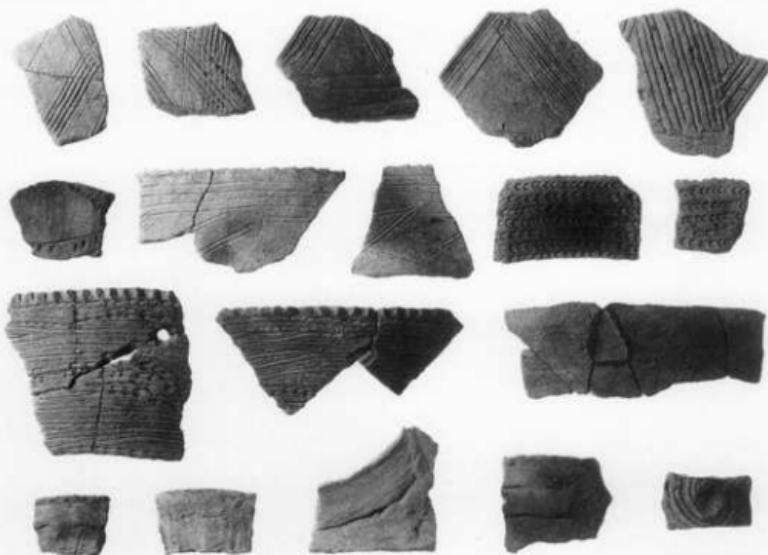
グリッド出土土器（第II群土器）



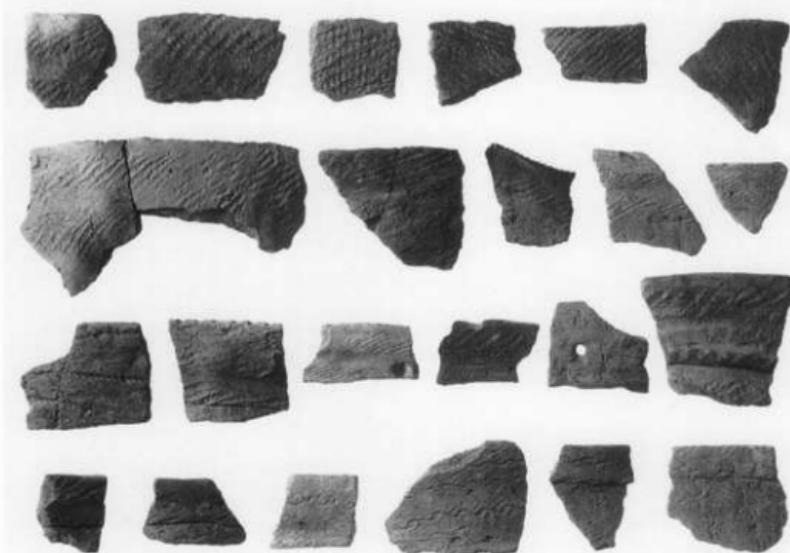
グリッド出土土器（第II群土器）



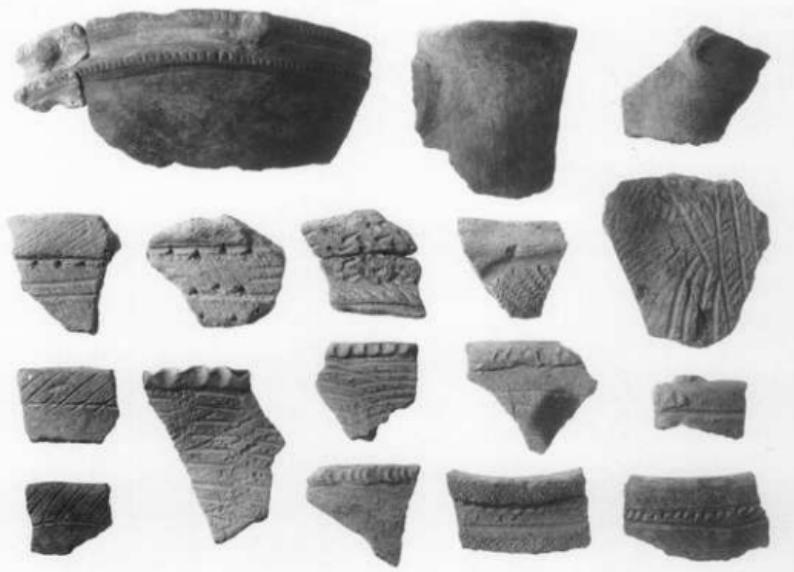
グリッド出土土器（第II群土器）



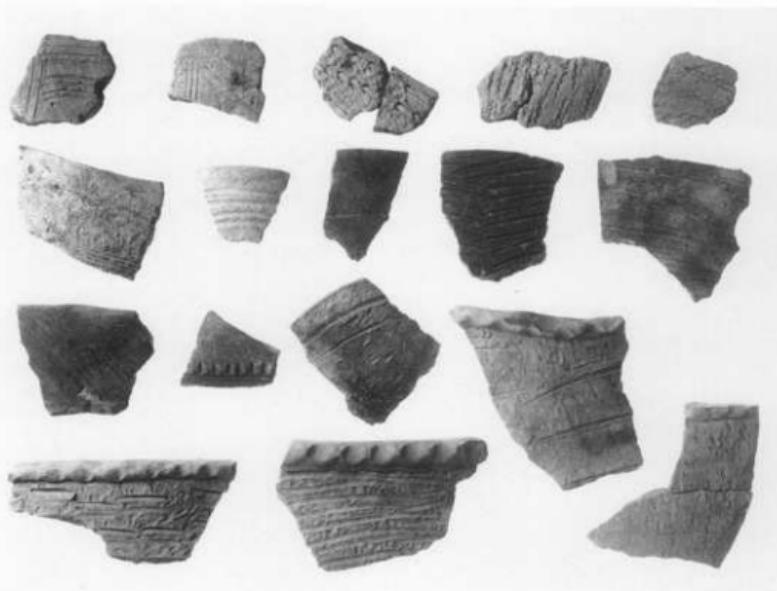
グリッド出土土器（第II・III群土器）



グリッド出土土器（第IV群土器）



グリッド出土土器（第V・VI・VII・VIII・IX群土器）



東調査区外出土土器

千葉県文化財センター調査報告 第210集  
小見川町天神後遺跡  
-成田小見川鹿島港線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-

---

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月31日 発行

発行 千葉県土木部  
千葉市市場町1-1

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡無番地

印刷 株式会社 正文社  
千葉市都町2-5-5

---